東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 24 －

時末遺跡第 1･2 次
永久笠田遺跡第 2 次

福岡県豊前市永久所在遺跡の調査

2016

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成19年度より、東九州自動車道（苅田北九州IC以南）に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成23･24年度に発掘調査を行った、福岡県豊前市に所在する時末遺跡第1･2次調査、永久笠田遺跡第2次調査の記録です。

時末遺跡・永久笠田遺跡はともに、扇状地中に埋没した微高地上に立地する集落遺跡です。時末遺跡は、北に隣接する塔田琵琶田遺跡とともに、古墳時代前期・後期・古代の集落を構成しており、その南端部にあたります。遺跡は過去の土地開発によって大きく削平されていましたが、各時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが確認されました。

一方永久笠田遺跡は、時末遺跡の東側に谷地形を挟んで隣りあう集落遺跡です。調査では集落の西端部を検出し、土坑や溝などの遺構を発見しました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成28年3月31日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県豊前市永久所在の時末遺跡第1･2次調査、永久笠田遺跡第2次調査の調査報告である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第24集にあたる。

2．発掘調査と整理報告は、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は吉村靖徳・宮田剛・海出淳平が、また遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は（有）空中写真企画に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は吉村・宮田・海出が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、岡田論の指導の下に実施した。

6．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「椎田」・「中津」・「下河内」・「土佐井」を加筆改変したものである。また、本書に使用した調査区位置図は豊前市発行の1/2,500基本図を加筆改変したものである。旧地形の復元に際しては、豊前市農林水産課より圃場整備前の地形測量図（「県営農村活性化住環境整備事業黒土西部地区計画平面図5」）、豊前市教育委員会より字図の提供を受けた。

8．本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9．本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ章を吉村・小澤佳憲が執筆し、Ⅲ章は宮田の調査記録をもとに小澤が遺構を、吉村が出土石器･鉄器を、岩橋由季が出土土器を分担して執筆した。Ⅳ章は吉村が執筆した。本書の編集は小澤が担当した。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査の経過 …… 1
2　調査の組織 …… 6

Ⅱ　位置と環境 …… 8
1　地理的環境 …… 8
2　歴史的環境 …… 10

Ⅲ　時末遺跡の調査の報告 …… 13
1　調査の概要 …… 13
2　1次調査の成果 …… 15
（1）概要 …… 15
（2）土坑 …… 16
（3）溝 …… 20
（4）その他の出土土器 …… 23
3　2次調査Ⅰ区の成果 …… 27
（1）概要 …… 27
（2）竪穴住居跡 …… 27
（3）掘立柱建物跡 …… 36
（4）柵列 …… 36
（5）方形竪穴状遺構 …… 38
（6）土坑 …… 43
（7）溝 …… 58
（8）その他の遺構 …… 65
（9）その他の出土土器 …… 65
4　2次調査Ⅱ区の成果 …… 71
（1）概要 …… 71
（2）掘立柱建物跡 …… 71
（3）土坑 …… 72
（4）溝 …… 73
（5）その他の遺構 …… 74
（6）その他の出土土器 …… 75
5　時末遺跡第1･2次調査出土のその他の遺物 …… 76
（1）土製品 …… 76
（2）石器・石製品 …… 80
（3）金属器 …… 81
6　総括 …… 81

Ⅳ　永久笠田遺跡の調査の報告…… 83
1　調査の概要 ……83
2　調査の成果 ……83
（1）概要 ……83
（2）土坑 ……83
（3）溝 ……86
（4）その他の出土遺物 ……86
3　総括 ……88

図版目次

図版1　1　調査区周辺の地形（上が北）　2　時末遺跡1·2次調査地（北から）
図版2　1　時末遺跡1·2次調査地（東から）　2　時末遺跡1·2次調査地（西から）
図版3　時末遺跡1次調査区（上が北）　2　時末遺跡2次調査Ⅰ区（上が北）
図版4　1　第1次調査基本土層（調査区北壁）　2　第2次調査基本土層（東側トレンチ北壁）
3　1次8·9·20号土坑（北西から）
図版5　1　1次10号土坑（西から）　2　1次12号土坑（北から）
3　1次15号土坑（北から）
図版6　1　1次18号土坑（西から）　2　1次1号溝土層（東から）
3　1次1号溝（東から）
図版7　1　2次Ⅰ区1·2号竪穴住居跡（南から）　2　2次Ⅰ区3号竪穴住居跡（北から）
3　2次Ⅰ区3号竪穴住居跡炉跡土層（北から）
図版8　1　2次Ⅰ区6号竪穴住居跡（南から）　2　2次Ⅰ区2号方形竪穴状遺構（北から）
3　2次Ⅰ区2号方形竪穴状遺構内土坑遺物出土状況（北から）
図版9　1　2次Ⅰ区2号方形竪穴状遺構内土坑完掘状況（北から）
2　2次Ⅰ区1号土坑（東から）　3　2次Ⅰ区24号土坑（南西から）
図版10　1　2次Ⅰ区26号土坑（北から）　2　2次Ⅰ区27号土坑　（北から）
3　2次Ⅰ区30号土坑（北西から）
図版11　1　2次Ⅰ区31号土坑（北から）　2　2次Ⅰ区36号土坑（北から）
3　2次Ⅰ区37号土坑（北から）
図版12　1　2次Ⅰ区37号土坑土層（北から）　2　2次Ⅰ区4号溝土層（東から）
3　2次Ⅰ区5·8号溝土層（南から）
図版13　1　2次Ⅰ区13号溝土層（南から）　2　2次Ⅰ区1号炉跡土層（南から）
3　2次Ⅰ区1号炉跡（南から）
図版14　1　2次Ⅱ区北側全景（西から）　2　2次Ⅱ区南側全景（西から）
3　2次Ⅱ区1号掘立柱建物跡（北西から）
図版15　1　2次Ⅱ区1号土坑（西から）　2　2次Ⅱ区2号土坑（東から）
3　2次Ⅱ区3号土坑（西から）

図版 16　1　2 次Ⅱ区 1 号溝土層（北西から）　2　2 次Ⅱ区 1･2 号溝（南から）
3　2 次Ⅱ区 3 号溝（南から）
図版 17　1 次調査区包含層等出土土器、2 次Ⅰ区 2･3 号竪穴住居跡 ･2 号方形竪穴状遺構出土土器
図版 18　2･3 号方形竪穴状遺構、36 号土坑、5 号溝、1 号炉跡、ピット出土土器
図版 19　2 次調査Ⅰ区包含層等出土土器、遺跡出土土製品
図版 20　遺跡出土石器・石製品
図版 21　1　永久笠田遺跡全景（北東から）　2　永久笠田遺跡Ⅱ区全景（左上が北）
図版 22　1　永久笠田遺跡Ⅰ区全景（北東から）2　永久笠田遺跡Ⅱ区東半部（北西から）
3　永久笠田遺跡Ⅱ区西半部（東から）
図版 23　1　永久笠田遺跡Ⅲ区全景（東から）　2　1 号土坑（東から）
3　2 号土坑（南東から）
図版 24　1　3 号土坑（西から）　2　4 号土坑（西から）　3　5 号土坑（南から）
図版 25　1　6 号土坑（北から）　2　7 号土坑（西から）　3　8 号土坑（西から）
図版 26　1　2 号溝（北西から）　2　Ⅲ区のピット群（北から）　3　調査風景
図版 27　永久笠田遺跡第 2 次調査出土土器
図版 28　永久笠田遺跡第 2 次調査出土石器

挿図目次

第 1 図　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）…… 2
第 2 図　時末遺跡第 1･2 次、永久笠田遺跡第 2 次調査区位置図（1/5,000）…… 5
第 3 図　圃場整備前の微地形（1/3,000）…… 9
第 4 図　遺跡周辺の歴史的環境 (1/50,000) ……11
第 5 図　時末遺跡第 1 次調査区、第 2 次調査Ⅰ区遺構配置図（1/300）……14
第 6 図　時末遺跡第 1 次調査区、第 2 次調査Ⅰ区基本土層図（1/60）……15
第 7 図　1 次 1 ～ 22 号土坑実測図（1/60）……18
第 8 図　1 次 1･2 号溝実測図（1/120）、土層・断面見通し図（1/60）……21
第 9 図　1 次調査区溝・ピット出土土器実測図（17 は 1/4、他は 1/3）……22
第 10 図　1 次調査区包含層等出土土器実測図その①（1 ～ 6 は 1/4、他は 1/3）……24
第 11 図　1 次調査区包含層等出土土器実測図その②（1/3）……25
第 12 図　2 次調査Ⅰ区 1 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……28
第 13 図　2 次調査Ⅰ区 2･3 号竪穴住居跡実測図（1/60）……31
第 14 図　2 次調査Ⅰ区 4･5 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……33
第 15 図　2 次調査Ⅰ区 6･7 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）……34
第 16 図　2 次調査Ⅰ区竪穴住居跡出土土器実測図（17 は 1/4、他は 1/3）……35
第 17 図　2 次調査Ⅰ区 1 ～ 3 号掘立柱建物跡実測図（1/60）……37
第 18 図　2 次調査Ⅰ区 1･2 号柵列実測図（1/60）……38

第 19 図　2 次調査Ⅰ区 1 ～ 3 号方形竪穴状遺構実測図（1/60･1/30）……40
第 20 図　2 次調査Ⅰ区 4･5 号方形竪穴状遺構実測図（1/60）……41
第 21 図　2 次調査Ⅰ区掘立柱建物跡・柵列・方形竪穴状遺構出土土器実測図
（19 は 1/4、他は 1/3）……42
第 22 図　2 次調査Ⅰ区 1 ～ 22 号土坑実測図（1/60）……46
第 23 図　2 次調査Ⅰ区 23 ～ 40 号土坑実測図（1/60）……50
第 24 図　2 次調査Ⅰ区 41 ～ 58 号土坑実測図（1/60）……54
第 25 図　2 次調査Ⅰ区 59 ～ 75 号土坑実測図（1/60）……56
第 26 図　2 次調査Ⅰ区土坑出土土器実測図（1/3）……57
第 27 図　2 次調査Ⅰ区 1 ～ 16 号溝実測図（1/60）……59
第 28 図　2 次調査Ⅰ区溝出土土器実測図その①（18･41 ～ 43･50 は 1/4、他は 1/3）……61
第 29 図　2 次調査Ⅰ区溝出土土器実測図その②（1/3）……63
第 30 図　2 次調査Ⅰ区 1 号炉跡実測図（1/30）……65
第 31 図　2 次調査Ⅰ区炉跡・ピット出土土器実測図（1/3）……66
第 32 図　2 次調査Ⅰ区包含層等出土土器実測図その①（1/3）……68
第 33 図　2 次調査Ⅰ区包含層等出土土器実測図その②（1/3）……69
第 34 図　時末遺跡第 2 次調査Ⅱ区遺構配置図（1/200）……70
第 35 図　時末遺跡第 2 次調査Ⅱ区基本土層 ･1 号溝土層図（1/40）……71
第 36 図　2 次調査Ⅱ区 1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)……72
第 37 図　2 次調査Ⅱ区 1 ～ 3 号土坑実測図（1/3）……73
第 38 図　2 次調査Ⅱ区出土土器実測図（13 ～ 15 は 1/4、他は 1/3）……75
第 39 図　1･2 次調査区出土土製品実測図（1/2）……76
第 40 図　1･2 次調査区出土石器実測図その①（2/3）……77
第 41 図　1･2 次調査区出土石器実測図その②（1/2）……78
第 42 図　1･2 次調査区出土石器実測図その③（36 は 1/4、他は 1/2）……79
第 43 図　1･2 次調査区出土石器実測図その④（1/4）……80
第 44 図　1･2 次調査区出土鉄器実測図（2/3）……81
第 45 図　永久笠田遺跡 2 次調査区遺構配置図（1/400）……82
第 46 図　1 ～ 8 号土坑実測図（1/40）……85
第 47 図　2 号溝土層図（1/60）……86
第 48 図　遺跡出土土器実測図（1/3）……87
第 49 図　遺跡出土石器・石製品実測図（1 は 2/3、2 ～ 7 は 1/2）……88

表目次

第 1 表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧 …… 3
第 2 表　塔田琵琶田遺跡群における既往の調査……13

Ⅰ　はじめに

1　調査の経過

東九州道の概要　東九州道は、福岡県北九州市の北九州ジャンクション（以下、JCTとする）で九州自動車道から分岐し、九州島の東側海岸線沿いに大分市・延岡市・宮崎市を経由して、鹿児島市の加治木JCTで再び九州自動車道に合流する幹線道路として計画された、延長約436キロメートルの高速自動車道である。

九州における高速道路網は、最も早くに計画された九州縦貫自動車道が主に九州島の西寄りを南北に貫いており、九州島中～南部における西側の交通の利便性は早くに向上した。その一方で、東側に位置する大分・宮崎地方の利便性はさほど改善されなかった。

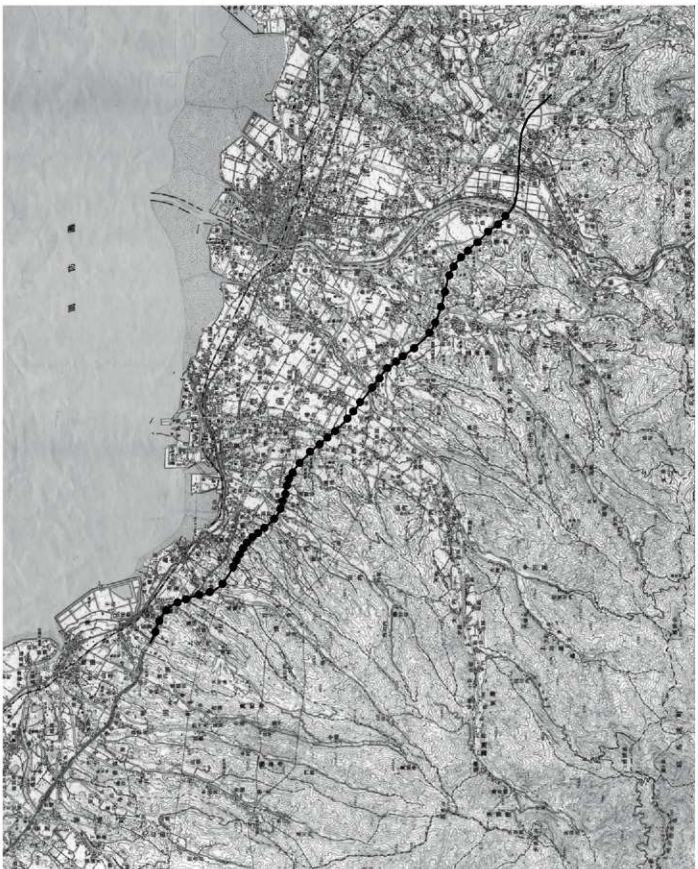
東九州道が開通すれば、九州地方の8カ所の基幹都市圏のうち東九州地方に位置する5カ所の基幹都市圏の間を相互に結ぶ、東九州地方の高速交通ネットワークが完成することになる。さらに、九州自動車道・大分自動車道・宮崎自動車道などと接続することで、九州地方全体の広域的な連携が向上し、地域産業及び地域経済の活性化を促し、沿線諸都市の発展等に資することが期待される。したがって、地域における重要な基幹交通として、全線開通が期待されているところである。

県内における東九州道の工事　福岡県内では、すでに2006年には九州縦貫道からの分岐地点である北九州JCTから、苅田北九州空港インターチェンジ（以下、ICとする）までの8.2ｋｍが開通している。苅田北九州空港～県境間は、2005年10月に日本道路公団の分割民営化により誕生した西日本高速道路株式会社（以下、NEXCO西日本（株）とする）九州支社により工事が進められており、苅田北九州空港IC～行橋ICまでが2014年3月に、行橋IC～豊津ICまでが2014年12月に開通した。豊津IC～椎田南ICまでは、一般国道自動車専用道路として1993年12月に全線開通した有料の椎田道路（椎田バイパス）を利用しており、この区間もやはり2014年12月に同時開通した。したがって、2016年3月現在、福岡県内における残された東九州自動車道の未開通区間は椎田南IC～県境部分であり、2018年度中の開通をめざして現在工事が行われている。

東九州道建設に先立つ発掘調査　東九州自動車道の整備計画策定からの文化財調査にかかる経緯については、先行する報告書に詳しく記載されているために本書では割愛することとしたい。なお、NEXCO西日本（株）中津工事事務所管内における埋蔵文化財の調査については、第1図・第1表にまとめているので参照されたい。以下では、本書で報告する時末遺跡第1･2次、永久笠田遺跡第2次調査に至る経緯と調査の経過を簡単に見ておきたい。

時末遺跡　時末遺跡は東九州自動車道の建設に先立つ試掘調査でその存在が初めて明らかになった遺跡である。埋蔵文化財包蔵地としてすでに周知化されていた塔田琵琶田遺跡が乗る埋没微高地と一連の地形の南側に隣接し、谷を挟んだ西側には早い段階で東九州自動車道の建設に先立つ試掘調査が行われて埋蔵文化財の包蔵が確認され、周知化された西ノ原遺跡が存在しており、遺跡が存在する可能性がある地点として注目されていた。

調査に至る経緯　2011年秋に行われたNEXCO西日本(株)と九州歴史資料館との定例協議の中で、NEXCO西日本（株）から、(仮称）豊前IC予定地内の数カ所で用地買収が終了したため、試掘調査を行ってほしいとの要望があり、九州歴史資料館では同年10月17～20日に試掘調査を行った。



第１図　東九州自動車道の概略と調査地点（中津工事事務所管内分）

地点	遺跡名	所在地	対象面積(㎡)	試掘年度	調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
2	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡築上町石堂	9027	H21～23	300	H23	H25	15集	
3	福岡茶切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16644	H21～23	1000	H22	H25	15集	
4	頭無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22				-	遺跡なし
5		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21				-	遺跡なし
6	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26972	H22	15000	H23･24	H25	15集	
7	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21･22	700	H22	H25	15集	
8		豊前市中村・馬場	10354	H21				-	遺跡なし
9		豊前市中村・松江	42434	H24				-	
10		豊前市松江	9905	H23				-	遺跡なし
11		豊前市松江	26570	H21･23				-	遺跡なし
12	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15集	
13		豊前市四郎丸	12986	H21･23				-	遺跡なし
14		豊前市四郎丸	2390	H21				-	遺跡なし
15		豊前市四郎丸	9735	H22				-	遺跡なし
16		豊前市四郎丸	10432	H22				-	遺跡なし
17	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21～23	3600	H22･23	H25	15集	
18		豊前市川内	16040	H21～23				-	遺跡なし
19	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23･24	760	H24	H26	21集	
20	大村湯福遺跡	豊前市大村	8762	H23･24	1300	H24	H26	21集	
21		豊前市大村	0					-	遺跡なし
22		豊前市大村	0					-	遺跡なし
23		豊前市大村	0					-	遺跡なし
24	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20･22				-	遺跡なし
25	大村上野地遺跡 大村シトキ田遺跡	豊前市大村・荒堀	10527	H20･22･23	2600	H23 H24	H25	15集 (H27予定)	豊前市により調査
26	荒堀山田原遺跡	豊前市荒堀	21821	H21～24	1000	H22	H25	15集	
27		豊前市荒堀	9823	H21･22				-	遺跡なし
28		豊前市大西	23122	H21～23				-	遺跡なし
29	塔田猛狐田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時末遺跡 永久笠田遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路土	63733	H21～24	35000	H23 ～ H25	H26 ～ H27	22・26・27集 25集・市34集 25集・市37集 24集(本冊) 24集(本冊)	一部豊前市により調査 一部豊前市により調査
30	久路土馬踏遺跡	豊前市久路土	9463	H23				-	遺跡なし
31	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23				-	遺跡なし
32	鬼木鉢立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21･23	5500	H24	H26	21集	
33	磯方古墳群 七ッ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町磯方	12456	H20～23	3500	H20 ～ H22	H24	8集	上毛町試掘
34	龍毛遺跡	築上郡上毛町磯方	11732	H20･21 ・23･24	5000	H21･24	H24	8集	上毛町試掘
35	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町磯方・尻高	11517	H20･21	7200	H20･21	H24	7集	
36	安雲山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10135	H20	9400	H20			上毛町により調査
37	安雲山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20･21		H20･21	H24	7集	〃
38		築上郡上毛町土佐井	22252	H20				-	遺跡なし
39	土佐井西遺跡	築上郡上毛町土佐井	21860	H20～22	4400	H22･23	H25	16集	
40	土佐井東遺跡	築上郡上毛町土佐井	13476	H20～22	600	H23	H25	16集	一部上毛町により調査
41	土佐井小迫遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21･22･24	1500	H22･24	H25	16集	
42	ガサメキ遺跡 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21･22･24	4000	H22・24	H26 H25	23集 16集	一部上毛町により調査
43		築上郡上毛町下唐原	25215	H21･22･23				-	遺跡なし
44	大久保横迫遺跡 (新池南古墳)	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16集	
45		築上郡上毛町下唐原	11997	H24				-	遺跡なし
46	皿山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22～24	12000	H23･24	H26	23集	
47	四ッ塚山古墳群	築上郡上毛町上唐原	7193	H22･23	6600	H23	H27	28集	
48	鏡迫古墳群	築上郡上毛町上唐原	4577	H25	2000	H25	H27	28集	
49	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24・25	H27	28集	
50	榎町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4735	H23	1050	H24・25	H27	28集	一部上毛町により調査

第1表　東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧

この結果、県道犀川豊前線の東を南北に並行して走る市道の東側に広がる広大な水田面２筆で、埋蔵文化財の包蔵を確認したため、事業主体側に対し発掘調査が必要である旨を伝えた。事業主体側はこの地点の一部を使って工事用道路を早急に開通させたい希望を持っており、協議の結果、要調査範囲のうち工事用道路予定地として西・南側の幅約15m分を設定し、この範囲について先行して同年度中に発掘調査を行い、年度末までに事業者側に引き渡すこと、また残りの範囲については翌年度中に調査を行うことで合意に至った。

この協議を受けて、九州歴史資料館では2011年12月より宮田を担当として工事用仮設道路予定地の調査に着手した。これが、時末遺跡第１次調査である。

一方、残された要調査範囲については、翌2012年に宮田が担当となって調査を行っている。これが２次調査Ⅱ区である。

さらに、2012年４月の定例協議の席上において、南北に走る市道の西側の用地買収が終了したこと、この範囲が工事に伴う市道の付け替え工事の予定地であることから早期に引き渡して欲しい旨の要望がNEXCO西日本（株）からあり、試掘・（必要に応じて）本掘調査をできるだけ早期に行う必要性が生じた。この状況を受けて九州歴史資料館ではまず、同年５月８日～10日に試掘調査を行ったが、その結果溝や小ピットなどからなる中世の遺跡が対象範囲に広く包蔵されていることが判明した。これを受けて急ぎ調整を行った結果、対象地の北側に隣接する西ノ原遺跡第３次調査地点で海出が行っていた発掘調査を一度中断させてその人員をこの地点の調査に充てることとし、７～８月に発掘調査を行った。これを時末遺跡第２次調査Ⅱ区とする。

１次調査の経過　１次調査は2011年12月１日より着手した。重機による表土剥ぎを行ったところ、調査区西側と東側では谷状の落ち地形が南北に伸びており、そのあいだに残された幅35mほどの範囲に遺構が残存している状況があらわになった。ただし、この遺構が残された部分も著しい削平を受けて基盤層である黄白褐色砂礫土が部分的に露出しており、遺構の残存状況はきわめて悪かった。

年が明けて2012年１月中旬より作業員による人力作業を開始し、検出作業を行った結果、土坑22基、溝２条、多数のピットなどを検出した。その後、遺構の掘り下げを行い、２月12日にはほぼ完掘して空中写真撮影を行った。その後、図化・だめ押しを行って３月上旬には１次調査を終了した。

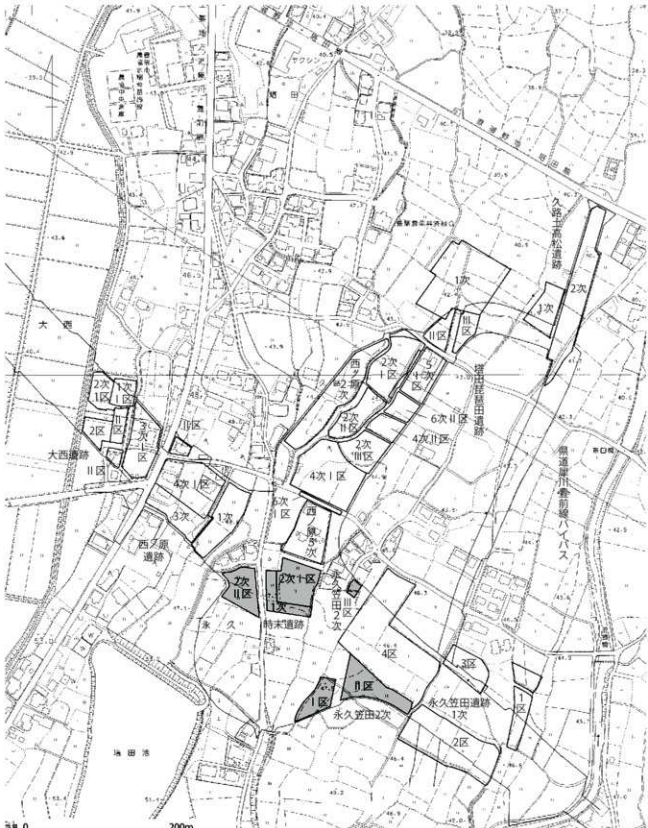
調査面積は915㎡、出土遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器などでパンケースに20箱ほどであった。

２次調査Ⅰ区の調査の経過　２次調査Ⅰ区は、年度が明けて2012年４月上旬より作業に着手した。重機による表土剥ぎを行ったが、地山の状況は南に隣接する１次調査区と同様であり、遺構の遺存状態はきわめて悪く、遺構の検出に多くの労力を費やすこととなった。さらにこの年は降雨が多く、また地山からの湧水もあって調査は難航した。10月７日にようやく空中写真撮影にこぎ着け、図化・だめ押し作業の後埋め戻しを行い、翌2013年１月上旬に現地作業を終えた。

調査面積は2,000㎡、検出した遺構は竪穴住居跡７棟、方形竪穴状遺構７基、掘立柱建物跡３棟、土坑75基、溝16条のほか、欅列や炉跡、多数のピットなど、出土遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器などでパンケース20箱ほどであった。

２次調査Ⅱ区の調査の経過　２次調査Ⅱ区は上記のような事情により2012年７月６日より発掘調

査に着手した。現地は圃場整備時に厚く客土されており、重機を用いて表土を掘削し、現地表下約1～1.5mで遺構面を検出した。遺構面は火山噴出物由来の黄褐色粘質土を主体とし、火山弾由来の腐り礫をやや多く含む水はけの悪い土壌で、しばしば降雨により水没して遺構面が泥沼と化し、好天が続くと粘質土が固く乾いて掘削が困難になるという悪条件であったが、調査は比較的順調に進み、7月30日には埋め戻しを終了した。



第2図　時末遺跡第1･2次、永久笠田遺跡第2次調査区位置図（1/5,000）

調査面積は845㎡、検出した遺構は中世に属する溝3条、土坑3基と掘立柱建物跡1基のほかピット群などで、出土遺物は主に中世の陶磁器類のほか下層に残されていた包含層中などから縄文土器が出土し、パンケース2箱ほどであった。

永久笠田遺跡　永久笠田遺跡は、県営ほ場整備事業に先立つ試掘調査により周知化された遺跡であり、2005年度に豊前市教育委員会により発掘調査が行われている。このときの調査は、時末遺跡の東約50mの位置から東に広がる水田面約10,000㎡に対して行われ、主に縄文時代・弥生時代・古代の遺構・遺物が出土した（豊前市教委2014）。しかし、このときに包蔵地として周知化された範囲はほぼ調査範囲のみであり、周辺については周知の包蔵地とされないままであった。

今回の調査地点は、このときの調査地点の南西側に隣接するが、上記により周知の埋蔵文化財包蔵地範囲外であり、埋蔵文化財が包蔵されている可能性がある地点として当初より協議の俎上に載せられていた。

調査に至る経緯　2012年4月に行われた定例協議の席上において、（仮称）豊前IC南側の広い範囲の買収が終了したので、試掘調査を行ってほしいとの連絡がNEXCO西日本（株）よりあった。九州歴史資料館では、これを受けて同年5月8～10日に試掘調査を行ったところ、前記の時末遺跡第2次調査Ⅱ区地点のほか、時末遺跡第1次調査区の西側、過去の圃場整備時に行われた永久笠田遺跡第1次調査の南側隣接地にあたる水田面の広い範囲において、ピットや溝、包含層などが検出され、埋蔵文化財の包蔵が確認された。

その後、同年7月25日の事業者との協議の中で、当該箇所のうち調査時にⅠ区・Ⅱ区とした範囲について、次年度当初には水路・道路ボックス設置や水路掘削などの工事に着工したい旨の希望が示されたため、九州歴史資料館では、該当の範囲について同年度内に発掘調査を完了するタイミングで着手することで調整を図ることとなった。

調査の経過　調査は吉村が担当して行った。2012年10月31日に重機による表土剥ぎをⅠ区から開始した。翌11月1日に作業ヤードを整備し、11月6日に建機を搬入した。そして11月8日から作業員を投入し、遺構検出をはじめた。調査区の東端部は台地上であったが、西側に向かって谷状に落ち込んでいて湧水の処理に手間取り、調査はやや難航した。しかし、11月30日までには遺構の検出と谷埋土の掘削を終え、11月30日に全体写真撮影を行った。

Ⅱ区はⅠ区の調査と一部併行しながら11月15日から重機による表土剥ぎを開始した。12月4日から作業員を投入して遺構検出をはじめた。Ⅱ区の西端部には翌春の水田耕作開始までに終了させる必要がある水路工事が予定されていたため、調査期限が限られていたが、2月13日にⅡ・Ⅲ区の全体写真撮影を行いⅡ区の調査を終了した。Ⅲ区はⅡ区と併行して2月1日に着手し、2月28までに埋め戻し作業を完了した。

調査面積はⅠ区が720㎡、Ⅱ区が1,480㎡、Ⅲ区が100㎡をはかる。検出した主な遺構には土坑7基、溝2条があり、出土遺物としては縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器、石器などがみられる。

2　調査の組織

発掘調査（平成23･24年度）、整理報告（平成27年度）に関わる関係者は次の通りである。

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 27 年度
西日本高速道路株式会社九州支社			
支社長	本間　清輔	本間　清輔	本間　清輔（～6.24）
			北田　正彦（6.25～）
中津工事事務所長	上羽坪　勲（～6.30）	三瀬　博敬	宗方　鉄生
	三瀬　博敬（7.1～）		
副所長（技術担当）	森田　忠敏（～6.30）	小島　二郎	
	小島　二郎（7.1～）		
副所長（事務担当）	中村　重俊	中村　重俊	
副所長			中村　重俊
総務課長	宇都　良典	宇都　良典	内田　伸博
用地課長			和田　勝
用地第一課長	藤江　正	藤江　正	
工務課長	渡邉　浩延	渡邉　浩延（～1.31）	本多　正和
		本多　正和（2.1～）	
豊前工事長	川畑　一弘	川畑　一弘	
上毛工事長	當房　周三（～6.30）	荒平　裕次	
	荒平　裕次（7.1～）		
豊前上毛工事長			大岡　慶巳
九州歴史資料館			
総括			
館長	西谷　正	西谷　正	杉光　誠
副館長	南里　正美	篠田　隆行	伊崎　俊秋
参事			飛野　博文
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚　孝憲
文化財調査室長	飛野　博文	飛野　博文	吉村　靖徳
文化財調査室長補佐	吉村　靖徳	吉村　靖徳	
文化財調査班長	小川　泰樹	小川　泰樹	秦　憲二
庶務			
総務室　総務班長	塩塚　孝憲	長野　良博	
庶務担当	近藤　一崇		
調査・整理報告			
文化財調査室　企画主幹		吉村　靖徳（調査）	吉村　靖徳（報告）
学芸調査室　技術主査			小澤　佳憲（報告）
臨時調査員	宮田　剛（調査）	宮田　剛（調査）	
		海出　淳平（調査）	
整理補助員			岩橋　由季（報告）

発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加された方々、豊前市教育委員会の関係者の方々など、多くの方よりご協力を賜った。この場を借りて感謝申し上げたい。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

立地の概要　各遺跡は九州島北西部に位置し、行政区分としては福岡県豊前市に属する。福岡県では、しばしば行橋市・京都郡・築上郡・豊前市からなる県東部地域を、京都郡・築上郡の頭２文字をとって京築地域と呼び、この点からいえば京築地域の中央南寄りともいえる。

地形と地質　京築地域は、大分県中津・宇佐地域と一体化して幅のせまい海岸平野を形成している。この海岸平野は、北東は周防灘により遮られ、北は蔵持山－戸城山－障子ヶ岳と伸びて平尾台へと連なる山群、西・南側は英彦山系の支脈で南東に伸びる国見山－経読岳－八面山群と国東半島にそびえる両子山群により画されて一つの地域的なまとまりを形成しているが、その中でもさらにほぼ中央部を国見山から東へと広がる丘陵群によって南北に分断されて大きな二つの平野を形成する。北の京都平野は今川・祓川など、南の中津平野は佐井川・山国川・犬丸川・駅館川・寄藻川といった大小の河川群や海の開析・堆積作用により形成されたものである。地質的に見ると、北側に位置する京都平野東側の蔵持山・障子ヶ岳・平尾台などの山地の基盤層は石灰岩や花崗岩からなり、一方南側に位置する中津平野の西を画する国見岳・経読岳・八面山～国東半島といった山地の主な基盤層は阿蘇火砕流由来岩のほか大野・豊肥・九重火山岩類など、形成時期の異なる火山岩が複雑に入り乱れる。

遺跡の立地　各遺跡は、豊前市の東側に位置する。豊前市は東西でその地形が大きく変化しており、西側は犬ヶ岳－国見山系から北東に向かって流出する何本もの小河川により刻まれた細長い谷と尾根筋が連続する丘陵地帯をなすのに対し、西側では岩岳川・土佐井川といった比較的規模の大きな河川の解析・堆積作用により、扇状地が形成されている。

この扇状地帯は比較的広い平野を形成しており、特に圃場整備の進んだ昨今では、航空写真などでは平坦な土地が広域に広がっているように見える。しかし、その内部には細かい起伏が見られる。最もわかりやすいのは求菩提道（現在の県道32号犀川豊前線）が通る千束原台地で、周辺の水田地帯より５mほど標高が高い尾根上の台地が南北方向に長く伸び、その東西には谷地形がこれに平行してやはり細長く伸びている。千束原台地の西には大西台地・野田台地・大村台地・荒堀台地などの低台地が同じように南北に伸び、その間には細長い谷が形成されている。これらはいずれも市域東部で観察される谷地形が扇状地堆積物によって埋積して尾根状丘陵頂部との比高差が縮まったものと考えられ、付近における集落遺跡立地の好適地となっている。

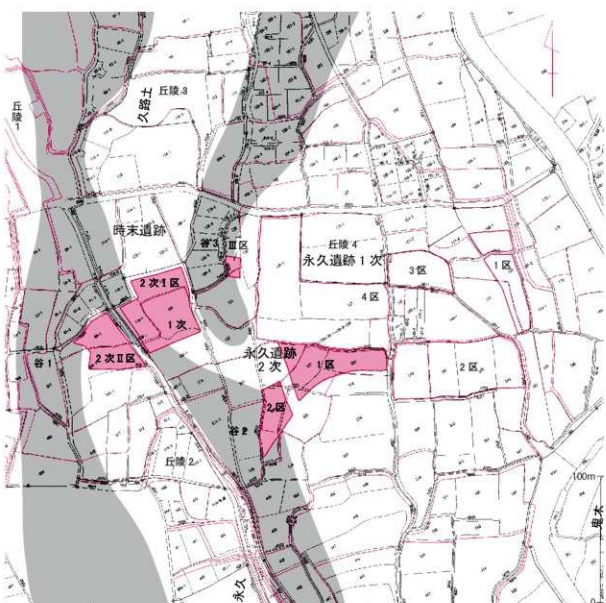
こうした台地のうち、低地との比高差が小さいものは、比較的早くより水田化され、水田区画にその痕跡をとどめていたが、昭和50年代より本格化した圃場整備により、こうした水田区画はその大半が失われてしまい、永久地区の付近ではもうほとんど残されていない。しかし、東九州自動車道の建設に先立って予定地のほぼ全面に多数の試掘トレンチを入れた結果、地表下にはこうした微高地・微低地が残されており、これらが遺跡の有無と大きく関わっていることが分かってきた。時末遺跡・永久遺跡はともに、このような埋没地形に即した立地をもつのが大きな特徴である。具体的にみてみよう。

遺跡周辺の微地形と立地条件　第３図は、圃場整備前の水田区割に、田面標高図より復元した

50cm コンターを重ねたものである。図の左側には、南北に伸びる千束原台地がある（丘陵 1）。その右にはこれに並行して南の塔田池に端を発する用水路が南西から北東に向かって流れ出しており、この用水路に沿って一段低い水田区画が存在することから、塔田池から用水路に沿って谷地形が南西から北東に伸びていたことが分かる（谷 1）。

さらに、この谷の東には塔田池の東岸、永久集落の北西部から北に伸びる細長い尾根の支脈があり（丘陵 2）、その東側の落ち際にはやはり谷地形があって（谷 2）、この谷地形は丘陵支脈の裾に沿って南北に伸びており、時末遺跡の調査区付近で先述の谷地形と合流する。これらの微地形を前提として時末遺跡における各調査区の立地をみると、1 次調査区と 2 次調査Ⅰ区は丘陵支脈の裾に伸びる谷の東岸にあって埋没した微高地中に立地し、一方 2 次調査Ⅱ区は同じ谷の西岸にあって細長い丘陵支脈の頂部に位置することが分かる。

さらに、地図上ではやや不鮮明だが、試掘調査の結果、時末遺跡と永久笠田遺跡のあいだには幅 50m ほどの深い谷地形が南北に走ることが判明しており（谷 3）、両遺跡の間を明瞭に区画する。



第 3 図　圃場整備前の微地形（1/3,000）

遺跡群の基盤層と地質　以上の立地条件から、時末遺跡・永久笠田遺跡の基盤層は尾根状台地、そして市域東部の尾根状丘陵の基盤層と共通することがわかるだろう。すなわち、遺跡が立地する土地の地質は火山岩由来の赤土であり、内部にしばしば火山弾由来の腐り礫を含む。その上層は土壌化作用によって黒ボク化し、また下層には洪積世に形成された扇状地堆積物である砂礫層が広がっている。遺構は、付近の地名である「久路土(黒土)」の由来となった黒ボク土を切り込んで、しばしば下層の砂礫層にまで達している。

調査地の付近では圃場整備などによる削平はしばしば下層の砂礫層にまで及び、場所によっては遺構面に黄白褐色の砂礫層が広く現れている。砂礫層は非常に固く掘削が困難であり、時末遺跡第1次調査地のように、削平によって砂礫層が遺構検出面に広く露出するような場所では、遺構の堀方はしばしば砂礫層上面までにとどまり、削平の結果ほとんど残されていない。一方、基盤層の表面が深く潜る場所では黒ボク土と赤土がよく残され、遺構の残存状況は比較的よい。

2　歴史的環境

概要　調査地周辺は旧豊前国上毛郡に含まれる。上毛郡内には山田郷・炊江郷・多布郷・上身郷の4郷が知られる。このうち山田郷は豊前市山田周辺に、炊江郷は同大村周辺に、多布郷は上毛町唐原周辺に、上身郷は土身の誤記として吉富村周辺に、それぞれ比定する説がある。これらの説に従えば、調査地付近は炊江郷に含まれようが、炊江郷の比定の根拠はいまのところ「梶屋」地名のみでありやや弱い部分も残る。

ここでは、西から東に向かって周辺の発掘調査事例を紹介しながら簡単に遺跡を取り巻く歴史的環境をひもといてみたい。

千束原台地上の遺跡　調査地の西側を南北に伸びる千束原台地と、そこから派生した尾根状丘陵は、古くより人々の生活適地として利用されてきた。最も古い時期の生活の痕跡としては東風ノ原遺跡出土と伝わる弥生時代前期後半の土器片がある[1]。東九州自動車道が千束台地を横切る付近のやや北側から採集された。その南には、前期末～中期中葉・後期中葉～末の集落遺跡として東九州道の建設に先立って台地の東側斜面で調査された西ノ原遺跡が広がり、前期段階においては一体となって集落を構成していた可能性があろう[2]。

西ノ原遺跡の後期集落においては、後期中葉に掘削された環濠が検出された点は注目される。この環濠は丘陵を横断して西側斜面に広がる大西遺跡[3]の一部をも囲い込んでおり、両遺跡はもと同一の集落を形成していたことが知られるようになった[4]。また、両遺跡では古墳時代後期～古代の集落跡も検出されている。千束原台地の北側にかつて広がっていたとされる千束原古墳群の造墓集団の一つであろう。また、丘陵の南部では永久遺跡において古墳時代後期～古代の集落跡が出土しており、やはり千束原古墳群の造墓集団の可能性があろう。

台地東側から北に派生した尾根状丘陵上では、時末遺跡で中世の集落跡が検出された[5]。南の永久集落にかけて広がるものとみられる。

岩岳川西岸段丘上の遺跡　千束原台地の東から岩岳川の西岸にかけては、水田化した扇状地帯が広がる。現在では圃場整備が進み平坦に造成されているが、もとは小谷と微高地が複雑に展開する地形で、主に微高地上に縄文時代～古代の遺跡が立地する。最も古い資料は本報で報告する時末遺跡

1 中村団後遺跡　2 中村ヒバル遺跡　3 灰ノ木古墳　4 黒部古墳群　5 黒峰尾古墳群　6 四郎丸窯跡　7 四郎丸畑原遺跡
8 川内下野添遺跡　9 川内南原遺跡　10 川内楠木遺跡　11 平原城跡　12 平原横穴墓群　13 山田城跡　14 鳥越今井野遺跡
15 鳥越下屋敷遺跡　16 大村湯福遺跡　17 大村天神林遺跡　18 大村道場遺跡　19 大村石畑遺跡　20 大村シトキ田遺跡
21 青畑向原遺跡　22 荒堀中ノ原遺跡　23 荒堀車地遺跡　24 荒堀大保遺跡　25 荒堀雨久保遺跡　26 今市向野遺跡
27 下原遺跡　28 昭和町遺跡　29 吉木穴井遺跡　30 吉木常末遺跡　31 吉木遺跡　32 吉木芦町遺跡　33 市丸遺跡群
34 三毛門放生田遺跡　35 榆生山古墳　36 六郎遺跡群　37 小石原泉遺跡　38 上毛条里遺跡　39 千束原古墳群　40 旭城跡
41 上塔田遺跡　42 塔田琵琶田遺跡　43 中大西遺跡　44 西ノ原・大西遺跡群　**45 時末遺跡**　**46 永久笠田遺跡**　47 永久遺跡
48 上大西遺跡　49 才尾平原遺跡　50 如法寺跡　51 大河内庄屋屋敷遺跡　52 扶間宮ノ下遺跡　53 薬師寺塚原遺跡
54 河原田四ノ坪遺跡　55 河原田善丸遺跡　56 河原田塔田遺跡　57 鬼木四反田遺跡　58 鬼木鉾立遺跡　59 久路土橋掛遺跡
60 久路土鐘撞田遺跡　61 久路土輪遺跡　62 久路土六田遺跡　63 久路土高松遺跡　64 久路土芝掛遺跡　65 黒土城跡
66 黒土七夕遺跡　67 広瀬城跡　68 高田城跡　69 大ノ瀬官衙遺跡　70 池ノ口遺跡　71 原田遺跡　72 安雲城跡
73 安雲ハタガタ遺跡　74 緒方古墳群　75 七ッ枝遺跡　76 龍毛遺跡　77 ハカノ本遺跡　78 山田窯跡群　79 安雲山田遺跡
80 山田１号墳　81 尻高後椀遺跡　82 穴井横穴墓群　83 徳並横穴墓群　84 友枝瓦窯跡　85 土佐井ミソンデ遺跡
86 土佐井小迫遺跡　87 唐原神籠石　88 ガサメキ遺跡　89 宇野台古墳群　90 桑野塚古墳群　91 宇野代遺跡　92 上桑野遺跡

第４図　遺跡周辺の歴史的環境 (1/50,000)

第１次調査地で出土した縄文時代早期の押型文土器である。流れ込みの資料で、該期の遺跡が上流側にあったものであろう。

永久笠田遺跡でも縄文時代の資料が出土している[6]。豊前市教育委員会が圃場整備に先立って行った調査では、遺跡の性格は不明ながら土坑やピットなどから縄文時代中～晩期の土器が出土した。なお永久笠田遺跡の北側でも断片的ではあるが久路土高松遺跡で縄文時代の集落が調査されている[7]。

久路土高松遺跡のさらに北側に広がるのが、弥生時代中～後期・古代の集落跡である久路土芝掛遺跡である[8]。弥生時代前期末の松菊里型住居跡や後期の花弁型住居跡などが出土し注目される。

千束台地の東側で、谷地形を挟んで台地と並行に南北に伸びる埋没微高地上に営まれたのが、塔田琵琶田遺跡群である[9]。圃場整備事業に先立つ調査で存在が知られ、東九州自動車道（仮称）豊前 IC の建設に伴い集落の大半が発掘調査された。古墳時代前期・後期・古代の大規模な集落跡で、特に古墳時代後期にはＬ字状カマドを伴う竪穴住居跡が大量に出土しており注目される。

参考文献

(1) 豊前市史編纂委員会編 1993『豊前市史』考古資料編、豊前市。
(2) 豊前市教育委員会 2015『西ノ原遺跡』豊前市文化財調査報告第 37 集。
九州歴史資料館 2016『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 25　西ノ原遺跡・大西遺跡』。
(3) 豊前市教育委員会 1988『大西遺跡』豊前市文化財調査報告第５集。
(4) 豊前市教育委員会 2015『大西遺跡・下大西遺跡』豊前市文化財調査報告書第 34 集。
九州歴史資料館 2016『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 25　西ノ原遺跡・大西遺跡』。
(5) 時末遺跡第２次調査Ⅱ区。本報で報告する。
(6) 豊前市教育委員会 2014『永久笠田遺跡』豊前市文化財調査報告書第 33 集。
永久笠田遺跡第２次調査区。本報で報告する。
(7) 九州歴史資料館 2013『久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡』福岡県文化財調査報告書第 242 集。
(8) 註７に同じ。また豊前市教育委員会が 2013 年度に一部調査している。
(9) 豊前市教育委員会 2011『塔田琵琶田遺跡』豊前市文化財報告書第 29 集。
九州歴史資料館 2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 22　塔田琵琶田遺跡第２次』。
九州歴史資料館 2016『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 26　塔田琵琶田遺跡第４次』。
九州歴史資料館 2016『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 27　塔田琵琶田遺跡第６次』。
九州歴史資料館 2016『塔田琵琶田遺跡 3･5 次、塔田五反田遺跡、塔田キカス遺跡』福岡県文化財調査報告書第 252 集。

Ⅲ　時末遺跡の調査の報告

1　調査の概要

調査地点の所在　時末遺跡は、福岡県豊前市永久に所在する。第１次調査地は豊前市永久 121･122 の水田面のうち南～西側に、また第２次調査Ⅰ区は同じく北～東側にあたる。第２次調査Ⅱ区は豊前市永久 60-1･570-1 の２筆の水田面の西側半分ほどにあたる。

調査地点の周辺環境　調査地点は、豊前市役所から求菩提山へと伸びる福岡県道 32 号犀川豊前線の東 150m ほどに位置する。県道 32 号線は豊前市中央部にあって扇状地帯を南北に貫いており、低地との比高差は調査地付近では 5m ほどを測る。

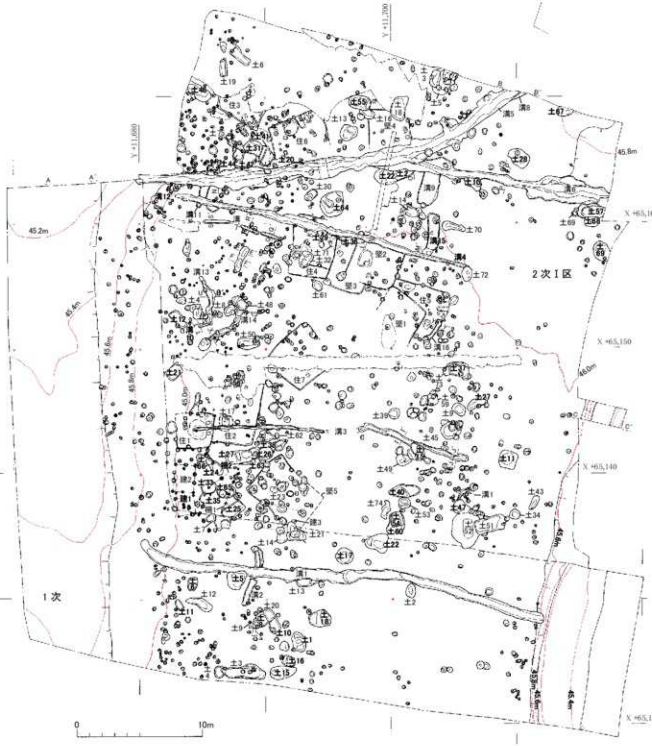
調査区は１次調査区と２次調査Ⅰ区・Ⅱ区の３カ所に別れているが、このうち１次調査区と２次調査Ⅰ区は同じ水田区画を工事上の都合により分けて調査したものである。一方２次調査Ⅱ区は、狭い谷状地形を挟んだ西側の尾根状丘陵先端部にあり、微地形的には別の単位となる。

遺跡の範囲　第２図に示したように、時末遺跡１次調査区・2次調査Ⅰ区は千束原台地の東側に南北に伸びる埋没微高地の南側に位置する。この微高地上の北端部には、圃場整備事業に先立つ試掘調査により存在が明らかとなり、豊前市教育委員会により発掘調査が行われた塔田琵琶田遺跡第１次調査区がある。またその南側には東九州自動車道の建設に先立つ試掘調査によって広くこれに連なる集落域が展開することが判明し、平成 23 ～ 25 年度に九州歴史資料館が同じく第２～６次調査を行っている。時末遺跡の北側隣接地でもこの集落の続きが出土しており、豊前市教育委員会によって西ノ原遺跡第４次調査として発掘調査が行われた（第２表を参照）。これらはそれぞれ南北に伸びる同一の埋没微高地上に連綿と広がる古墳時代～古代の集落域を調査したものであり、ここではこれらを塔田琵琶田遺跡群と呼ぶが、時末遺跡はその南端部にあたることとなる。時末遺跡第１次調査区・第２次調査Ⅰ区よりも南側の水田面の試掘調査では、削平によって基盤層が露出していて遺構はまったく出土しなかったため、この地点が集落の南端部と考えてよいだろう。

遺跡名	調査次数	調査年度	調査原因	調査主体	報告
塔田琵琶田遺跡	第１次	H11	圃場整備	豊前市教育委員会	豊前市報 29 集
〃	第２次	H22	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 22 集
〃	第３次	H22	県道犀川豊前線建設	九州歴史資料館	県報 252 集
〃	第４次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 26 集
〃	第５次	H23～24	県道犀川豊前線建設	九州歴史資料館	県報 252 集
〃	第６次	H24	東九州道建設	九州歴史資料館	東九州道 27 集
西ノ原遺跡	第１～３次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	豊前市報 37 集
時末遺跡	第１次	H23	東九州道建設	九州歴史資料館	本報
時末遺跡	第２次（１区）	H24	東九州道建設	九州歴史資料館	本報

第２表　塔田琵琶田遺跡群における既往の調査

一方、時末遺跡第２次調査Ⅱ区は、この埋没微高地南端部の西側に南から突きだした幅の狭い尾根状丘陵の先端部にあたる。埋没微高地との間は幅 10m ほどの自然河道によって区切られていたことが試掘調査により明らかとなっていて、これとは別の微地形単位にあたる。また、さらにその西に伸びる千束原台地とのあいだにも谷地形があって、別個の微地形単位となる。丘陵は南に行くほどに幅が太くなるとともに低地比高差を増し、調査区より南に 100m ほどいった丘陵頂部には現在、永久集落が展開している。なお、永久集落の最南端部には、かつて永久遺跡として調査され、古墳時代後期～古代の集落跡が出土した永久遺跡があるが、今次調査区とは直線距離で約 700m はなれており、遺跡の内容も異なる。



第５図　時末遺跡第１次調査区、第２次調査Ⅰ区遺構配置図（1/300）

2　1次調査の成果

（1）概要

調査区の概要　1次調査区は2筆の水田面のうちの工事用道路用地分にあたる西・北側のそれぞれ幅約12mほどで、平面形状は鉤括弧形をしており、面積は915㎡である。遺構検出面の標高は約46mほどをはかる。周囲は圃場整備によって広く平坦にならされているが、圃場整備前の地図では調査区の西・東両端が一段低い水田区画となっており、試掘調査の結果からも谷地形に挟まれていることが分かっていた（第3図）。

なお、1次調査の対象外となった残りの水田面を2次調査Ⅰ区として調査しており、一部の遺構は両調査区にかかっているが、1次調査区で先に検出した遺構については1次調査区の遺構として報告する。

検出した遺構は上述の谷状落ち地形のほかに土坑が22基、溝2条、ほか多数のピット群である。遺構の所属時期は、出土土器が少ないため判明しないものが多い。

基本土層　1次調査区・2次調査Ⅰ区の基本土層を第6図に示す。まず、最も広域で確認される層序としてB－B′土層をみよう。表土層（耕作土・床土・圃場整備盛土を含み、これを0層とする）の下位には、原則として明黄褐色の粘質土層が堆積する。この層は、上層に行くほどに黒ボク化するが、調査地点は過去の圃場整備時に大きく上面を削られていて、黒ボク土はまったく遺存していない。調査区の北側では削平深度がやや少なく、この粘質土層の最下部が遺存するが、調査区南部では削平深度が深く、粘質土層はほぼ失われて、その下部に広がる礫層が広く露出する。

次に、東西の谷状落ち地形の堆積状況を簡単に見ておく（西側がA－A′、東側がC－C′の土層図に対応する）。表土層の直下に水田層が広がる（1層）。褐灰～黒褐色粘質土の旧水田耕作土と褐～褐灰色粘質土の水田整層が互層を呈し、1a層が近世、1c層が中世の遺物を主に含むが、相互に混在しており、近世以降の造成盛土と考えられる。特に1c層は中世の遺物を包含する土砂を水田床土として近辺より搬入したものと考えられる。

1層の下には、谷部堆積土である2層が堆積する。堆積の単位による細分が可能であるがいずれの層も縄文時代～中世の遺物を包含し、中世期に埋没したと考えられる。このことから、上層の水田は中世における谷部の埋没以降であることが分かる。特に2a層は地山ブロックを含み人為的な盛土の可能性が高い。水田造成時の盛土であろうか。

1a　粗～黒褐色粘質土、旧水田床土か。
1b　粗灰～黒褐色粘質土、炭化物小片をわずかに含む。下層水田耕作土か。
1c　粗～灰褐色粘質土下層水田床土か。
2a　粗灰～黒褐色シルト混粘土、地山ブロックが混じる。旧造成盛土か。
2b　粗灰色シルト混粘質土礫を含む。
2c　2bに礫を多く含む。
2c′　黒褐色シルト混粘土。
3　粗灰色シルト混粘土礫を含む。
4　灰黄褐～黄褐色シルト粘土、やや砂質分が多め礫を多く含む。

第6図　時末遺跡第1次調査区、第2次調査Ⅰ区基本土層図（1/60）

3·4層は斜面～谷部に堆積する遺物包含層で、微高地上からの流れ込みであろう。

遺構は、これら堆積層の下層面にあたる地山直上から検出された。ほとんどの遺構の埋土は暗～黒褐色粘砂質土で,付近でみられる黒ボク土と土質が共通することから、遺構の掘り込みはすでに削平された黒ボク土の上位からであったことが推測される。これは、北側に広がる塔田琵琶田遺跡4次調査区の状況からも理解できる。

検出遺構　第1次調査で検出した主な遺構は土坑22基、溝2条、多数のピット群である。土坑は不定型なものが多く、土器もほとんど出土しないことから、撹乱や基盤層の礫の抜け跡、風倒木痕などを誤認したものが多く含まれる可能性が非常に高いが、写真や土層の記録が不十分で検証できないため、ここでは一応担当者の判断に従って全て報告する。なお、調査時にはピットと判断しており後に土坑と改めたものが多く、遺構写真が不足する点は大変遺憾である。

（2）土坑

調査区の中央部を中心に、22基を検出した。いずれも深さは30cm未満で非常に浅く、大きく削平を受けているものとみられる。形状は大半が不定型であり、調査時にはピットや性格不明遺構（SX）としていたものも含まれる。以下、個別の遺構について説明を加えていく。

1号土坑（第7図）

調査区南側の中央寄りに位置する。南に16号土坑が、北東に18号土坑が隣接する。平面形状は南北に細長い楕円形で、規模は長径1.80 m、短径1.08 mをはかり、残存深さは0.33mである。南北両側に浅いテラスがつく。平面では分離できなかったが、土層は3回の掘り返し状に堆積し、複数の小ピットが切り合う状況を土坑と誤認した可能性が高い。出土遺物はなく、時期不明である。

2号土坑（第7図）

調査区南側の中央やや東寄りに位置する。1号溝の南に隣接するが相互に切り合い関係はない。平面形状はいびつな楕円形で、長軸を略南北方向にとり、規模は長径1.15 m、短径0.78 mを測る。残存最大深さは0.23 mである。断面形状はやや浅い弧状である。出土遺物はなく、時期は不明。

3号土坑（第7図）

調査区南隅の西寄りに位置する。4号土坑を切り、これに後出するほか、床下から3基のピットを検出しており、これらを破壊して掘られたと考えられる。東西に長く平面形態は溝状を呈する。規模は長径3.40 m、短径1.17 mをはかり、残存最大深さは0.19 mと浅い。ほぼ同じ形状の撹乱により破壊されている状況がやや不自然であり、全体が新しい撹乱坑である可能性もあろうが、土層の記録・写真がなく判断ができない。上層から土師器の小片が出土しているが図示に耐えない。

4号土坑（第7図）

調査区南隅の西寄りで3号土坑の西側に接して掘り込まれた土坑である。3号土坑により一部破壊されていてこれに先行する。平面形態はいびつな円形で規模は長径0.93 m、短径0.79 mをはかり残存深さは0.16 mときわめて浅く、床面は平坦である。縄文土器の小片が出土したが、流れ込

みと考えられ、時期は不明。

5号土坑（第7図）

調査区南西よりで検出した。西に6号土坑が、東には2号溝がある。1号溝を破壊しておりこれより後出するが、調査時には逆の切り合い関係で掘ってしまったので図面にやや不備がある。平面形状は不整台形で規模は長軸1.37m以上、短軸1.47 m、残存深さは0.32mである。土層では掘り返しのような痕跡があり、平面では確認できなかったが複数の遺構が切り合っている可能性が高い。出土遺物は土師器の小片が数点であり、図示に耐えない。

6号土坑（第7図）

調査区南西寄りで検出した。東に5号土坑、北に1号溝、南に12号土坑があるがいずれとも切り合い関係はない。平面形状は不整形で規模は長軸1.09 m、短軸0.76 mをはかり、残存深さは0.29 mである。土師器の小片が数点出土しているが図示に耐えず、所属時期も判断できない。

7号土坑（第7図）

調査区南側の東寄りにあって2次調査I区との境界に位置する。2次調査25号土坑を一部破壊し、西・南側の壁の一部をピットにより壊されている。平面形状は検出部では不整台形状を呈する。北辺が2次調査I区に広がるものとして調査したが、その後の2次調査区では続きを検出することができず、本遺構が本当に存在したのかどうか、またその全形も不明である。検出状況で規模は長軸1.32 m以上、短軸1.21 m以上、深さは0.15 mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

8号土坑（第7図、図版4）

調査区中央西よりで検出した。東側を20号土坑に切られ、西側で9号土坑を切る。平面形状は残存部分では隅丸方形状を呈し主軸は北東－南西方向、規模は長軸0.98 m以上、短軸1.03 mを測る。残存深さは0.42mとやや深い。出土遺物は土師器の小片数点で図示に耐えず、時期は判断できない。

9号土坑（第7図、図版4）

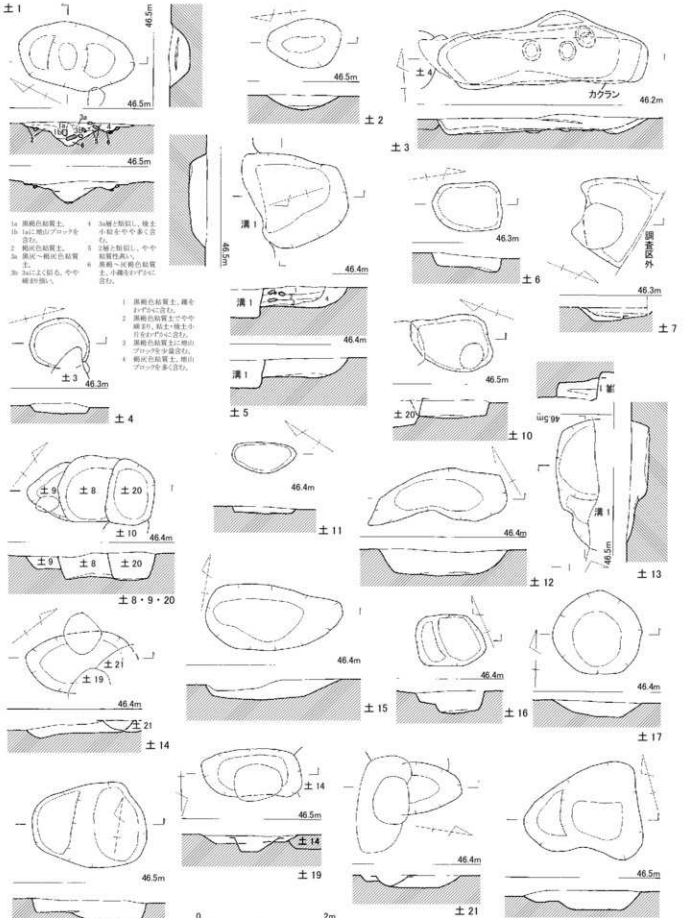
調査区中央西よりで検出した。東側を8号土坑に切られる。北東側の大半を破壊されていて全形は不明。残存規模は長径0.91 m、短径0.66 m以上をはかり、深さは0.20 mと浅い。土師器の小片が数点出土しているが時期の判断は困難である。

10号土坑（第7図、図版5）

調査区中央やや西寄りで検出した。北側を20号土坑、南側をピットに切られる。平面形状は不整楕円形で主軸を略南北方向にとり、規模は長径1.28m、短頭0.90mをはかり、残存深さは0.28mである。出土遺物はなく時期は不明。

11号土坑（第7図）

調査区南西端部に位置する。東に12号土坑が、北東に6号土坑が隣接するが切り合い関係はない。



第７図　１次１～22号土坑実測図（1/60）

平面形状は不整な長楕円形で、主軸方位を略南北方向にとり、規模は長径 1.20 m、短径 0.48 m、残存深さは 0.10 mをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

12 号土坑（第 7 図、図版 5）

調査区南西側に位置する。西に 11 号土坑が、北に 6 号土坑が隣接するが切り合い関係はない。平面形状は細い溝状を呈し、主軸方位は北西－南東方向、規模は長径 2.16 m、短径 0.90 mをはかる。残存深さは 0.23 mである。出土遺物には土師器の小片が数点あるが時期を判断できる材料はない。

13 号土坑（第 7 図）

調査区中央やや西寄りで 1 号溝に北側半分を破壊される土坑である。全形は不明ながらおそらく東西方向に主軸をもつ長楕円形を呈し、東側に一段のテラスをもつ。規模は長径 2.00 m以上、短径 0.68 m以上、残存深さ 0.37 mをはかる。出土遺物はなく、時期は 1 号溝との切り合い関係から古代以前と判断される。

14 号土坑（第 7 図）

調査区中央やや西寄りの北側で検出した。東側を 19・20 号土坑に、西側を 3 号建物跡の主柱穴に切られ、これらに先行する遺構である。平面形状は長楕円形で主軸は北東－南西方向、規模は長径 1.60 m以上、短径 0.96 m、残存深さ 0.27 mをはかる。出土土器はなく時期は不明。

15 号土坑（第 7 図、図版 5）

調査区やや西寄りの南端で検出した。西に 3 号土坑が、また北に 16 号土坑が隣接するが相互に切り合い関係にはない。平面形状は不整長楕円形で主軸を略東西にとり、規模は長径 2.14 m、短径 1.04 m、残存深さは 0.33 mをはかる。出土遺物は土師器の小片が数点で時期は判断できない。

16 号土坑（第 7 図）

調査区中央やや西寄りの南側で検出した。北の 10 号土坑と南の 15 号土坑に挟まれた位置にある。平面形状はゆがんだ台形で主軸方位を略東西方向にとり、西側にテラスをもつ。残存規模は長軸 1.09 m、短軸 0.81 m、深さ 0.34 mをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

17 号土坑（第 7 図）

調査区中央部の北側で検出した。北西に 9 号土坑が、北東に 22 号土坑があり、また南には 1 号溝が東西に走るがそれぞれとの切り合い関係はない。平面形状は略円形で断面は浅い皿状を呈し、規模は長径 1.40 m、短径 1.39 m、残存深さ 0.26 をはかる。出土遺物はなく時期は不明。

18 号土坑（第 7 図、図版 6）

調査区中央部やや西寄りで検出した。南東に 1 号土坑がやや離れて隣接する。平面形状は不整卵形を呈し、主軸方位は略東西方向で、西壁に沿ってテラスをもつ。規模は長径 1.78 m、短径 1.33 m、残存深さ 0.38 mをはかる。出土遺物は土師器の小片があるが時期は判断できない。

19号土坑（第7図）

調査区西寄りの北端部で検出した。14･21号土坑を破壊し、2次1号建物跡によって切られる。平面形状は不整長方形で主軸方位を略東西にとり、残存規模は長軸1.57 m、短径0.75 m、深さ0.15 mをはかる。出土遺物は土師器の小片があるが時期は判断できない。

20号土坑（第7図）

調査区西部で検出した。8･10号土坑を破壊し、これらに後出する。平面形状は不整長方形で主軸を北西－南東にとり、残存規模は長軸1.04 m、短軸0.77 m、深さ0.44 mをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

21号土坑（第7図）

調査区西寄りの北端部、2次調査Ⅰ区との境界部付近で検出した。北側を19号土坑と2次調査1号建物跡の柱穴に切られ、これらに先行する遺構である。半分ほどしか残っていないが残された部位から全形を復元すると長楕円形になろう。主軸方位は略南北で残存規模は長径1.84 m以上、短径0.80 m、深さ0.20 mをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

22号土坑（第7図）

調査区中央部の北端で検出した。北壁の一部が2次調査Ⅰ区に広がっている。西に17号土坑が、北東に2次60号土坑が隣接するが、切り合い関係はない。平面形状は不整三角形状で、主軸を略東西にとり、西側に一段テラスをもつ。規模は長軸1.84 m、短軸1.47 m、深さ0.30 mをはかる。出土遺物には土師器の小片があるが時期は判断できない。

（3）溝

調査区内南側を東西に横断する長い溝を1条、またこれに直交する短い溝を1条検出した。前者を1号溝、後者を2号溝として調査を行った。

1号溝（第8図、図版6）

谷に挟まれた埋没微高地を東西に横断する。西側は東西方向からわずかに北に振れ、中央付近でゆるやかに屈曲し、東側はやや南側に振れる。西端は西側の谷部に向かって緩やかに落ちる地形の中で徐々に浅くなって消滅し、東側は谷部斜面に抜ける。検出長さ33.0 m、平均幅1.1 m、平均深さ0.4 mほどの断面U字形の溝である。5号土坑に切られ、13号土坑を切る。図面上では2号溝を切る状態で表示しており、実際の検出時の認識も2号溝が古く本溝が新しいという切り合い関係で掘り下げているが、調査担当者によれば切り合い関係には自信がなく、共存していた可能性もあるとのことである。

溝底レベルは基本的には地形に沿って中央部が高く両側の谷に面する方が低いが、東側と西側ではやや西側が低い。土層は大きく4層に分かれ、溝を掘り下げると概ね3層で湧水した。埋土上層には地山の上層部分にあたる黄褐色粘砂質土のブロックが多く含まれ、2b層より上は埋め戻され

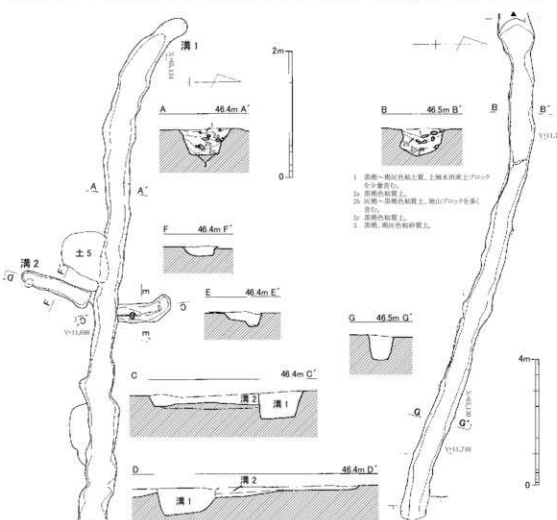
た可能性が高い。圃場整備前旧地形の水田割と照らし合わせると、約 10m 南側２本溝と同様に湾曲しながら東西に伸びる水田区画が認められ（第３図）、意図的な埋め戻し状況も勘案すれば、本溝は古代以降のかなり新しい段階まで水田区画・給排水路として機能していた可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第９図）

縄文土器（１～３）　１・２は外面に山形押型文を横位に施文し、内面はナデを施す。３は粗製深鉢。外面は条痕文を縦位に施し、口縁部付近はナデ消す。内面は磨滅のため調整不明。外面には広範囲にわたり煤による黒変が認められる。

須恵器（４）　４は須恵器の甕。内面には同心円状の、外面には格子目のタタキ当て具痕が残る。外面はタタキの後にカキメを施している。

土師器（５～11･13～15）　５は壷。口縁部が大きく外反する畿内系の壷と推定され、口縁部に段を有する。内外面共にナデ調整を施す。６は小型壷。口縁部はやや内湾する。内面頭部下位にはケズリを施す。７～９は高坏。７は中空の脚部である。外面はナデ。内面下部にはケズリもしくは工具を用いたナデを施しており、中程に残る横方向の工具痕は調整時のものと考えられる。８は裾部が「八」の字状に開くもので、外面にはミガキを施す。９は外面と坏部内面にミガキを施しており、脚部の内面にはシボリ痕が残る。10 は瓶把手である。明瞭な二次被熱痕はみられない。11・15 は



第８図　１次1･2号溝実測図（1/120）、土層・断面見通し図（1/60）

椀である。11の口縁部は屈曲し、外反しながら端部に向けて開く。内外面共にミガキを施す。15は外面にハケメを、内面にはナデを施す。13は須恵器模倣坏。内外面ナデ調整を施す。底部外面は切り離した後、横方向にナデを施している。14は皿。底部には回転ヘラケズリの痕跡が認められる。**土師質土器**（12） 12は椀である。口縁部が逆「八」の字状に開くタイプで、器壁が薄い。

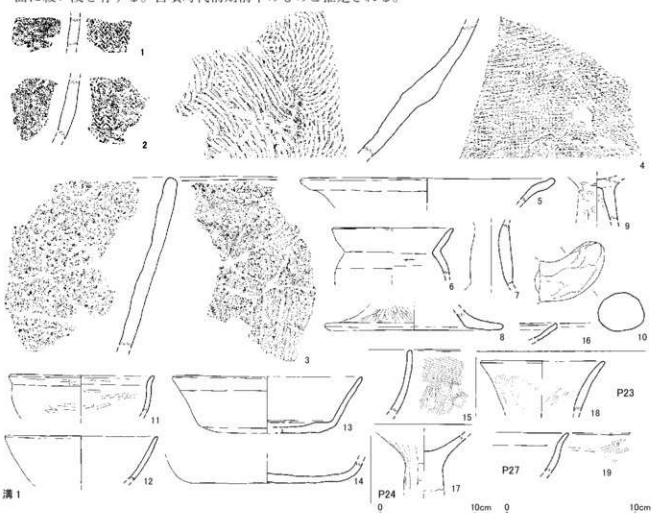
本遺構出土の遺物は、縄文時代早期、古墳時代前期～中期、古代以降と、時期幅を持つものが混在する。

2号溝（第8図）

1号溝の中央やや西寄りで直交方向に交差する短い溝である。全長4.9m、平均幅0.5m、深さ0.2mほどで、1号溝よりも全体的に規模が小さい。上述のように、検出時には1号溝に切られる遺構と把握していたが、整理時になって調査担当者が1号溝に関連する水田の給・排水溝の可能性を主張した。2号溝の土層図を作成していないこともあり、もはや検討できる材料はなく、不明とせざるを得ない。出土遺物として2点の土師器小片がありうち1点を図示するが、細片で時期判断の材料としては評価しがたい。

出土遺物（第9図）

土師器（16） 16は土師器甕の口縁部であり、やや内湾する。口縁端部は四角く成形しており、内面に縦い段を有する。古墳時代前期前半のものと推定される。



第9図　1次調査区溝・ピット出土土器実測図（17は1/4、他は1/3）

（4）その他の出土土器

ピット出土土器（第9図）

調査区内からは多数のピットが出土した。形態が円筒形で柱穴状のものも多いが、不定形で基盤層中の石の抜け跡を誤認したものも多いと考えられる。土器が出土したものはほとんどないが、いくつかのピットからは図示に耐える土器が出土したので、ここでまとめて報告する。また、調査区内から出土した石器・金属器類についてもここでまとめて報告し、出土位置については報文中でそれぞれ述べたい。

土師器（17～19） 17は高坏である。外面はケズリの後ナデ調整。脚部外面には黒斑が確認される。P-24出土。18・19は土師器である。18は直口壺。口縁部は外反しながらラッパ状に開く。外面にはハケメ、内面にはミガキを施す。P-23出土。19は椀。口縁部は屈曲して、やや外反しながら開く。外面にミガキを施す。P-27出土。

調査区内出土のその他の土器（第10図、図版17）

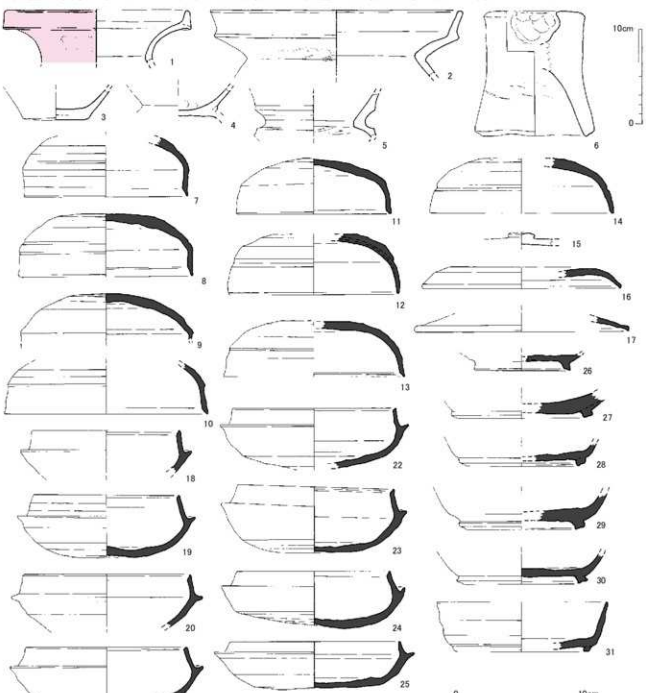
1次調査において出土した遺物のうち、遺構に伴わないものをまとめて報告する。表土剥ぎ中に採集した遺物や、調査区の東西両側にある段落ちを埋積していた遺物包含層中の出土遺物、また遺構検出中に採集した遺物などを含む。

弥生土器（1～6） 1は頸部が外反しながら大きく開き、口縁部は短く直立する在地系の複合口縁壺である。頸部外面にはハケメが確認できる。外面の一部に赤色顔料が認められる。2吉備系の二重口縁壺か。頸部外面にはハケメが施され、口縁部は内外面ともに横方向のナデ調整。3は甕の底部。レンズ状を呈する。外面には二次被熱痕が確認される。4は高坏。残存部から脚部がかなり開く形態であったと推定される。杯部を成形してハケメを施した後、脚部の粘土を付加し、ナデ調整している。5は山陰系の鼓形器台か。内面下部にケズリを施す。6は器台。外面と内面下部に板ナデを施し、内面上部には指頭圧痕が残る。外面上部に黒斑が確認される。

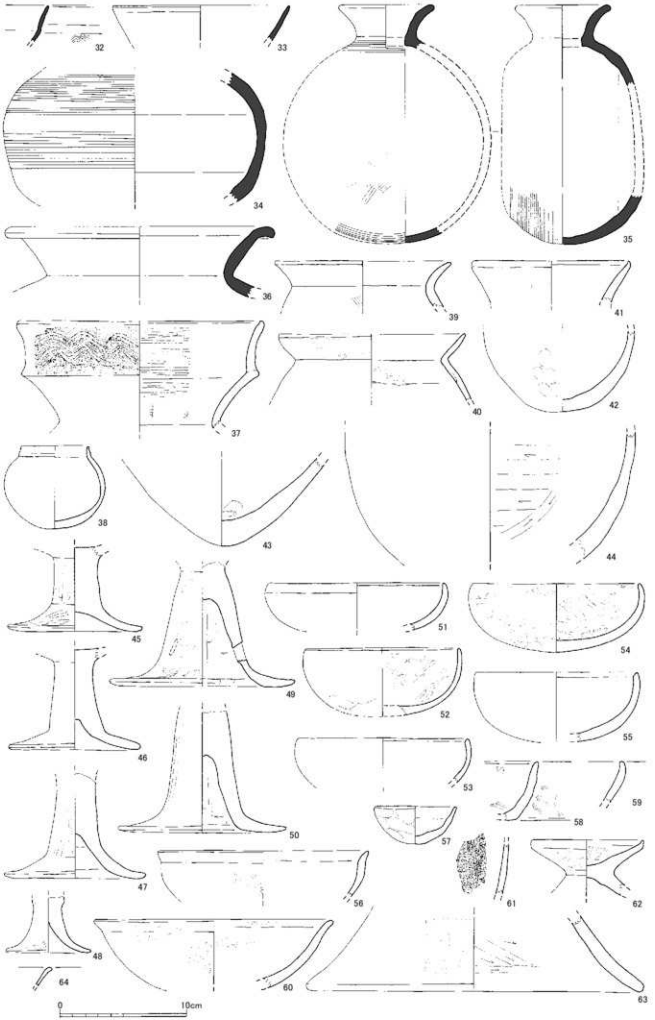
須恵器（7～36） 7～17は坏蓋。7～12は口縁部と天井部の境に段を有するものである。7・8・10・11の口縁端部は内面に段を有しており、7・8の端部は凹む。12の口縁端部は丸くおさめる。天井部から屈曲部付近にかけて3層の粘土接合痕が認められる。13は口縁部と天井部の境に明瞭な段をもたない。口縁部の内面は段を有し、端部は凹む。14は口縁部と天井部の境に一条の沈線を施し、端部は丸くおさめる。15は扁平つまみの付く蓋。16は口縁部が緩くカーブを描いており、端部の外面に若干稜を立たせる。17は口縁端部を下方に折り曲げる。18～31は坏身。18～24は、立ち上がりが長く内傾し、端部内面に段を有する。20の受け部はほぼ水平であるが、これ以外は上方に短くおさめる。25は立ち上がりが短く内傾し、端部に段は認められない。26～31は、高台の付く坏身である。いずれも高台は短く、底部と口縁部の境よりも若干内側に付く。26は外側が、27～30は内側が接地する。31の口縁端部は丸くおさめる。32は高坏。坏部の途中で屈曲し、外反しつつ外に開く。屈曲部下方外面に波状沈線を施す。33は広口の壺類の口縁部片か。口縁端部に向けて直線的に開く。復元口径は14.0cm。34は瓶の胴部片。平瓶と推定される。外面にはカキメを施す。35は提瓶。口縁部側と胴部側の破片は接合しないが、胴部の復元径に基づいて全形を推定し、図化した。胴部内面はナデを施しているが、一部同心円状のタタキが確認できる。外面は、

製作時に下になっていた方にはカキメ、上になっていた方にはナデと一部ハケメを施している。以上のことより、製作時には粘土を積みながらタタキを施し、胴部を塞いだ粘土接合部にはハケメを施し、それらをナデ消して、さらに外面の一部にカキメを施したものと推定される。口縁部には一部濃緑色の自然釉がかかっており、胴部外面には重ね焼きによる他個体の一部の付着が認められる。36は甕。口縁部は大きく外反し、端部で屈曲する。内外面ヨコナデ調整。外面の一部に、濃緑色の自然釉がかかる。

土師器（37～63）　37は在地系の二重口縁壺。頸部上半は外に開き、口縁部は直立気味に外反する。口縁部外面には波状沈線を施している。内面はミガキ、頸部屈曲部上部には刷毛先による押圧調整が確認できる。38は小形壺。内外面ナデ調整で、外面下部に黒斑が認められる。39～41は



第10図　1次調査区包含層等出土土器実測図その①（1～6は1/4、他は1/3）



第 11 図　1 次調査区包含層等出土土器実測図その② (1/3)

甕。39は口縁部が外反する。40は口縁部が内湾する布留（古）式の甕。口縁部外面はハケメ後ナデ、内面は磨滅しているが、屈曲部下半の一部ではハケメが確認できる。41の口縁部は端部に向けて直線的に開き、口縁端部を上方に突出させる。42・43は甕底部。42は丸底で、内外面共にナデを施し、外面底部付近には指頭圧痕が残る。43は器壁が厚い尖底。内外面共にナデを施しており、外面は黒変している。44は壷あるいは甕の胴部片。下部にいくほど器壁が厚くなる。外面は浅いヘラケズリの後に、ナデか板ナデを施している。内面には浅いヘラケズリを施す。45～50は高坏。45～47は脚部の半分以下まで粘土が充填されており、裾部が「八」の字状に開く。45は外面にミガキを施しており、47も磨滅が著しいが、ミガキの痕跡が認められる。48は小型で、脚部は外反しながら開く。脚部と坏部の境には段を有する。49・50は、屈曲部から端部までほぼ真横に開く。いずれも脚部内面にケズリを、外面にミガキを施す。49には、三方に円形の透かし孔を開ける。51～56は椀。51・54・55は端部が内湾するもので、52・53は真っ直ぐ立ち上がるもの、56は外方に屈曲するものである。51は内外面ナデ。52は内面ミガキ、外面の一部でケズリの痕跡が確認できる。54は内外面共にミガキを施す。55は外面の一部が黒変している。56は外面ハケメ後ミガキ、内面はナデ。57～59は手捏ねの椀・坏。57は成形時のユビオサエが内外面で確認できる。58は底部が平坦で、屈曲部から口縁にかけて内湾気味に立ち上がる。59は内外面共にナデを施す。60は鉢。口縁端部はやや外反する。内外面共にミガキを施す。61は製塩土器か。外面ナデ、内面には布目圧痕が残る。62は畿内系の小形器台。上端部を上方につまみ上げるもので、脚部はハの字状に広がると推定される。外面と下部内面はナデ、上部内面にはミガキを施す。63は大型の器台。裾に向かって開く。外面は粗いハケのちナデ、内面にはケズリを施し、端部付近はナデ調整を施す。

陶磁器（64）　64は緑釉陶器の椀か。口縁端部が若干肥厚する。

3　2次調査Ⅰ区の成果

（1）概要

調査区の概要　2次調査区は、1次調査区と同じ2筆の水田面のうち、工事用道路用地として先行して調査した西・南側を除く部分にあたる。平面形状は不整方形で、北側は用水路を介して西ノ原遺跡第5次調査地（豊前市により2014年度調査）が広がる。調査面積は1,280㎡である。遺構検出面の標高は約46mほどをはかる。

試掘調査の結果より、調査区の西側に用水路を介して隣接する一段低い水田面は谷部にあたり遺構が広がっていないこと、また東側のもと宅地部分についても谷部が広がっていることが判明しており（第2･3図）、1次調査の結果もこれとよく整合するものであったことから、調査区は東西を谷に挟まれた埋没微高地であると推測されていた。

なお、遺構配置図は1次調査区と合わせて第5図に、また基本層序も同じく第6図に示しているので参照されたい。

検出遺構　検出した遺構には、上述の谷状落ち地形のほかに、谷に挟まれた微高地上から竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡3棟、方形竪穴状遺構5基、土坑75基、溝16条、ほか欅列や多数のピット群などがある。遺構の所属時期は、出土土器が少ないため判明しないものが多いが、竪穴住居跡の多くは古墳時代の所産であろう。

（2）竪穴住居跡

第2次調査Ⅰ区からは計7基の遺構を竪穴住居跡として報告する。

遺構面は削平が著しく、個別の遺構の存在がきわめてわかりづらい状況であった。そのため、調査時には、シミ状の地山部分を含め、ある程度の広がりを持ち、（長）方形またはそれに近い平面プランを持つ遺構をすべてSHの記号で管理して1～27まで番号付けし、遺物もこの番号で取り上げていた。しかし、掘り下げてみるとそのほとんどは深さがきわめて浅く明瞭な掘り込みを持たないものであり、壁の立ち上がりが認識できるものでも、床面が水平ではなかったり主柱穴が存在しなかったりといった状況を呈し、竪穴住居跡とは考えがたいものが大半を占める状況であった。

このような調査結果を踏まえ、報告にあたってはSH1～27のうち12を遺構ではなくシミ状の包含層と判断して個別の報告は行わないこととし、1基を溝状遺構、1基を土坑として、また壁の立ち上がりは認められるが柱穴などを伴わない5基を方形竪穴状遺構として報告することとした。さらに、プランの見直しにより当初2棟の竪穴住居跡としていたものを1棟として報告することとした。したがって、ここで竪穴住居跡として報告するのは計7棟である。

なお、出土遺物の管理上は、すべて新しい遺構名・番号で行っている。

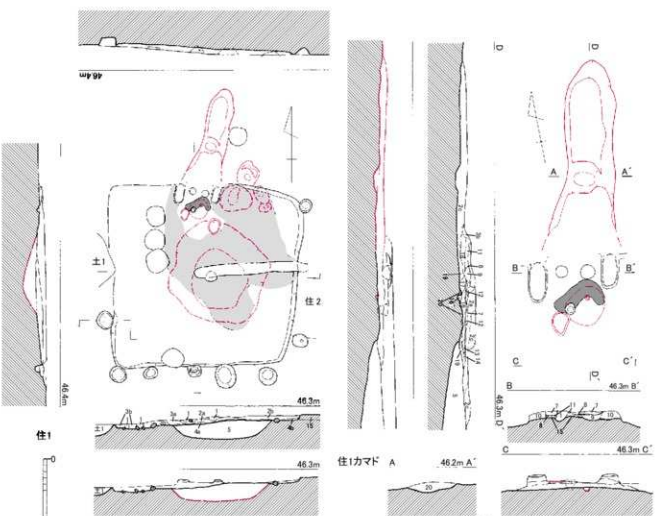
1号住居跡（第12図、図版7）

2次Ⅰ区の南西隅付近に位置する。遺構の中央付近を3号溝、西側を1号土坑に切られ、東側で2号住居跡を切る。平面プランはわずかに東西に長いゆがんだ正方形で、北壁の中央部にカマドを付し、主軸は略南北方向で、規模は南北長が3.00m、東西幅は2.92mをはかる。全体に削平され残りが悪く、壁は最大で深さ12㎝しか残っていない。特に北西側は削平されて壁が失われている。

床面には主柱穴が確認できなかったが、南壁付近を中心に計７基の小ピットが壁に接するように並んでおり、調査担当者はこれを本住居跡に伴うものとする。しかし、検出時には住居跡と切り合い関係を持つものとして調査されたものを含み、また想定掘り込み面レベルでは柱のほぼ全体が住居の内部にはみ出てしまい構造上問題があると考えられる。また、中央よりやや北西側によった床面下には深さ30cmほどの不整形の掘り込みがあり、担当者はこれを屋内土坑とするが、一方ではカマドの前面から床面中央部にかけて貼床が認められたという記述もあるので、不整形の掘り込みは本住居跡に先行する下層遺構と考える方が妥当であろう。出土土器はビニール袋に一袋ほどの縄文・弥生土器、土師器、須恵器があり、うち土師器・須恵器を１点ずつ図示する。カマドを持つこと、須恵器が出土することから、古墳時代後期の遺構と考えたい。

カマド（第12図）

北壁の中央部付近にカマドが検出された。付近は削平が著しく、カマドの袖もかろうじて5cmほ



1 上層ピット等埋土。
2a 黒褐色シルト混粘土に焼土・粘土細粒をわずかに含む。住居跡埋土(上層)。
2b 黒褐色シルト混粘土。住居跡埋土(1a～6層)。
3a 灰褐～褐赤褐色シルト混粘土。焼土・粘土ブロックを含む。カマド袖構築埋土。
3a' 褐黄褐色シルト混粘土。粘土ブロックを多く含む。住居跡埋土(中～下層)。
3b 黒褐～暗褐色シルト混粘土。地山ブロックを多く含む。住居跡埋土(中～下層)。
4 褐黄褐色シルト混粘土地山ブロックを多く含む。貼床層。
4a 4a2層に、炭床下層。
5 黒褐色シルト混粘土。地山ブロック・小礫を含む。下層土壙埋土。
5a 灰褐～褐赤褐色シルト混粘土。焼土粒を多く含む。カマド袖構築埋土。
6 2号住居跡埋土。
7 明赤褐色シルト混粘土。焼土・貝化物細粒を含む。カマド内埋土。
8 貝化物集積層(上層)。
9 黒褐色シルト混粘土。貝化物小粒を多く含む。
10 褐黄褐シルト混粘土。焼け締まる。カマド袖構築土。
11 褐赤褐色シルト混粘土。黄褐色粘土ブロック含む。下層カマド袖構築埋土か。
12 明赤褐色シルト混粘土。上層カマド袖面の被熱赤変部か。
13 灰褐色シルト混粘土に黄褐色粘土ブロック、貝化物・焼土小片を含む。
14 貝化物集積層(下層)。
15 灰褐色シルト混粘土。焼土・貝化物を多く含む。下層カマド内堆積土。
16 褐色シルト混粘土。粘土ブロック、粘質性高く締まる。
17 灰褐色シルト混粘土。焼土・貝化物を多く含む。
18 褐色シルト混粘土。焼土・貝化物をわずかに含む。
19 黒褐～暗赤褐色シルト混粘土。貝化物小片を含む。
20 地山赤変部。下層カマド袖面の被熱赤変部か。
21

第12図　２次調査Ⅰ区１号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

どの高さが残るような状況で、奥壁に当たる住居跡北壁部分は削平により大半が失われていた。被熱により赤変した面が2面確認され、カマドが作り替えられた可能性がある。上面のカマドより説明する。

上面のカマドは、袖は奥壁に直角に付き、左袖がやや残りがよく30cmほどをはかる。燃焼部の幅は内法で50cm弱とかなり小型である。住居跡の北壁想定ラインから約45cm南の左袖寄りに直径10cmの小ピットが検出され、担当者はこれを支脚穴とするが、中央から偏る位置にあり、通常支脚の手前に形成される被熱赤変面がこの小ピットの奥側に広がっていることからも疑問である。

埋土をみると、赤変面の直上に炭化物堆積層があり、おそらく灰層であろう。その上位には、住居跡の埋土と、カマド構築粘土とみられる粘質土や被熱粘土が交互に堆積しており、竪穴部の埋没とともにカマドが崩落した様相を示す。なお、カマド埋土は推定北壁ラインより北側にも広がっており、担当者はこれを根拠として、本カマドがいわゆる突出型である可能性を示唆するが、本地域においては突出型のカマドは類例に乏しく、北壁ラインの誤認、下層埋土と上層埋土の取り違え、あるいは遺構削平時にカマド埋土が北側に広がったなどの可能性をも考慮しておきたい。

下層カマドは被熱赤変面と支脚穴の可能性のある小ピット、左袖の一部とされる粘土塊が調査されている。小ピットの位置は上層カマドの支脚穴より北東に20cmほど移動しており、カマド自体がやや北によって作られていた可能性がある。左袖の一部とされる粘土塊であるが、被熱赤変面との位置関係からして、これを袖と考えるのは難しいだろう。おそらく崩落したカマド構築粘土塊を誤認したものか。埋土は上層カマドと同様の状況を示す。なお、下層カマドに対応する層位・位置にあたるカマド北側に溝状の浅い掘り込みが伸びており、煙道の可能性もあるが、本地域では同様の煙道を持つカマドの事例に乏しい。別遺構の切り合い関係が把握できなかった可能性が高いものとみたい。

出土遺物（第16図）

土師器（1）　1は土師器の椀。内面はミガキ、外面は指頭圧痕の上から一部ハケメを施す。

須恵器（2）　2は須恵器高坏の脚部である。外面中程に浅い沈線を、その下部にはカキメを施す。内面には工具によるナデが施される。破断面の上部で、方形の透かし孔の一辺が確認できる。須恵器高坏の特徴は、古墳時代後期のいずれかの時期に属することを示す。

2号竪穴住居跡（第13図、図版7）

2次I区の南西部付近に位置する。1号住居跡と切り合い関係にあり、これに南西コーナー部付近を破壊される。また、南半部を3号溝が東西に横切って住居跡を破壊している。一方、南側中央部付近の床面下層からは17号土坑が検出されており、本住居跡はこれを破壊する。

平面プランはおそらく方形だが、北・西壁が削平などにより失われており正確な形状は不明である。主軸包囲は略南北にとり、残存規模は南北5.1m以上、東西4.6m以上をはかる。床面より4本の主柱穴とみられるピットが略正方形に配された形で検出されており、これを根拠として旧状を推測すれば、南北6.4m、東西6.0mほどの規模となろうか。深さはよく残る東壁で最大20cm弱、床面からは多くのピットが検出されているが大半は下層遺構であろう。担当者によれば17号土坑の南側で埋土中に焼土を含む箇所があったといい、カマドがこの位置に存在していた可能性を示唆するが、出土遺物からは古墳時代前期の遺構である可能性が高く、この場合カマドは存在しないと

考えるべきで、焼土については埋土中にたまたま含まれたものとみたい。出土土器は土師器を主体としてビニール袋1袋ほどあり、布留式甕の口縁部などが多く含まれる。

出土遺物（第16図、図版17）

縄文土器（3･4） 3は外面に格子目の押型文を、内面は板状工具によるナデを施す。4は口縁部片。外面に横位方向の楕円押型文を、内面には原体条痕を施す。

土師器（5～9） 5は小型壺。底部内面を除いてミガキを施す。6･7は壺口縁部。6は端部でやや外反気味に開く。外面は磨滅しているが、内面にはミガキを施す。7は端部に向けて直線的に開く。外面にはハケメを施した後、縦方向に細いミガキを施している。内面はハケメ調整。8は高坏脚部。端部に向けて直線的に開く。内面にはハケメ、外面はハケメ後ミガキを施す。9は椀。口縁端部付近は内外面共にハケメを施し、他はナデ。遺物は、縄文時代早期のものを除くと、古墳時代前期に属する。

3号竪穴住居跡（第13図、図版7）

調査区北西隅部で検出した。北側を撹乱によって大きく破壊されており、全体の半分弱ほどが遺存していた。全体的に削平されているが本調査区の中では比較的壁の残存高さがある方で、最大で25cm程度をはかる。主軸包囲は北東－南西にとり、南壁が完存していて東西の規模は3.52mをはかる。床面には，壁の残されている部分全周に深さ5cm程度の周壁溝が回るほか、中央部に炭化物を含む皿状のピットがあり、炉跡とみられる。この炉跡を住居跡の中心にあるものとして南壁を折り返すと、南北長さは3.8mほどになろう。また、南側～中央部にかけて、灰黄褐色粘質土からなる厚さ1～2cm程度の貼床が認められた。担当者は主柱穴の候補としてP1･P2の2つを示すが、位置や深さなどからやや疑問が残るところではある。カマドを持たないことから古墳時代前期の遺構と考えたいが、出土遺物は須恵器坏身をはじめとして古墳時代中～後期の遺物が多く整合的でない。主柱穴に疑問が残ることからも、竪穴住居跡として報告すべきではないかもしれない。

出土土器（第16図、図版17）

縄文土器（10） 10は鉢の口縁部片。外面は二枚貝条痕の後にナデを施す。内面はナデ調整。

須恵器（11） 11は須恵器坏身。いずれも受け部は短く上外方にのびて端部は丸い。立ち上がりは高く、端部は内傾し凹面を形成する。

土師器（12･13） 12･13は土師器高坏。12は口縁部がやや外反し、坏の屈曲部外面に段を形成する。屈曲部で粘土接合痕が観察される。内外面ナデ。13は中空の脚柱部から裾部がほぼ水平に開くと推定される。外面はケズリ後ハケメを施して、部分的にミガキを施す。坏部内面はミガキ、脚部内面は上部にケズリ、下部にハケメを施して、裾部はナデ調整。

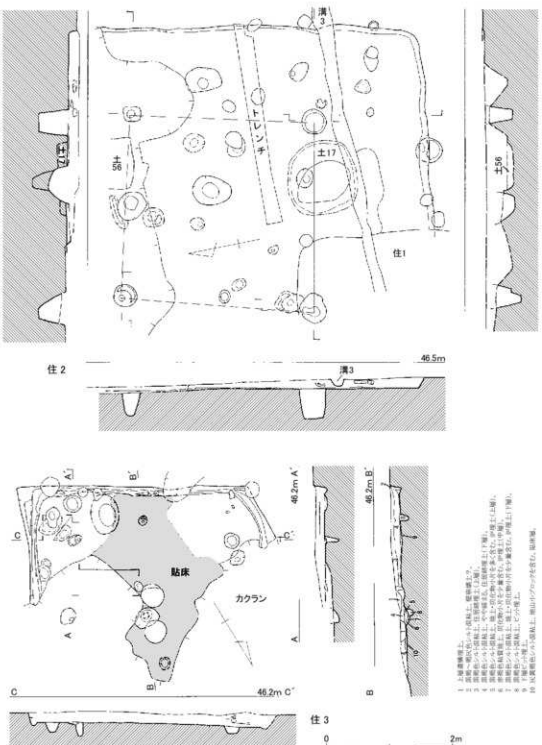
4号竪穴住居跡（第14図）

調査区のほぼ中央部で検出された。主軸を略南北にとる（長）方形プランの遺構で、北側を4号溝に大きく破壊されるほか、東側を3号方形竪穴状遺構に、また29･32･36号土坑に遺構の各所を破壊される。全体に後出する遺構により大きく破壊されており、特に東壁は完全に失われているほか、北壁も削平により一部が失われている。南北長のみ規模が判明し4.66m、東西幅は3.5m以上をはかる。南壁に沿って幅0.85m、高さ5cmほどのベッド状遺構を付設する。

床面からは主柱穴と評価してよいピットを検出することはできなかった。また、ほぼ中央部に焼土が不整形に集中する部分が認められたが、担当者によれば床面より浮いていたとのことで炉跡かどうか判断できない。以上から、本遺構を積極的に竪穴住居跡と評価する根拠はベッド状遺構の存在だけでやや自信がない。出土土器は土師器を主体とする小片のみで、小さなビニール袋に1袋分ほどありうち2点を示す。土師器よりみれば古墳時代前期の遺構か。

出土土器（第16図）

縄文土器（14） 14は鉢の頸胴部片である。外面には横方向の沈線を施文し、縄文が伴う。沈線の



第13図　2次調査Ⅰ区2·3号竪穴住居跡実測図（1/60）

末端には小さく浅い刺突を施す。内面はナデ調整。後期中葉の北久根山式にあたる。

土師器（15） 15は壷。頸部は、外反せず真っ直ぐ立ち上がるものと考えられる。胴部は内外面ハケメを施し、頸部はナデ。時期は、古墳前期前半と考えられる。

5号竪穴住居跡（第14図）

調査区中央西よりで検出した。主軸包囲を南東－北西にとる（長）方形プランの住居跡で、北東隅部にカマドを付設する。南西側を1･2号方形竪穴状遺構に破壊されており、東西長さは不明である。また南壁が削平により失われており、南北幅も不明である。東壁の南側が16号溝により破壊されている。最大深さは10cm以下で残りはきわめて悪い。床面からはいくつかのピットが出土しているが深さや位置などから主柱穴と判断できるものは指摘できない。出土遺物はごくわずかでいずれも土師器の小片であり、時期の判断は困難である。カマドを有することから古墳時代後期の遺構であろう。

カマド（第14図）

竪穴部の北東コーナー部にきわめて近い東壁に内接型のカマドを付設する。当初調査担当者は付近で2基のカマドが切り合っているという認識で調査しており、これに伴って住居跡も2棟の切り合いで考えていたが、うち1基のカマドの幅があまりに狭い（20cm程度）ことや住居跡の切り合いの状況が不自然なことから、整理段階で見直しを行い、1棟の住居跡とこれに伴うカマドと判断した。このため、土層図などに不備が多いが御容赦いただきたい。

カマドは東壁よりほぼ垂直に約100cmほど袖を伸ばす。袖は基底部幅が30～40cmと広いが、カマドの内外に広く焼土が散らばっていることから、完全に袖を崩された状態で袖構築粘土の崩落したものを誤認した可能性がある。袖を外して調査していないため不明だが、ここで袖としたものの下にも焼土が広がっていた可能性があり、その場合は袖ではなく壁体の崩落となろう。床面には広く焼土や炭化物が散らばっていたが明瞭な被熱赤変部は認められなかった。また支脚穴も検出できていない。これらの点から、床面まで掘りきっていない可能性が高いものと考えられる。以上より、本カマドについては、位置的には問題ないものと思われるが、構造そのものにはやや疑問が残るところである。

出土土器（第16図）

土師器（16） 16は土師器高坏の脚部である。内外面共にナデ。2ヶ所の粘土接合痕が確認できる。

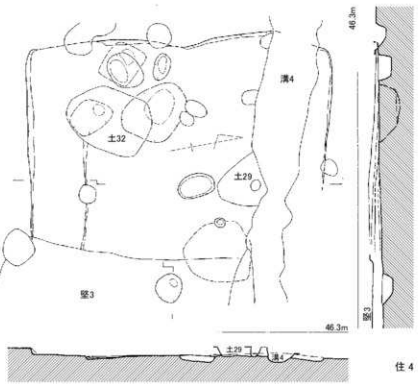
6号竪穴住居跡（第15図、図版8）

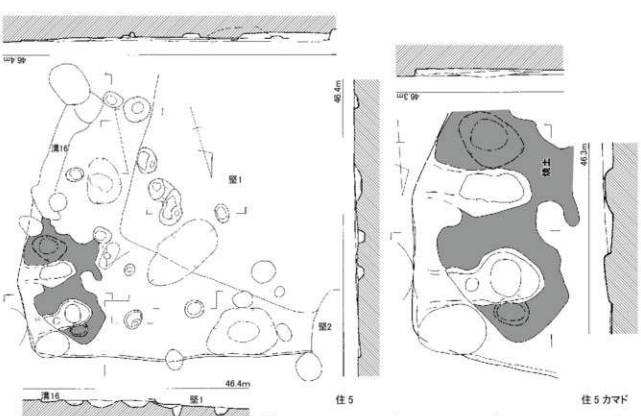
調査区の北西側で検出した。北に3号住居跡が隣接するが本遺構とは切り合い関係にない。南側を5号溝が横切るように破壊するほか、北東コーナー部が攪乱により破壊される。平面形状は略正方形で主軸方位は北北西－南南東、北壁のやや東寄りに内接型のカマドを付設する。竪穴部の規模は南北長が4.30m、東西幅が4.62mをはかる。出土遺物はごくわずかな土師器のみである。住居跡の構造と出土遺物から、古代の遺構と考えたい。

カマド（第15図）

北壁のやや西寄りに内接型のカマドを付設する。カマドはやや東を向いて開口するよう斜めに取り付けられ、左袖がよく残っていて90cmほどをはかる。燃焼部床面幅は30cmほどであるが袖が本

来はもっと細かった可能性が高い。燃焼部床面にはやや弱い被熱赤変部が認められるが範囲は記録されていない。カマド内埋土はカマド構築粘土の崩落土と竪穴部埋土との混合層からなり、灰層は認められない。支脚ピットは検出できなかった。左袖の検出面上位や周囲から、甑片が散乱した状



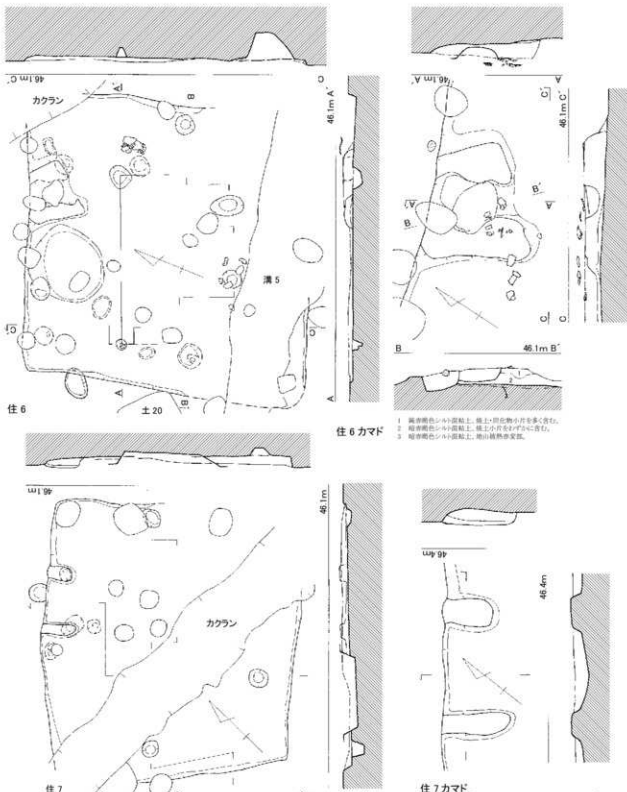


第 14 図　2 次調査 I 区 4･5 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60･1/30)

態で検出された。出土位置から本カマドに伴うものとみて報告するが、明確に遺構にともなう状態で出土したわけではないので注意が必要であろう。

出土遺物（第16図）

土師器（17～19） 17は壺の頸部屈曲部～胴部の破片である。残存部から、口縁部が外傾しつつ立ち上がると推定される。内外面共にナデを施すが、外面は粘土接合痕を丁寧にナデ消しているの



第15図　2次調査Ⅰ区6･7号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

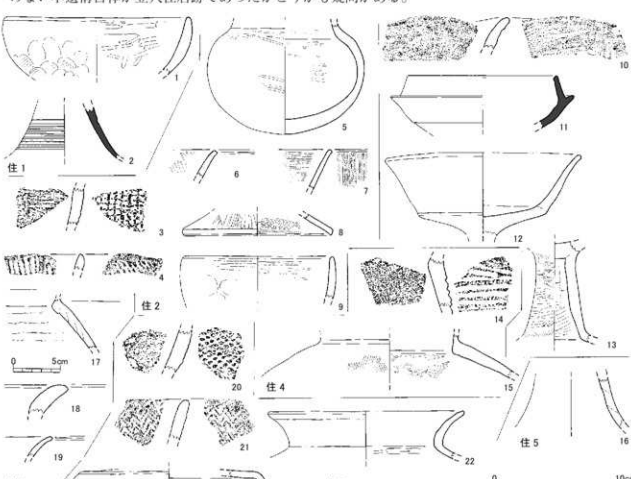
に対し、内面には粘土接合痕が残る。18は土師器甕の口縁部である。口縁部が厚い、7世紀代以降の長胴の甕と推定される。19は甕の口縁部片か。口縁端部の外面に段を形成する。

7号竪穴住居跡（第15図）

調査区中央やや南西寄りで検出した。中央部を斜めに大きく攪乱が破壊している。また全体的に削平されて残りは悪く、南東コーナー部付近の壁は失われている。主軸方位を北西－南東にとり、平面形状は南西－北東がやや長い長方形で、北西壁の中央東寄りに内接型のカマドを付設する。規模は北西－南東長が4.00m、南西－北東幅が4.32mをはかる。床面からはいくつかピットが検出されているが、いずれも浅くまた位置も悪く主柱穴とは評価しがたい。出土土器はビニール袋1袋ほどあり、大半が土師器であるが古代に属する遺物も含む。

カマド（第15図）

北西壁の中央東寄りに、壁と直角に袖が伸びる内接型のカマドを検出した。左袖の残存状況がよく60cmほどをはかる。左右袖先端部の下層に小ピットが検出されており、袖補強石を配した可能性もあるが、袖粘土における石材抜き跡の有無などは調査時の所見では特に注意されていない。床面には被熱赤変面の形成も認められない。メモによればカマドの両袖が弱く被熱していたが燃焼部に焼土や炭化物はほとんど検出されていないとあり、また埋土の記録もなく堆積・埋没状況も不明である。以上から、本遺構がカマドかどうかについてはやや慎重な立場とならざるを得ず、主柱穴のない本遺構自体が竪穴住居跡であったかどうかも疑問がある。



第16図　2次調査Ⅰ区竪穴住居跡出土土器実測図（17は1/4、他は1/3）

出土遺物（第16図）

縄文土器（20・21） 20は外面に横位の楕円押型文を施す。内面はナデ調整。21は口縁部片。内外面ともに山形押型文を横位に施す。

土師器（22） 22は甕。口縁部は外反する。内面の屈曲部より下は横方向のケズリ後ナデ。他はナデ調整。

土師質土器（23） 23は蓋。口縁端部を内面につまみ出す。天井部外面にはミガキを施し、他はナデ調整。

（3）掘立柱建物跡

調査区からは数多くのピットが検出された。それらは何らかの建築物を構成する柱跡の可能性が高い。しかし、それらを組み合わせて認定できた掘立柱建物跡は3棟のみであった。本来であればもっと多くの建物跡が存在したのであろう。

1号掘立柱建物跡（第17図）

調査区の南西隅部で検出した1×1間の建物跡である。4つのピットのうち2つは1次調査区に位置する。主軸は北北西－南南東で、規模は芯－芯で南北1.40m、東西1.41mを測る。柱穴は小形の円形プランで、深さ10cm前後ときわめて浅い。出土遺物はなく時期は不明ながら、柱穴の規模や形状から中世以降のものである可能性が考えられる。

2号掘立柱建物跡（第17図）

調査区の南西隅部で検出した2×3間の建物跡である。南に1号建物跡が隣接する。主軸方位は略南北で、規模は芯－芯で2.16m×1.60mほどを測る。柱間はほぼ等分である。柱穴は小形の円形プランで深さはややばらつきがあるが深いものでも20cm程度と浅い。土層図には柱痕様の層が描かれているが、底面に達していないのは不自然でやや理解しがたい。出土遺物は土師器の小片を主体とし数点があるが、黒色土器碗や施釉陶器の小片がみられることから、中世の遺構と考えたい。

出土土器（第21図）

陶磁器（21） 21は施釉陶器である。口縁下部に段を有しており、全体に透明釉をかけている。釉には貫入が認められる。

3号掘立柱建物跡（第17図）

調査区南側で検出した1×1間の長方形プランの建物跡である。5号方形竪穴状遺構を破壊する。4本の主柱のうち2本は1次調査区にあり、調査中には気づけず、整理時に建物跡として認定したものである。主軸方位は西北西－東南東で、規模は梁行3.10m、桁行1.96mを測る。柱穴の平面プランは不整円形・楕円形で大きく深さは30cm前後である。

（4）柵列

柵列は、調査区の南西側で2列が検出された。近接しているが方位は異なる。また、双方ともほ

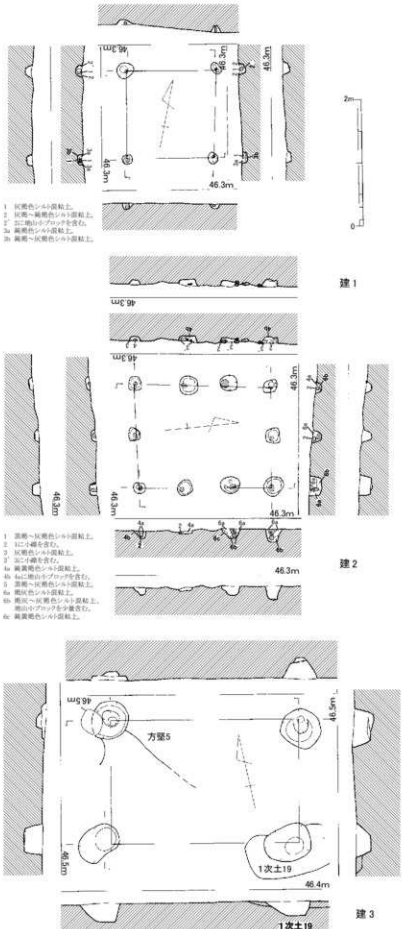
かに方位を同じくする遺構はない。

1号柵列（第18図）

調査区南西隅部で検出された。4本の柱穴がほぼ直線上に並ぶ。4つの柱穴のうち1つが65号土坑を破壊しており、これに後出する遺構である。主軸方位は北北東－南南西にとり、柱間は0.80m、1.01m、1.12mと不揃いである。柱穴はいずれも小形の円形プランで、深さ10cm前後ときわめて浅い。土層中に柱痕様の層が描かれるが、いずれも底部に達せず、やや理解しがたい。出土遺物はなく時期は不明。

2号柵列（第18図）

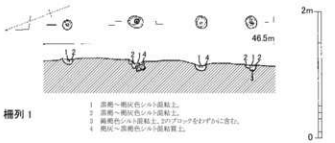
調査区南西隅部で検出された。1号柵列跡の西に隣接するが並行しない。主軸方位は北東－南西にとり直線的に並ぶ4つの柱穴からなり、柱間は1.93m、1.41m、1.27mと不揃いである。柱穴の平面形状は（楕）円形プランで概して小さく、うち1つの柱穴が33号土坑を切る。深さはまちまちで10cm程度から30cm程度まで幅がある。土層には柱痕跡が認められる。出土遺物は土師器の小片を主体として数点があるがほとんどが小片で図示できない。中世の土師質土器とみられる小片が1点あり、これを根拠とすれば中世期の遺構か。



第17図　2次調査Ⅰ区1～3号掘立柱建物跡実測図（1/60）

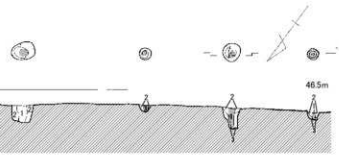
出土遺物（第 21 図）

須恵器（22） は須恵器高坏の脚部である。内面にはシボリ痕が認められる。対向する二ヶ所に、方形透かしを施していたものと推定される。



（5） 方形竪穴状遺構

竪穴住居跡の報告の部分で述べたように、当初調査担当者が竪穴住居跡として調査していたもののいくつかについて、調査後の整理段階において、周壁溝や炉跡、主柱穴、カマドなどを伴わず、掘り込み自体もきわめて浅く床面も水平ではないといった諸点から、住居跡と考えるのは難しいのではないかとの指摘を行い、協議の結果、うち 5 基について方形竪穴状遺構として報告することとなった。ただし、その性格は不明である。



第 18 図　2 次調査Ⅰ区 1･2 号柵列実測図（1/60）

1 号方形竪穴状遺構（第 19 図）

調査区中央やや東寄りで検出した。調査時の所見では、5 号住居跡の南部と大きく重複していてこれに後出し、また 2 号方形竪穴状遺構の南東隅部を一部破壊する。全体に残りは悪いが特に南部・西部の削平が著しく、壁が失われていて全体形状・規模は不明。遺存範囲から考えて、（長）方形プランで北北東―南南西を主軸にとり、南北 3.1m 以上、東西 3.4m 以上の規模をもつものと考えられる。床面からはいくつかの小ピットが検出されたが主柱穴と評価できるものはなく、カマドや炉跡などの施設も認められない。出土遺物もほとんどない。

なお、西に隣接する 2･3 号方形竪穴状遺構、4 号住居跡と床面のレベルがほとんど同じであり、またいずれも床面に基盤層である砂礫層が露出しているにもかかわらず貼床や貼床上の硬化面などが認められないことから、これらが本当に遺構なのかどうか疑問が残る。試掘時の所見では、付近は水田開削時に基盤層直上まで削平されているとされており、基盤層上にわずかに残されていた包含層やごく薄いシミ状の土壌、風倒木痕などの基盤層以外の「掘れる土」を遺構と誤認した可能性がある。ここでは一応、調査担当者の所見に従い遺構として報告しておく。

出土遺物には土師器・須恵器の小片が数点あるのみである。5 号住居跡を破壊することから、古墳時代中期またはそれ以降の遺構と考えられるが詳細は不明である。

出土遺物（第 21 図）

土師器（1） 1 は土師器椀である。内外面ともにミガキを施す。時期の絞り込みは難しい。

2 号方形竪穴状遺構（第 19 図、図版 8）

調査区のほぼ中央で 1 号方形竪穴状遺構の北西に隣接して検出された。1 号方形竪穴状遺構の項

で述べたように、遺構であるかどうかやや疑問が残るが、ここでは調査担当者の所見に従い遺構として報告する。

他遺構との切り合い関係は、南東コーナー部を5号住居跡・1号方形竪穴遺構に切られる。また、北辺を4号溝と36号土坑に大きく破壊される。破壊された北辺以外の3辺が残り、平面形状は(長)方形プランで主軸は北北東―南南西にとり、規模は南北が3.3m以上、東西は3.90mを測る。床面からは土坑が1基検出され、調査担当者はこれを本遺構に伴うものとするが、位置が西辺に寄っており、深さも20～30cm程度と浅いことから、本遺構に上部を破壊された別の遺構の可能性が高い。ただし、本書では別途土坑として報告することはせず、ここで合わせて報告するので注意されたい。

床面からはほかに本遺構に伴うと考えられる掘り込みは検出されなかった。唯一、4号溝の床面から小ピットが検出されており、調査担当者はこれを本遺構に伴う柱穴の可能性があるものとして図示しているが、これに対応して規則的に配される他の柱穴はない。土坑内から古墳時代前期の土器が出土しており、土坑が本遺構に伴うものであれば本遺構もその時期に、土坑が先行するものであれば本遺構は古墳時代前期以降古墳時代後期までの所産となろう。

屋内土坑(第19図、図版8・9)

調査担当者が屋内土坑とする掘り込みで、これは確実に遺構と考えられる。ただし、2号方形竪穴状遺構に伴うものかどうかは確証がない。主軸を略南北方向にとるややゆがんだ隅丸長方形の遺構で、南東コーナー部付近にテラスが付く。規模は検出面で長軸1.40m、短軸1.02mを測り、深さは最大30cm程度である。内部からは、床面から浮いた状態で比較的大型の土器片が出土している。

出土遺物(第21図、図版17・18)

縄文土器(2)　鉢の口縁部片であり、内外面ともにナデ調整。

土師器(3～10)　3・4は壷。3は口縁部がやや内湾し、胴部が球状を呈する。布留(古)式の甕に近い器形。内面はナデ、外面はハケメ調整を施す。底部から胴部にかけて黒斑が認められ、一部で被熱による赤変が確認できる。4は頸部が外に開く形態と推定される。外面にはハケメ、内面にはケズリを施す。5・6は高坏。5は、端部に向かってハの字状に開く脚部である。内外ともにハケメを施す。6は有稜高坏で、坏部は浅く、口縁部は直線的に広がる。内面には粘土接合部で段を形成する。内外面ともナデの後に細い暗文を施している。7～9は脚付鉢。7・8は坏部が内湾して開き、いずれも内外面ともにミガキを施す。7は、坏部外面と内面上部でミガキの前に施されたハケメの痕跡が確認できる。9は坏部の途中で段を形成する。外面にはハケメ、内面にはハケメのちミガキを施す。10は特殊器台の脚部あるいは台付き鉢。裾に向かってハの字状に開き、三方向に円形の穿孔を施していたと考えられる。

3号方形竪穴状遺構(第19図)

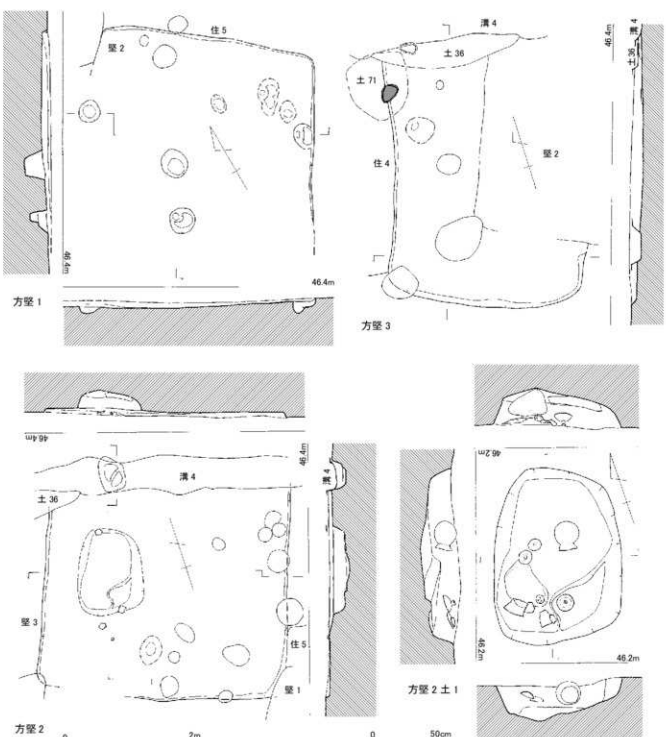
調査区の中央部付近で検出した。北辺を4号溝・36号溝によって破壊されるほか、東半分ほどを2号方形竪穴状遺構により大きく切られる。一方、西側で4号住居跡と71号土坑を切っておりこれに後出する。平面形状は(長)方形で主軸を北北東－南南西にとり、南辺・西辺と東辺の一部が検出できた。残存状況で規模は南北3.8m、東西3.0mをはかる。北西の71号土坑と重複する付近の埋土中に2カ所で焼土塊がみられたがいずれも床面より浮いていたといい、粘土や被熱硬化面などがないこととあわせ、カマドとは考えづらい。床面からは他にピットが1基検出されているが下

層遺構の可能性がある。出土遺物は土師器の小片がビニール袋1袋ほどあり、内面をケズリ込んだ器壁の薄い甕の胴部片が多く含まれることから、古墳時代前期の資料が多く含まれるものと判断される。図示した土器群とも齟齬はなく、本遺構は古墳時代前期に属すると考えられよう。

出土遺物（第21図、図版18）

縄文土器（11） 11は押型文土器の小片である。内面上部と外面には横位の楕円押型文を施し、内面下部はナデ調整。

土師器（12～14） 12・13は小形特殊器台の脚部あるいは台付き鉢。いずれも内面にナデを施し



第19図　2次調査Ⅰ区1～3号方形竪穴状遺構実測図（1/60・1/30）

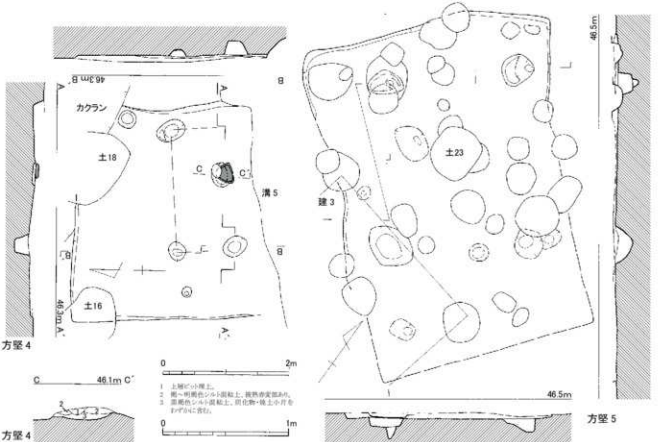
ており、外面は12がミガキ、13はハケメを施す。13には周囲三方に円形の穿孔があったと推定される。14は甕か。15はミニチュア土器である。

4号方形竪穴状遺構（第20図）

調査区北側のほぼ中央部で検出した。南側を5号溝に大きく破壊されるほか、北辺中央部を16号土坑に、北西コーナー部付近を18号土坑に、北東コーナー部付近を撹乱によりそれぞれ破壊される。平面プランは（長）方形で主軸を略南北にとる。規模は、南壁が失われており南北長は不明で現状2.7mほどを測り、東西幅は3.32mである。床面からはいくつかの小ピットが検出され、調査担当者は当初このうち2基を主柱穴としたがいずれも浅く雛しいだろう。また、南西コーナー部近辺で浅い掘り込みと粘土塊を検出し、当初担当者はこれを炉跡としたが、上層が被熱して炭化物を含むのに対し、下層は被熱せず炭化物をあまり含まない状況が炉跡にしては不自然であることから、埋土中に含まれていた（埋め戻し時に混入した、付近の竪穴住居跡のカマドなどを由来とする）被熱粘土のたぐいと考えたい。出土遺物は土師器を主体としてビニール袋半分ほどがあるが図示に耐えうるものは非常に乏しい。土師器を主体とすることから古墳時代の遺構と考えたい。

出土遺物（第21図）

縄文土器（16～18）　16･17は押型文土器である。16は内外面ともに横位の山形押型文を施す。17は外面に楕円押型文を横位方向に施文する。内面は剥落しており不明。18は外面に巻貝による擬縄文を施す。内面はナデ調整。擬縄文施文は、北久根山第二型式期の東北部九州の土器群として提示された「石町式」において、特に豊前の周防灘沿岸地域の遺跡で多くみられることが指摘されて



第20図　2次調査Ⅰ区4･5号方形竪穴状遺構実測図（1/60）

おり（林 2002）、本破片もこの時期に位置付けられる可能性が高い。

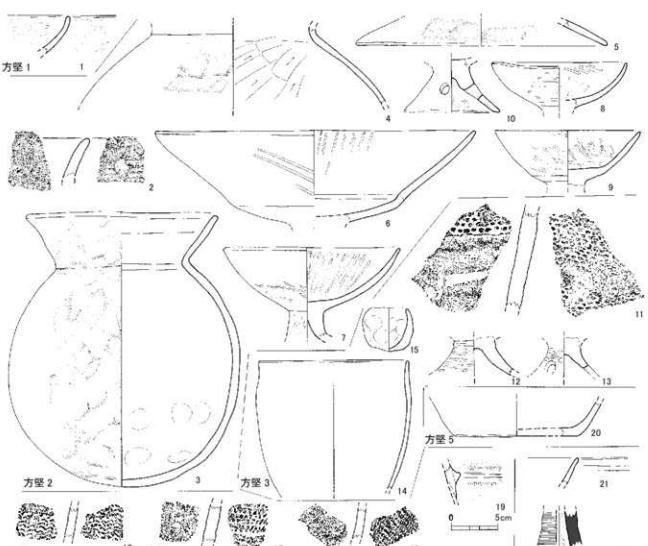
土師器(19)　19は壺の胴部と推定される。突帯を貼り付けた後に、その上下にハケメを施している。

5号方形竪穴状遺構（第20図）

調査区南端部のやや西寄りで検出した。3号建物跡のほか多くのピットに切られる。全体に削平されて残りは悪く、壁の残りは最大でも9cmである。平面形状は長方形プランを呈し、主軸は北東－南西、南西壁が検出できていないが担当者によれば遺構埋土の痕跡が広がった範囲より遺構の広がりを推定して復元したといい、それに従えば幅は5.4mほど、長さは3.88mを測ることになる。床面からはいくつかの小ピットが検出されたが、規則的に配列せず本遺構に伴うものかどうか判断できない。出土土器は土師器の小片がごくわずかみられる。3号建物跡に切られることから中世よりは古い遺構と考えられる。

出土遺物（第21図）

土師器（20）　20は土師器の坏身である。底部はほぼ平坦で、屈曲部から口縁端部に向けて広がる。内外面ともにナデを施す。



第21図　2次調査Ⅰ区掘立柱建物跡・柵列・方形竪穴状遺構出土土器実測図（19は1/4、他は1/3）

（6）土坑

調査時には、土坑についてはそのごく一部のみについて略号「SK」に1～64までの連番を付して調査を行っていた。しかし、その後整理時になって、調査担当者の判断により、調査時にピットや性格不明遺構として1/50平板図のみで記録していた多くの遺構を「土坑」と改めて報告することとした。したがって、これらの新たに土坑とされた遺構については、調査時点で土層図、写真などの記録を十分にとっておらず、報告書に掲載することができないものも多い。また本書に掲載する土坑の遺構図の多くは、整理時に1/50平板図より書き起こしたものであり、精度には大きな問題がある。このように、記録による検証ができない状況を作ってしまったことは極めて遺憾であった。一方では、調査時に土坑として番号を付与していたものの半分ほどを、土坑ではなくピットや包含層などとするなどの変更も行っており、了解されたい。

以下では、上のような作業を行った上で、本調査区から検出した遺構のうち75基を土坑として報告する。そのうち、当初より土坑と認識していたものは32基で、それ以外は調査時にはピットあるいは性格不明遺構としていたり、出土土器がなかったためそもそも遺構番号が付与されていなかったものである。また、これらの土坑の大半からは遺物が出土しておらず、所属時期の比定はほとんどできない。図示した土器には縄文時代早～前期の土器の小片が多いが、土師器の小片を伴うことも多く、これらの大半は縄文土器の所産ではなかろう。

以下、個別の遺構について説明を加えていく。

1号土坑（第22図、図版9）

調査区南寄りの東端で検出した。1号住居跡の西に接するが切り合い関係は確認できなかった。直径50cm弱でごく浅い。遺物は土師器の小片が数点あるが図示に耐えない。時期は不明。

2号土坑（第22図）

調査区中央北寄りで検出した。6号溝と5号溝が切り合う付近の南にあって、6号溝により北側を破壊されるほか、西に隣接する22号土坑によって西側が破壊されている。深さ15cm程度と浅く底面は平坦。出土遺物には、土師器・須恵器が数点あり、図示した土師器坏蓋より8世紀代に属する遺構と考えたい。

出土土器（第26図）

須恵器（1）　1は須恵器の蓋である。器高は低く、口縁端部を下に突出させる。8世紀代に位置付けられる。

3号土坑（第22図）

調査区中央北端で検出した。5号土坑と大部分重複していてこれを切る。不整長楕円形で底面は皿状。出土遺物はなく時期は不明。

4号土坑（第22図）

調査区中央西側で検出した。東に13号溝が、南に10号溝が、西に12号土坑が隣接するが切り合いはない。長軸80cmほどの小形の不整長楕円形で浅い。出土遺物には縄文土器の小片がある。

出土土器（第 26 図）

縄文土器（2） 2 は押型文土器である。外面には楕円押型文を横位に施す。内面はナデ調整。

5 号土坑（第 22 図）

調査区中央北端で検出した。北壁が北側の調査区外にひろがる。西壁を 3 号土坑に破壊されている。直径 200cmを超えるやや大形の土坑で不整形。出土遺物はなく時期は不明。

6 号土坑（第 22 図）

調査区北東隅部で検出した。浅い撹乱の中に位置する。南西に 19 号土坑が隣接するが切り合いはない。長軸 170cmほどの不整長方形できわめて浅い。出土遺物はなく時期は不明。

7 号土坑（第 22 図）

調査区南東寄りで検出した。北に 37 号土坑が、西に 9 号土坑が、南に 45 号土坑があるがいずれとも切り合い関係を持たない。長軸 170cmほどの不整長楕円形。出土遺物はなく時期は不明。

8 号土坑（第 22 図）

調査区中央部西端で検出した。48 号土坑の西、14 号溝の北、13 号溝の東にあるが相互に切り合い関係はない。不整長方形プランで長軸は 90cmほど。出土遺物はなく時期は不明。

9 号土坑（第 22 図）

調査区南東寄りで検出した。東に 7 号土坑が、南に 45 号土坑が隣接するが切り合い関係はない。不整楕円形プランで長軸は 110cmほど。出土遺物はなく時期は不明。

10 号土坑（第 22 図）

調査区北東寄りで検出した。北に 6 号溝が走り本土坑の北壁が破壊されている。不整形で長軸は 130cmほど。出土遺物は土師器の小片が数点で図示できない。切り合い関係から中世以前の遺構である。

11 号土坑（第 22 図）

調査区南東部にある。南にやや離れて 34･51 号土坑が、北にやや離れて 7 号土坑がある。隅丸方形プランで一辺 140cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

12 号土坑（第 22 図）

調査区西端で検出した。南に 21 号土坑が、東には 4 号土坑がある。ゆがんだ長方形で長軸 150cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

13 号土坑（第 22 図）

調査区中央北側で検出した。東に 4 号方形竪穴状遺構が、南に 5 号溝が、北に 16･55 号土坑が位

置するが切り合いはない。ゆがんだ楕円形状でテラスを有し長軸は140cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

14号土坑（第22図）

調査区の北東部で検出した。北に9号溝、東に5号溝、南に4号溝があるがそれぞれと切り合い関係にはない。ピットに破壊されているがおそらく長楕円形で長軸130cmほど。出土遺物は数点の土師器・瓦質土器の小片で、中世の遺構か。

15号土坑（第22図）

調査区中央部やや東寄りの南側で検出した。北に3号溝がありこれを一部破壊するほか、浅い凹みをいくつか切る。西には49号土坑が隣接するが切り合いはない。不整長台形で長軸は110cmほどをはかる。出土遺物には縄文土器がある。

出土土器（第26図）

縄文土器（3）　3は押型文土器である。外面には格子目の押型文を施す。内面はナデ調整。

16号土坑（第22図）

調査区中央北側で検出した。55号土坑に北壁を一部切られ、4号方形竪穴状遺構の北西部を一部破壊する。ピット等にも切られ全形は不明瞭だが不整長円形で長軸は130cmほどか。出土遺物はなく時期は不明。

17号土坑（第22図）

調査区南西部に位置する。2号住居跡と切り合い、これを破壊する。また3号溝と切り合い、これに一部を破壊される。不整円形の浅いテラスの中央部に不整形の掘りこみがある。長軸120cmほど。出土遺物はなく時期は不明。

18号土坑（第22図）

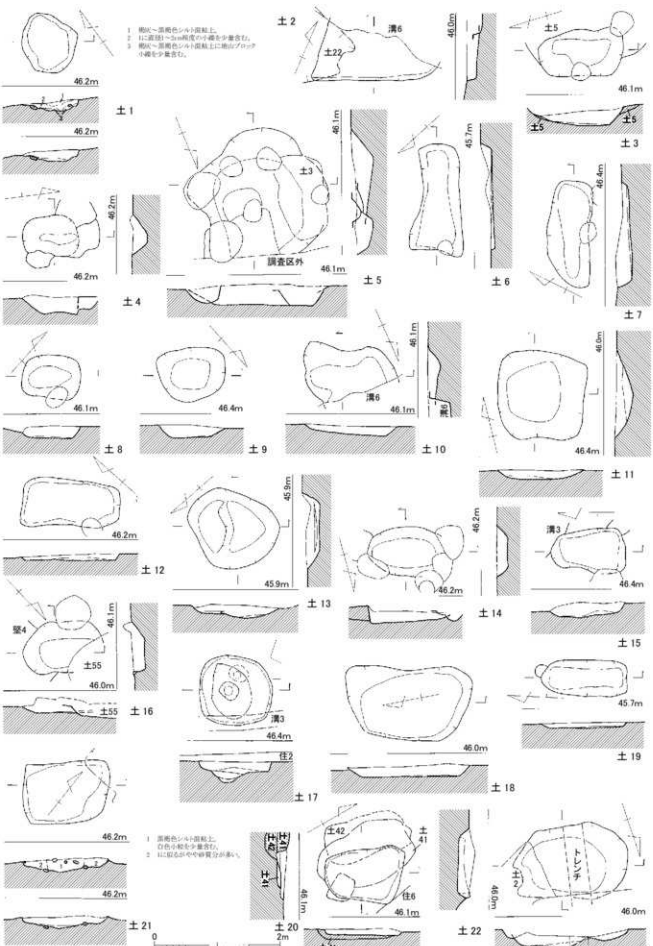
調査区中央北側で検出した。南に隣接する4号方形竪穴状遺構の北壁を一部破壊する。また土坑の大部分は北側にひろがる浅い撹乱の中にある。不整長円形で長軸は200cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

19号土坑（第22図）

調査区北西隅部で検出した。浅い撹乱の中に位置する。北東に6号土坑、南に46号土坑と3号住居跡が近接するが切り合いはない。略長方形で長軸140cmほどをはかる。出土遺物は土師器の小片が数点で図示できず、時期は判断できない。

20号土坑（第22図）

調査区北西側で検出した。西にある41号土坑を切り、その下層にある42号土坑とも位置的に重複する。東に隣接する6号住居跡とも切り合い、本遺構が後出する。不整長台形で長軸130cm弱を



第 22 図　2 次調査Ⅰ区 1 ～ 22 号土坑実測図（1/60）

はかる。出土遺物はなく時期は不明。

21 号土坑（第 22 図）

調査区南寄りの西端で検出した。南に 1 号住居跡・1 号土坑が、北には 12 号土坑があるがいずれもやや離れる。平面形は不整長方形で長軸 140cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

22 号土坑（第 22 図）

調査区中央北寄りで検出した。5･6 号溝が切り合う南側にあり、6 号溝により北側を大きく破壊される。東側で 2 号土坑を破壊する。他遺構に破壊されて全形は不明ながら平面形状は長楕円形とみられ残存長軸は 160cmほど。出土遺物はなく時期は不明。

23 号土坑（第 23 図）

調査区南西部にあり 5 号方形竪穴状遺構のほぼ中央部に位置していてこれを切る。平面形は隅丸方形で長軸 80cmほどをはかる。出土遺物には数点の土師器小片があるが時期は判断できない。

24 号土坑（第 23 図、図版 9）

調査区南西部にて検出した。北に 66 号土坑が、東に 27 号土坑が、南に 2 号柵列が隣接するが切り合いはない。北壁をピットに破壊されるが不整長円形で長軸 140cmほどをはかり、深さが 50cmほどあるしっかりとした遺構である。出土遺物には縄文土器が数点ある。

出土土器（第 26 図）

縄文土器（4） 4 は押型文土器である。外面には縦位の楕円押型文を施文する。楕円文は縦幅が約 8mm と大型である。内面はナデが施されている。

25 号土坑（第 23 図）

調査区南西隅部からやや東に寄った箇所に位置する。1 次調査区との境界付近にあり、1 次調査 7 号土坑に南側を一部破壊される。不整長方形状で長軸 190cmほどをはかる。中央にピットがあるが伴うかは不明。出土遺物はなく時期は不明。

26 号土坑（第 23 図、図版 10）

調査区南西部で検出した。63 号土坑を切る。南に 5 号方形竪穴状遺構、北に 62 号土坑が隣接するが切り合いはない。不整隅丸長方形状を呈し長軸は 120cm。縄文土器が数点出土した。

出土土器（第 26 図）

縄文土器（5･6） 5･6 は押型文土器である。5 は外面に横位の楕円押型文を施文する。内面はナデ調整。6 は口縁部片。内外面に横位の山形押型文を施す。山形文は大型である。

27 号土坑（第 23 図、図版 10）

調査区南西部に位置する。63 号土坑を切る。北に 2 号住居跡、西に 24 号土坑、南に 2 号柵列跡があり、2 号柵列跡の直線上に位置するが直接的な切り合いはない。平面形状は長方形で中央が一

段高く、東西がともに50～60cmの深さを持つ。2つの方形土坑の切り合いの可能性もある。長軸220cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

28号土坑（第23図）

調査区北東部に位置する。南には6号溝が、北東にやや離れて67号土坑が位置する。不整長楕円形で長軸180cmをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

29号土坑（第23図）

調査区中央北寄りにあって4号溝に北側を大きく破壊される。下層には4号住居跡がある。残された部分は長円形状を呈しごく浅い。出土遺物はなく時期は不明。

30号土坑（第23図、図版10）

調査区の北西寄りで検出した。北に5号溝が、南に4号溝が、東に64号土坑が隣接するが切り合いはない。長円形状を呈し長軸は110cm、中央部が一段掘り込まれる。土層では他遺構の切り込みに見えるが詳細は不明。出土遺物は土師器の小片が1点のみで、時期は判断できない。

31号土坑（第23図、図版11）

調査区北西部に位置する。41·42·75号土坑と切り合い関係にありこれらを切る。東に6号住戸居跡が隣接する。不整長方形で長軸150cmほどをはかる。出土遺物には縄文土器がある。

出土土器（第26図）

縄文土器(7～9)　7·8は押型文土器である。7は外面に横位の楕円押型文を施す。内面はナデ調整。8は口縁部片。内外面に横位の楕円押型文を施す。9は外面に二枚貝条痕を施す。施文方向は縦位。内面はナデ調整。7·8は早期、9は早期ないし前期か。

32号土坑（第23図）

調査区中央やや北西寄りにある。4号住居跡の中央部にあってこれを破壊する。不整長楕円形で長軸130cmほど。出土遺物は土師器の小片が数点で図示できず、時期は判断できない。

33号土坑（第23図）

調査区南西隅部に位置する。南側で35号土坑を切る。北には29·66号土坑が、西に2号建物跡が隣接するが切り合いはない。不整円形で直径120cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

34号土坑（第23図）

調査区南東部で検出した。西に51号土坑が、北に43号土坑が切り合い関係にはない。ゆがんだ円形で直径80cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

35号土坑（第23図）

調査区南西隅部に位置する。北側を33号土坑に切られる。25号土坑が東に、1号建物跡が西に

隣接するが切り合い関係はない。遺構はきわめて浅い不整円形で長軸推定130cmほど。出土遺物はなく時期は不明。

36号土坑（第23図、図版11）

調査区中央やや北寄りにあって、4号溝に北側を大きく破壊される。南側では4号住居跡、2·3号方形竪穴状遺構を切る。半円形の浅い落ち込みで遺構かどうか判断がつきがたい。

出土土器（第26図、図版18）

土師器（10）　10は土師器の脚付鉢である。坏部は内湾しながら開く。内面はナデ、外面上部はハケメのちナデを施している。外面下部は板ナデ。古墳時代前期に位置付けられる。

37号土坑（第23図、図版11·12）

調査区中央やや南寄りの東側で検出した。調査区中央を東西に走る撹乱の南に接し、一部をこの撹乱により破壊される。73号土坑と重複しこれを大きく破壊する。平面プランは長方形で、長軸は150cm、幅は80～100cm程度。検出面と土層に箱型の痕跡が認められたといい、調査担当者は木棺墓の可能性を主張し、土層図もそれを前提として作図しているようだが、土層写真を見る限り小口側の土層ラインが斜めに弧を描くように伸びており、木棺の痕跡とは考えにくい。別の遺構が上位から切り込んでいる可能性も考えたいが、調査時に認識できておらず今となっては不明である。ここでは、調査時の所見に従い1つの土坑として報告しておく。出土遺物は縄文土器・土師器の小片が数点あるが図示に耐えるのは縄文土器数点のみである。

出土土器（第26図）

縄文土器（11·12）　11は押型文土器土器である。11は外面に横位の楕円押型文を施し、内面はナデ調整。12は口縁部。内外面ともにナデ調整。外面には二枚貝の頂部押圧による施文が一ヶ所確認される。口縁部内面には、ヘラ状工具による斜め方向のキザミが施される。11は早期、12は早期ないし前期か。

38号土坑（第23図）

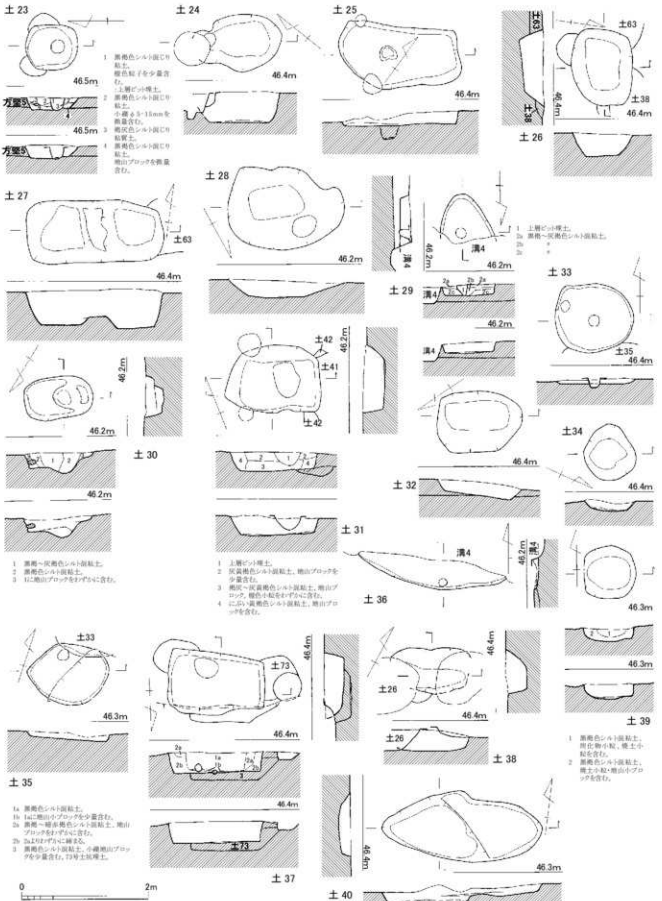
調査区南西部に位置する。西を26号土坑に破壊され、東を浅い落ち込みに破壊される。南に5号方形竪穴状遺構が隣接するが切り合い関係はない。全形は不整長楕円形と推測され、長軸は残存部分で120cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

39号土坑（第23図）

調査区中央部の南寄りにある。南に3号溝があるが切り合い関係はない。不整円形で直径80cmほどをはかる。出土遺物はビニール袋半分ほどあり土師器が主体であるがわずかに須恵器の小片を含む。古墳時代後期以降の遺構か。

40号土坑（第23図）

調査区南端の中央部付近で検出した。南に53号土坑が隣り合うが切り合い関係はない。平面形状は不整長楕円形で底面にはテラスがあり、その形状から2つの遺構が切り合っているのを単独の



第 23 図　2 次調査 I 区 23 ～ 40 号土坑実測図（1/60）

遺構と誤認した可能性もあろう。長軸は250cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

41号土坑（第24図）

調査区北西部に位置する。20·31号土坑に切られ、42号土坑を切る。東に6号住居跡が、南に5号溝があるが切り合いはない。平面形は不整長円形で長軸は160cmほどをはかる。出土遺物には縄文土器がある。

出土土器（第26図）

縄文土器（13） 13は貝殻条痕土器である。外面は縦位の二枚貝条痕を施し、内面はナデ調整。早期ないし前期に位置付けられる。

42号土坑（第24図）

調査区北西部に位置する。31·41号土坑に切られるほか、41号土坑を介して20号土坑とも重複しこれに先行する。後出する遺構に破壊されて旧状は不明な点が多いが、平面形状は不整長方形で長軸140cmほどをはかるか。出土遺物はなく時期は不明。

43号土坑（第24図）

調査区南東部で検出した。南に34号土坑が隣接するが切り合い関係はない。平面形状は不整長円形で長軸は120cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

44号土坑（第24図）

調査区北西部で検出した。75号土坑に北壁を破壊される。南に5号溝が、北東に31号土坑が近接するが切り合いはない。後出遺構に各所を破壊されて全形は不明ながら隅丸長方形か。残存部分で長軸120cmほどをはかる。出土遺物は縄文土器・土師器の小片が数点で図示できるものはわずかである。

出土土器（第26図）

土師器（15） 15は土師器の畿内系高坏である。坏部が直線的に開くもので、内外面ハケメ調整。口縁端部には部分的に沈線を施す。古墳時代前期に位置付けられる。

45号土坑（第24図）

調査区中央部南東寄りで検出した。南に3号溝が、北に9号土坑があるが切り合い関係はない。ピットなどに各所を破壊されるが、平面形状は不整楕円形とみられ規模は長軸190cmほどか。出土遺物はなく時期は不明。

46号土坑（第24図）

調査区北側の西端で検出した。西側は調査区外に伸びる。北東に9号土坑が、東に3号住居跡が近接するが切り合いはない。平面形状は不整長楕円形で規模は長軸220cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

47 号土坑（第 24 図）

調査区南東部で検出した。南に 52 号土坑が切り合う位置で隣接するが、相互の上下関係は把握できなかった。平面形状は不整形で規模は長軸 150cmほど。出土遺物はなく時期は不明。

48 号土坑（第 24 図）

調査区西側のやや中央寄りで検出した。14 号溝の北にあってこれを一部破壊する。また 13 号溝の東、2 号溝の南にあるが切り合いはない。平面形状は不整長円形で深さがあるしっかりとした遺構で、西側が一段低い。規模は長軸 140cmほどをはかる。出土遺物には縄文土器の小片がある。

出土土器（第 26 図）

縄文土器（16） 16 は縄文土器の深鉢である。口縁端部から外面口縁部直下にはナデ調整を施す。外面はこれ以下横位の楕円押型文を施文した後、部分的にナデを施している。内面は端部から 10cm 弱にかけて横位の楕円押型文を施文する。外面と同様、一部にナデの痕跡が認められ、文様がかすれている。

49 号土坑（第 24 図）

調査区中央部の南寄りで検出した。3 号溝の南にあって、さらに南には 40 号土坑が近接するが、切り合い関係はない。不整楕円形状を呈し、規模は長軸 120cmほどか。出土遺物はなく時期は不明。

50 号土坑（第 24 図）

調査区西側のやや中央寄りにある。東に 7 号住居跡が、西に 14 号溝があるが切り合いはない。平面形状は長円形で長軸 170cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

51 号土坑（第 24 図）

調査区南東部で検出した。西の 52 号土坑を一部破壊する。東には 34 号土坑があるが切り合いはない。平面形は不整長方形で長軸 250cmほどをはかる。出土遺物はわずかで時期は判断できない。

出土土器（第 26 図）

縄文土器（17） 17 は内外面ともにナデ調整の粗製土器である。

52 号土坑（第 24 図）

調査区南東部で検出した。北に 47 号土坑があり、切り合う位置にあるが先後関係は把握できなかった。東に 51 号土坑があって切り合い、本土坑が古い。平面形状は不整形で長軸 290cmほどと大きい。断面は皿状を呈する。出土遺物はなく時期は不明。

53 号土坑（第 24 図）

調査区南端の中央部付近で検出した。40 号土坑が北に隣接するが切り合いはない。平面プランはややゆがんだ隅丸方形で一辺 80cmほどをはかり、底部にテラスを持つ。出土遺物は土師器の小片が 1 点のみで時期は判断できない。

54 号土坑（第 24 図）

調査区南端の中央部付近で検出した。60 号土坑と重複し、本土坑が新しい。南に 1 次 22 号土坑が、西に 74 号土坑が、北に 53 号土坑が近接するが、切り合いはない。平面プランは長方形で長軸 110cmほどをはかり、堀方はややしっかりとしている。出土遺物はなく時期は不明。

55 号土坑（第 24 図）

調査区中央北側で検出した。16 号土坑の北側にあってこれを切る。南に 4 号方形竪穴状遺構が隣接するが切り合い関係はない。平面プランは隅丸長方形で長軸 180cmをはかり西壁沿いにテラスを有する。出土遺物はなく時期は不明。

56 号土坑（第 24 図）

調査区南西部に位置する。2 号住居跡の北にあり、本来相互に切り合い関係にあったと思われるが、2 号住居跡の北側は浅い撹乱で破壊されており、本土坑はこの撹乱中にあるため、切り合い関係は不明である。一部を小形のピットに切られているが全形は不整方形で一辺 90cmほどをはかり、深さも最大 50cm弱残されている。出土遺物は土師器の小片 2 点のみで時期は判断できない。

57 号土坑（第 24 図）

調査区北側の東端に位置する。東側は一部調査区外にひろがる。南側を 68 号土坑に切られ、西側に隣接する 69 号土坑を切る。北に 6 号溝が走るが切り合い関係はない。長円形を呈し検出部分で長軸 200cmほどをはかる。西側にテラスを有する。出土遺物には縄文土器の小片がある。

出土土器（第 26 図）

縄文土器（18） 18 は押型文土器である。外面と内面上部に、横位の山形押型文が施される。外面の山形文は、一部重複して施文されている。内面下部はナデ調整。

58 号土坑（第 24 図）

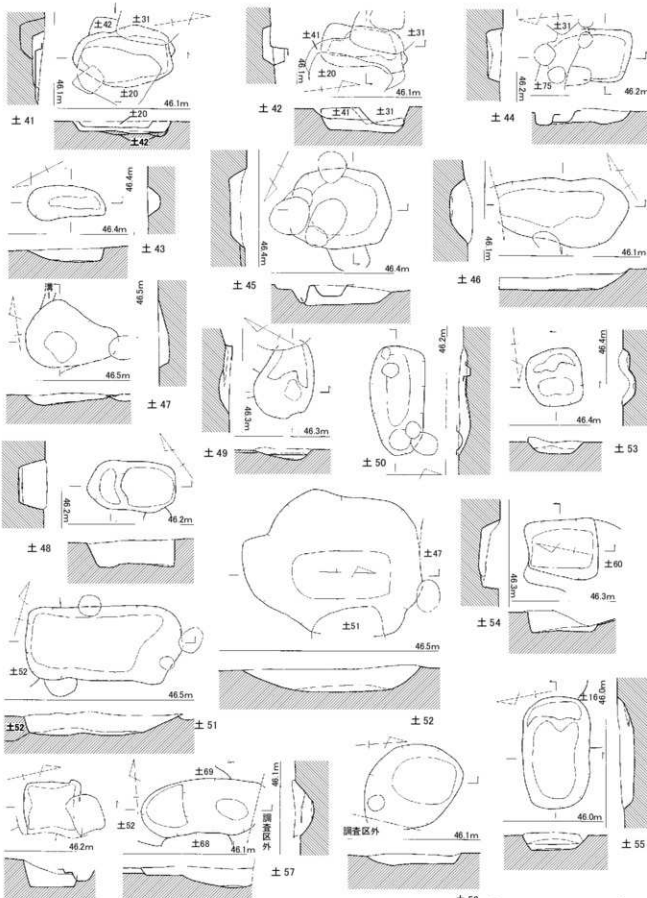
調査区北寄りの東端に位置する。東側は一部調査区外に伸びる。北に 68 号土坑があるが切り合いはない。平面形は不整円形で長軸 170cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

59 号土坑（第 25 図）

調査区南寄りの中央部やや東寄りで検出した。東に 9 号土坑が、南に 3 号溝が、西に 39 号土坑があるがいずれからもやや離れており切り合いはない。複数のピットに切られていて全形は不明ながら不整長楕円形状を呈し、長軸は 150cm弱ほどの規模を持つか。西側にテラスを有する。出土遺物は土師器の小片が 1 点あるが図示に耐えず、時期は判断できない。

60 号土坑（第 25 図）

調査区中央部の南端で検出した。54 号土坑に北側を大きく破壊される。南に 1 次 22 号土坑が近接するが切り合いはない。不整長方形状を呈し長軸は 160cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。



第 24 図　2 次調査Ⅰ区 41 ～ 58 号土坑実測図（1/60）

61 号土坑（第 25 図）

調査区中央やや西寄りにある。4 号住居跡の南にあるが切り合いはない。一部をピットに切られるがおおよその形は判明し、不整楕円形で直径 90cmほどをはかる。出土遺物はごくわずかで、土師器を主体として一部に須恵器の小片を含む。古墳時代後期以降の遺構か。

62 号土坑（第 25 図）

調査区南西部に位置する。北に 3 号溝、南に 26･63 号土坑、西に 2 号住居跡があるが切り合いはない。3 つのピットに破壊される。不整三角形状を呈する。出土遺物は土師器の小片 1 点のみで図示できず、時期は不明。

63 号土坑（第 25 図）

調査区南西部で検出した。西を 27 号土坑、東を 26 号土坑により切られ、大きく破壊される。南には 5 号方形竪穴状遺構があるが切り合い関係はない。残存部分より全形は不整楕円形とみられ、長軸 120cmほどの規模を持つか。出土遺物はなく時期は不明。

64 号土坑（第 25 図）

調査区中央やや北西寄りで検出した。西に 30 号土坑が、南に 4 号溝が隣接するが切り合いはない。一部をピットに破壊される。平面形状は不整円形で長軸 220cmと大形である。断面は浅い皿状で底面に不整形の掘りこみとピットが見られるがピットは下層遺構か。出土遺物はなく時期は不明。

65 号土坑（第 25 図）

調査区南西部に位置する。2 号柵列跡に切られ、これに先行する。東に 5 号方形竪穴状遺構が、南に 25 号土坑が、西に 33･35 号土坑が隣接するが切り合いはない。各所をピットにより破壊される。平面形状は不整長円形を呈するが、きわめて浅い掘りこみで遺構かどうか疑問も残る。出土遺物はなく時期は不明。

66 号土坑（第 25 図）

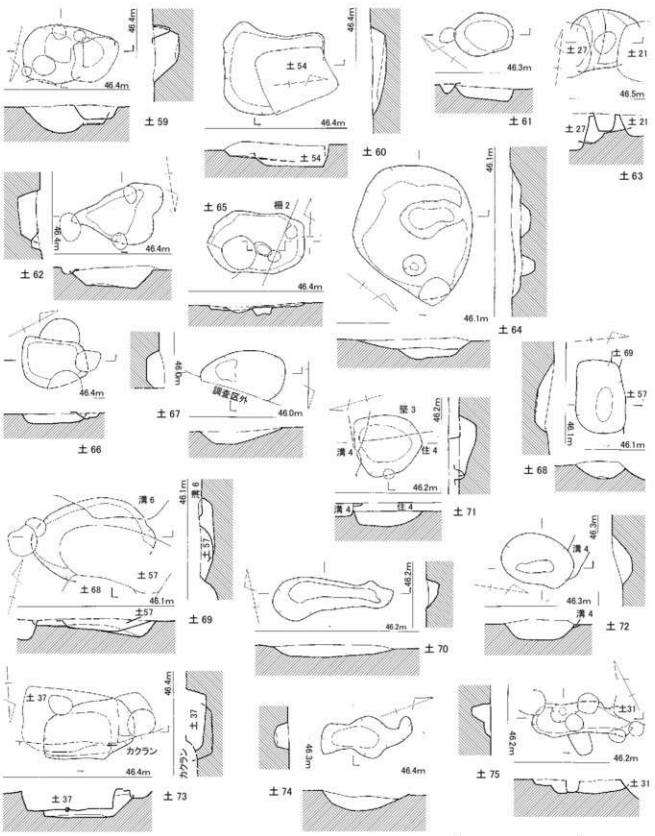
調査区南西部に位置する。東に 24 号土坑が、南西に 2 号建物跡が位置するが切り合いはない。いくつかのピットに破壊される。平面形状は不整台形で長軸は 100cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

67 号土坑（第 25 図）

調査区東寄りの北端にあって、一部は北側の調査区外にひろがる。平面形状は不整楕円形で長軸は 130cmほどをはかる。断面は皿状でごく浅い。出土遺物はなく時期は不明。

68 号土坑（第 25 図）

調査区北側の東端に位置する。北に隣接する 57･69 号土坑を切る。平面形状は隅丸長方形で長軸は 120cm弱をはかり、断面は皿状を呈する。出土遺物はなく時期は不明。



第 25 図　2 次調査 I 区 59 ～ 75 号土坑実測図（1/60）

69号土坑（第25図）

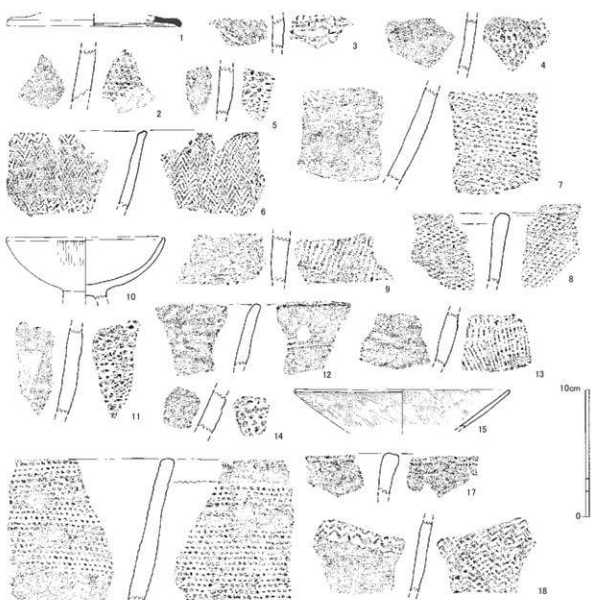
調査区北側の東端に位置する。57号土坑に東側を大きく破壊され、また6号溝に北壁を破壊される。ほかにピットなどにも切られていて全形はおぼろげだが不整長楕円形状を呈し長軸200cmほどをはかるか。出土遺物はなく時期は不明。

70号土坑（第25図）

調査区の北東側で検出した。南に4号溝が、西に5号溝があるが切り合い関係はない。幅30cmほどの溝状を呈し長軸190cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

71号土坑（第25図）

調査区中央やや北寄りに位置する。4号住居跡・3号方形竪穴状遺構の下層から検出された。平



第26図　2次調査Ⅰ区土坑出土土器実測図（1/3）

面形状は不整楕円形を呈し長軸 110cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

72 号土坑（第 25 図）

調査区中央やや北東寄りに位置する。4 号溝の東端部南側にあってこれを切る。長楕円形で長軸 120cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

73 号土坑（第 25 図）

調査区中央やや南寄りの東側にある。調査区を東西に横切る撹乱の南に接し、一部を破壊される。また、37 号土坑と重複していてこれに大きく破壊される。ほかに複数のピットにも破壊されていて全形は不明だが、残存部分より平面形状を推測すると不整長方形で規模は長軸 140cmほどをはかるか。出土遺物はなく時期は不明。

74 号土坑（第 25 図）

調査区中央南端部で検出した。東に 40·53·54·60 号土坑が隣接するが切り合い関係はない。不整形の溝状を呈し長軸 140cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

75 号土坑（第 25 図）

調査区北西部に位置する。44 号土坑を切り、31 号土坑に切られる。ほかに多数のピットにより破壊される。平面形状は溝状を呈し長軸 160cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

（7）溝

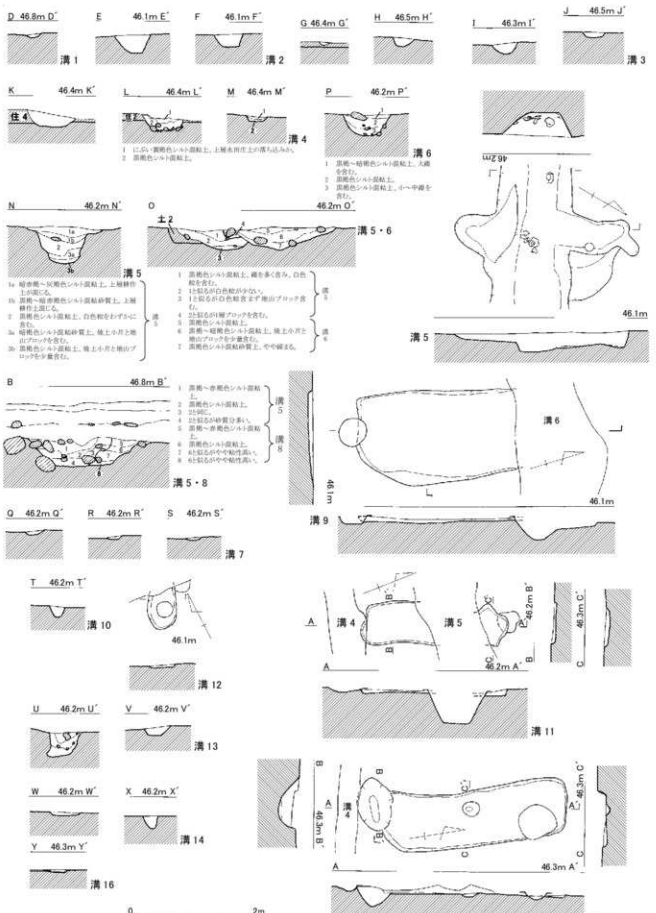
調査区内には細い溝状の掘り込みもいくつか確認された。規模の大きなものは主に調査区を東西方向に横切っており、圃場整備前の旧水田区画におおよそ方位が合致することから、そのほとんどは水田耕作に関わる溝と考えられよう。そのほか、小規模で浅い掘り込みや落ち込み状の痕跡についても溝とするが、そのうちいくつかは調査時には性格不明遺構（SX）や土坑（SK）、ピット（SP）として番号が付与されていたものを含む。そのようなものや、深さがほとんどなく連続性にも乏しいもの、遺物の出土がほとんどみられないものについては本当に溝状遺構としていいのか（あるいはそもそも遺構であるのかどうか）大いに疑問が残るところではある。ここでは、担当者が整理時に「溝状遺構」と判断した 16 条を報告する。

1 号溝（第 27 図）

調査区南東部に位置する。47 号土坑に切られる。南に 51·52 号土坑がある。検出長さ長さ 1.56 m、幅 0.40 m、深さ 0.06 mで、北東から南西に伸びる。きわめて浅く、出土遺物もないため、遺構として扱ってよいか疑問が残る。

2 号溝（第 27 図）

調査区西側の中央やや北寄りに位置する。南に 48 号土坑が、北に 7 号溝が近接するが切り合いはない。北北東から南南西に 2.2m ほど伸び、幅 0.6m、深さ 0.3m で北側が深い。断面は逆台形状。



第 27 図　2 次調査 I 区 1 ～ 16 号溝実測図 (1/60)

出土遺物はなく時期は不明。

3号溝（第27図）

調査区南部にあって東西方向に伸びる細い溝である。1·2号住居跡、17号土坑を切り、15号土坑に切られる。浅い溝で、中央部付近で一度途切れる。全長約22m、平均幅0.5mほどで深さは20cm弱。出土遺物は縄文土器・土師器の小片が数点である。切り合い関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

出土土器（第28図）

縄文土器（1） 1は押型文土器である。外面には横位の楕円押型文を施文する。内面はナデ調整。

4号溝（第27図、図版12）

調査区中央やや北寄りを東西に横切る溝である。4号住居跡、2·3号方形竪穴状遺構、36·71号土坑を切り、72号土坑に切られる。1次1号溝、2次3·6号溝と大略並行する。延長約24m、平均幅0.6m前後。断面は逆台形状で深さ30cm以下と浅い。出土土器には青磁・白磁碗があり、中世の遺構であろう。

出土土器（第28図）

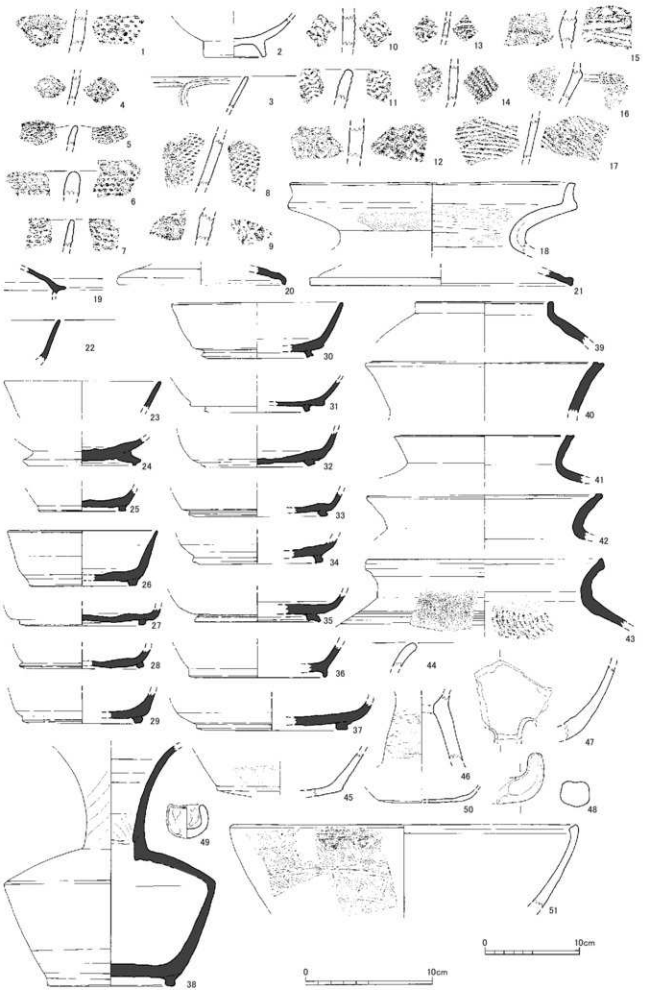
陶磁器（2·3） 2は白磁で高台付の椀。高台の端部を除いて透明釉がかけられる。3は青磁で椀の口縁部である。内外面ともに釉がかけられており、内面は器面を削って釉をかけることで文様を描いている。

5号溝（第27図、図版12）

調査区を北西部から北東部に向かってゆるやかに弧を描きながら横切る溝である。4号方形竪穴状遺構、6号溝を切るほか、6号住居跡とも切り合い関係を持つようだが付近は削平されていて前後関係は不明。担当者は西側の土層に2回の掘り直し痕があり、それぞれ6·8号溝に対応するというが、土層図が作成されておらず記録写真もないため検証のしようがない。東側の一部が南北に突き出すように広がっており、付近から第28図38に示した、古代に属する須恵器長頸壺が上半と下半に分かれて出土したことから、調査担当者は水場祭祀が行われた可能性を示唆する。確かに、図示するようにほかにも古代の遺物は多く出土している。しかし、本溝は中世に埋没したとみられる6号溝を破壊して掘り込まれていること、また出土遺物に数は少ないが土師質小皿等中世の遺物があることから、この長頸壺は5号溝の機能していた時期を示す資料とは考えがたく、従って水場祭祀との関連性についても認めがたいといわざるを得ない。たまたま埋土中に大片が混入したものであろう。埋土中に、礫や地山ブロックを含む層が多くみられることから、土層図に示された堆積状況こそレンズ状を示すものの、機能しつつ自然に埋没したと考えるよりは人為的に埋め戻されたと考えれば、大片の混入も理解できよう。以上から、本遺構は中世に属する水田開発に伴う溝と考えたい。

出土土器（第28図、図版18）

縄文土器（4～17） 4～9は楕円押型文を施文する一群。4～8は小型の楕円文を横位に、9は大型の楕円文を縦位に施文している。4は内面ナデで、外面に押形文を施す。5·6は口縁部内面に、7は口縁部外面には施文していない。8は内外面に施文しているが、内面下部の文様はナデ消



第 28 図　2 次調査 I 区溝出土土器実測図その①（18･41 ～ 43･50 は 1/4、他は 1/3）

されている。9は外面施文で、内面はナデ調整を施す。10～12は山形押型文を施文する一群である。いずれも横位施文で10・11は内外面に、12は外面に施文し、内面はナデ調整。以上は早期に位置付けられる。13は外面に沈線を施し、内面はナデ調整と推定される。14は外面に擬縄文を施す。内面はナデ調整。15は鉢の頸～胴部の破片である。外面には横ないし斜方向の沈線を施文する。内面はナデ調整。16は外面に一条の突帯を形成する。突帯には縄文ないし擬縄文を施している。内面と外面の隆起帯を除いた部分はナデ調整。17は内外面ともに二枚貝条痕を施文する。以上は後期に位置付けられる。

弥生土器（18） 18は複合口縁壷。頸部は強く屈曲して上方に開き、口縁部は短く外反して立ち上がる。頸部外面の一部と内面にはハケメを施し、他はナデ調整。

須恵器（19～37） 19～21は坏蓋。19はカエリをもつ。20は端部を下方に折り曲げる。21は端部付近の外面を凹ませている。22～37は坏身。22はやや外反しつつ立ち上がる口縁部の破片である。23は口縁部が開き、端部を丸くおさめる。24～37は高台が付く坏身である。24は高台が「八」の字状に開き、脚部の内面が接地するもの。25～37は、短い高台が底部端部より内側に付く27・29～33・35・37と、底部端部付近に付く25～27、34・36とがある。30・31は底部と口縁部の粘土接合により、境界に段を有する。36以外の高台は粘土貼り付けによって形成していることが確認できる。38は長頸壷。肩が張り、頸部から口縁部がラッパ状に開く。頸部はナデ調整を施すが、シボリ痕が残る。高台は粘土を付加して作られており、底部の高台内側に5mm幅の工具痕が一周する。39・40は壷。39は短頸壷である。口縁部は直口する。内外面ヨコナデを施し、外面には灰かぶりが認められる。40は広口壷の口縁部と考えられる。41～43は甕。41・42は口縁端部上面に平坦面を作り、内面に段を有する。41の胴部は、内面に同心円タタキの当て具痕が残っており、外面はタタキの後にナデを施している。43は口縁端部外面に平坦面を作る。胴部内面に同心円タタキの当て具痕が残ることから、胴部外面はタタキの後にカキメを施したと推定される。

土師器（44～48） 44は甕の口縁部。45は有段高坏である。全体的に磨滅しているが、坏部外面には一部ハケメが確認できる。46は高坏の脚部。残存部の上端には坏部が接合していたと推定される。外面はミガキ、内面はナデを施す。47・48は甑である。47は底部片。穿孔が二ヶ所認められる。48は把手。全体にナデ調整を施す。49はミニチュア土器。50は皿と考えられる。薄手である。

須恵質土器（51） 51は須恵質の鉢。外面は、波状文と沈線を交互に二段に渡って施している。

以上の遺物は、縄文時代早期、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代前期～中期、古代に属するものを含む。

6号溝（第27図）

5号溝の中央部付近から東に伸びる。5号溝に切られ、2･10･22･69号土坑を切る。検出長さ19m、幅は西側が細く平均で80cmほど、東側は両岸に浅いテラスが付き2mほどを測る。深さは浅く0.4mほどである。出土遺物にはパンケース1箱分ほどの土器があり、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器などが含まれる。最も新しい12世紀代の資料より、中世期の遺構と考えたい。

出土土器（第28図）

縄文土器（52～54） 52・53は外面に横位の山形押型文を施文し、内面はナデ調整を施す。54は

外面に格子目の押型文を施文する。内面はナデ調整で、上部は一部指頭圧痕が残る。

須恵器（55 ～ 60）　55 は蓋。天井部はヘラケズリを施し、その他はナデ調整。復元口径は 9cm と小型である。56 ～ 58 は坏身。いずれも底部の端部付近に粘土を付加して短い高台を作っている。59 は甕である。胴部はタタキを施す。60 は煙突か。外面は一部ケズリを施すが、これ以外はナデ、内面は外面のケズリに対応する部分に指頭圧痕が認められるが、他は横方向にナデを施す。焼きは硬質で他の須恵器と差は見いだせない。

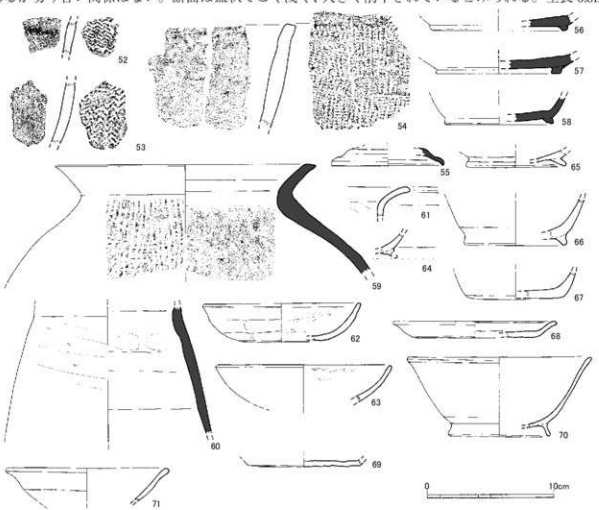
土師器（61 ～ 69）　61 は甕。口縁部は外反しながら開く。頸部下の内面はケズリ。62・63 は脚付鉢と推定される。62 は内面にミガキを施し、外面はナデ調整。63 は磨滅が激しいが、内外面ともにミガキを施している。

土師質土器（64 ～ 70）　64 ～ 66 は高台付の坏身である。いずれも粘土を付加して高台を形成する。67 は高台が付かない坏身。底部は平坦で、口縁部は上方に開く。68・69 は皿。底部はいずれも回転ヘラケズリの痕跡が残る。70 は土師質の坏身である。薄手で軽い。底部は回転ヘラケズリを施した後、高台を付加してナデ調整を施している。

以上の遺物は、縄文時代早期、古墳時代前期、古代に属するものが含まれる。

7 号溝（第 27 図）

4 号溝の南西部でこれと並行して断続的に伸びる細い溝。南には 2 号溝が、東には 4 号住居跡があるが切り合い関係はない。断面は皿状でごく浅く、大きく削平されているとみられる。全長 6.5m



第 29 図　2 次調査Ⅰ区溝出土土器実測図その②（1/3）

ほど、幅0.3mほどをはかる。出土遺物は土師器の小片が2点のみで図示できず、時期は不明。

8号溝（第27図、図版12）

調査区東寄りの北端で検出された。5号溝の下層にあり大半を破壊されている。調査区北壁でとった土層図を見る限り、底面には平坦な部分がみられ、5号溝と同様の逆台形状の溝か。出土遺物はない。5号溝に先行することから中世以前に属する。

9号溝（第27図）

調査区北東部に位置し6号溝に切られる。調査時には土坑としていた。検出長は2.5m、幅1.5mで深さは10cm以下ときわめて浅く、溝としていいか疑問。出土遺物は土師器の小片を主体としてビニール袋半分弱ほどで、中世の土師質土器碗とみられる小片が含まれることから中世期の遺構か。

出土土器（第29図）

土師器（71）　71は土師器の高坏である。薄手で、端部が若干肥厚する。内外面ともにナデ調整。

10号溝（第27図）

調査区西端の中央部に位置する。13号溝の南端部でこれを切るように東西に伸びる短い溝状遺構である。検出長1mほど、幅0.3m、深さ0.2mとごく小規模。出土遺物は土師器の小片が数点で図示できず、時期は不明。

11号溝（第27図）

調査区西端の北寄りにある。4･5号溝の西端部付近でこれらに切られる。北北東から南南西に伸び、検出長約2.3m、幅0.6m、深さ10cmほどで、溝として報告するのにためらいを覚える。出土遺物には土師器の小片があるが図示できない。切り合い関係から、中世以前の遺構である。

12号溝（第27図）

調査区西端部の北寄りにある。5号溝の西側でこれに直行する短い溝で、切られる。検出長0.7m、幅0.7m、深さ5cm弱で、溝として報告するのにためらいを覚える。土師器の小片が出土するが図示できない。切り合い関係から中世以前の遺構である。

13号溝（第27図、図版13）

調査区西端の中央部で、やや弧を描きながら南北に伸びる。南端部を10号溝に切られる。検出長5m弱、幅0.6mほど、深さ40cmほどをはかる。出土遺物は土師器の小片がビニール袋に半分ほどあり、雰囲気からは古墳時代前期のものが多いように感じられる。

14号溝（第27図）

13号溝の南東部で弧を描きながら北東から南東に伸びる短い溝である。48号土坑に切られる。検出長は3.7mほど、幅0.5m、深さ30cmほどをはかる。出土遺物はなく時期は不明。

15号溝（第27図）

調査区中央北東寄りで検出した。9号溝の南にある。検出面で長さ3m、幅0.8mの規模を持ち、深さはきわめて浅く5cmほどしかない。やはり溝と報告するには逡巡する遺構である。出土遺物は土師器の小片が1点あるが図示に耐えず、時期は不明。

16号溝（第27図）

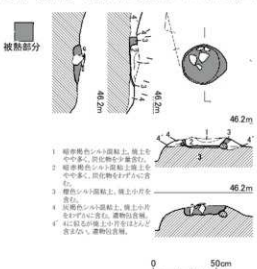
調査区中央やや東寄りにある。5号住居跡の南東部を切る短い溝である。当初担当者は5号住居跡のカマドから伸びるL字状の煙道とみていたようだが、カマドと接続しないこと、床面レベルと合わないこと、通常L字状カマドの煙道部分の埋土には焼土や炭化物を含まないのに、本遺構の埋土には含まれていること、そもそも煙道の壁体を構築するはずの粘土がみられないことなどから、煙道ではなく別の遺構ではないかと報告者が指摘し、報告時に溝とすることとなった。検出長は1.9m、幅0.3m、深さ5cmで、遺構としてよいのかすらためらいを覚える。出土遺物は土師器の小片が1点のみで図示できない。切り合い関係より5号住居跡に後出し古墳時代後期以降であろう。

（8）その他の遺構

炉跡（第30図、図版13）

調査区北側端部のほぼ中央部で検出した。直径30cmほどの略円形の小ピット状を呈し、深さは10cm弱である。埋土に焼土・炭化物の小片を含み、床面や壁が被熱して橙色に変化していた。削平により周囲の遺構はほとんど遺存しておらず、炉跡として報告する。おそらく、古墳時代前期以前の住居跡に伴っていたものではなかろうか。

土層図に示すように、周囲の地山直上に包含層が形成されており、担当者はこれを炉跡に関係する遺構埋土と考えていたようだが、切り合い関係があるため同時の遺構ではあり得ず、炉跡より古い遺構の埋土が断片的に残っているものと理解したい。



第30図　2次調査Ⅰ区1号炉跡実測図（1/30）

出土土器（第31図、図版18）

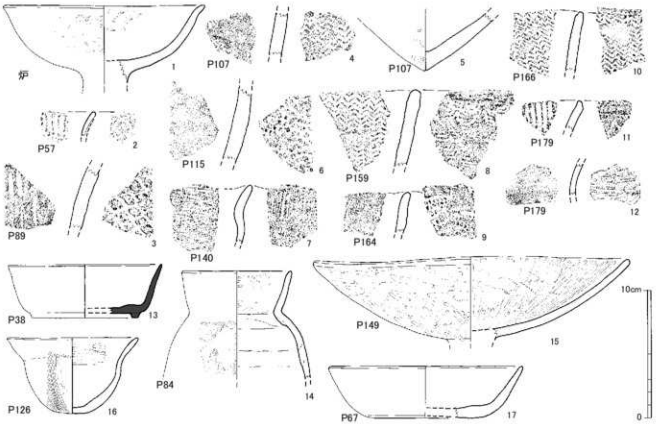
土師器（1）　1は土師器の高坏である。口縁端部は外反し、坏部は明瞭な屈曲部を持たない。内外面ミガキで、脚部との接合部付近はナデを施している。

（9）その他の出土土器

ピット出土土器（第31図、図版18）

調査区内からは多数のピットが出土した。形態が円筒形で柱穴状のものも多いが、不定形で基盤層中の石の抜け跡を誤認したものも多いと考えられる。土器が出土したものはほとんどないが、いくつかのピットからは図示に耐える土器が出土したので、ここでまとめて報告する。

縄文土器（2～12）　2の外面は剥落しており文様・調整は不明。内面には原体条痕が施される。P59出土。3は内面上部に原体条痕を施す。外面には大型の楕円押型文を縦位に施文している。



第31図　2次調査Ⅰ区炉跡・ピット出土土器実測図（1/3）

P89出土。4は外面に横位の山形押型文を施文する。内面はナデ調整。5は尖頭の深鉢の底部である。外面はナデ調整で、内面は磨滅のため不明。4・5はP107出土。6は外面に楕円押型文を施す。内面はナデ調整。P115出土。7は鉢の口縁部で、内外面とも口縁部付近は二枚貝条痕を施す。それ以下はナデ調整。P140出土。8は深鉢の口縁部。内外面ともに横位の山形押型文を施文する。P159出土。9は外面に横位の楕円押型文を施文する。内面はナデ調整。P164出土。10は深鉢の口縁部である。内外面ともに横位の山形押型文を施文する。P166出土。11は外面ナデ調整で、内面には縦位の原体条痕を施す。12は内外面ともにミガキを施す半精製品で後期に位置付けられる。11・12はP179出土。

須恵器（13）　13は須恵器の坏身である。底部と口縁部との境は強く屈曲させ、高台を底部端部付近に貼り付けてナデ調整を施している。P38出土。

土師器（14～16）　14は壺。口縁部が直線的に立ち上がる小型丸底壺であろう。胴部外面はハケメ、口縁部外面から端部はナデ、口縁部内面はハケメの後にナデを施す。胴部内面もナデを施しているが、粘土接合痕が確認できる。P84出土。15は高坏。坏部は内湾しつつ開く。外面上半部は横方向の板ナデの後ミガキ、下半部は縦方向のケズリの後ミガキを施している。内面は放射状にミガキを施す。P149出土。16は鉢。椀形の体部に外方に開く口縁が付く。体部外面と口縁部内面にはハケメを施す。P126出土。17は土師質土器の坏である。底部に糸切り痕が残る。P67出土。

調査区内出土のその他の土器（第32･33図、図版19）

2次調査において出土した土器のうち、遺構に伴わないものをまとめて報告する。表土剥ぎ中に採集した遺物や、調査区の東西両側にある段落ちを埋積していた遺物包含層中の出土遺物、また遺

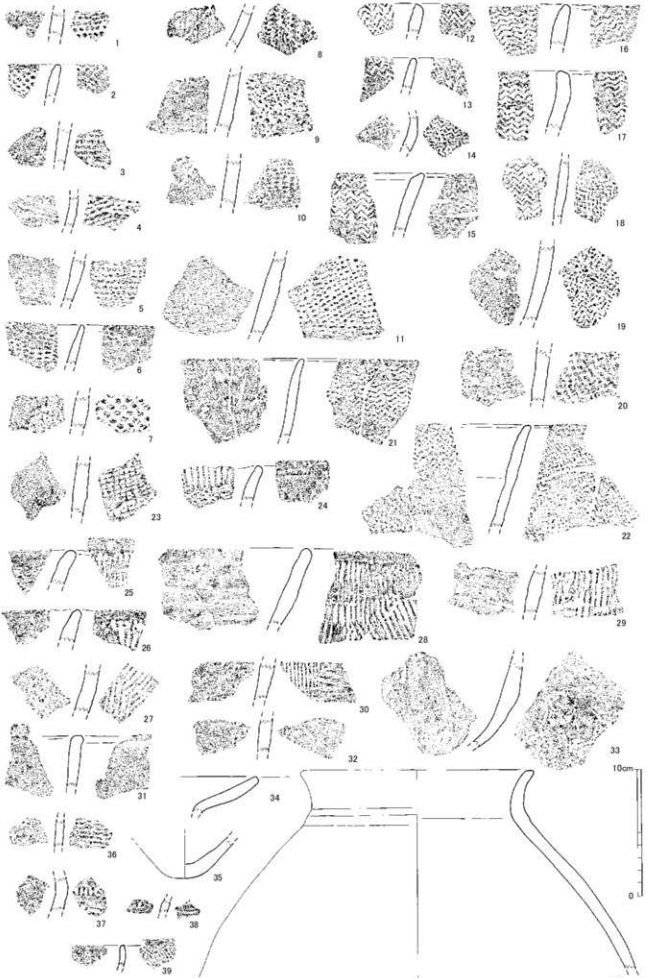
構検出中に採集した遺物などを含む。

縄文土器（1～40）　1～11は楕円押型文を施文する一群である。いずれも横位施文。7の楕円文は他と比べて大きい。1・3～5・7・10・11は外面に楕円押型文を施文し、内面はナデ調整。2は内外面ともに楕円押型文を施文する。6は内外面ともに楕円押型文を施文するが、外面口縁部直下には山形押型文を施す。8は外面に楕円押型文を施文し、内面は条痕。9は外面楕円押型文で、内面は上部がナデ調整、下部では条痕が認められる。12～22は山形押型文を施文する一群である。12・13・15～17は内外面ともに横位の山形押型文を施文する。14は施文方向が不規則である。18は外面の施文方向がやや斜めであることから、内面と外面の施文方向が一致しない。19～21も外面に横位の山形押型文を施文し、19・21の内面はナデ調整、20の内面はヘラケズリのちナデ調整。22は外面と内面口縁部直下に横位の山形押型文を施文する。内面下部は強いナデを施している。23は外面に格子目の押型文を施文する。内面はナデ調整。24は口縁部片。外面はナデ調整。内面口縁部直下には縦位の原体条痕を施し、それ以下には横位の楕円押型文を施文する。以上は早期に位置付けられる。25～29は外面に条痕文を、内面にナデ調整を施すものである。28・29は二枚貝条痕、26・27も二枚貝条痕か。25は口縁端部に棒状工具によるキザミが一ヶ所確認できる。29は外面の二枚貝条痕を一部ナデ消している。30は外面上部に縦方向の条線を施し、下部は一部に強いナデが確認できる。内面は磨滅しているがナデ調整と考えられる。31は内外面ともにナデ調整。32は磨滅のため調整不明である。33は外面に荒いヘラケズリとナデを施す。内面はハケ状の工具によるナデ調整。34は口縁部の破片である。器面が剥落しており、調整等は不明。早期塞ノ神式期に位置付けられる。35は尖底の底部片である。36は外面に横方向の撚糸文を施す。内面はナデ調整。37は破片外面の中ほどに工具によるキザミを施し、その下には沈線文が確認される。38・39は外面に擬縄文を施す。内面はナデ調整。いずれも後期。40は壷か。口縁部は一部を除いて欠損しているが、波状口縁になる可能性がある。内面の口縁部から頸部までと外面はナデ調整。内面の頸部以下は条痕を施した後にナデ消す。頸部外面は横方向のナデにより突帯状の隆起が一条形成されている。

弥生土器（41～42）　41は平底の壷底部である。内外面共にハケメ、外面はハケメの後にナデを施す。弥生時代中期に位置付けられる。42は高坏。外面にはミガキを施す。弥生時代中～後期か。

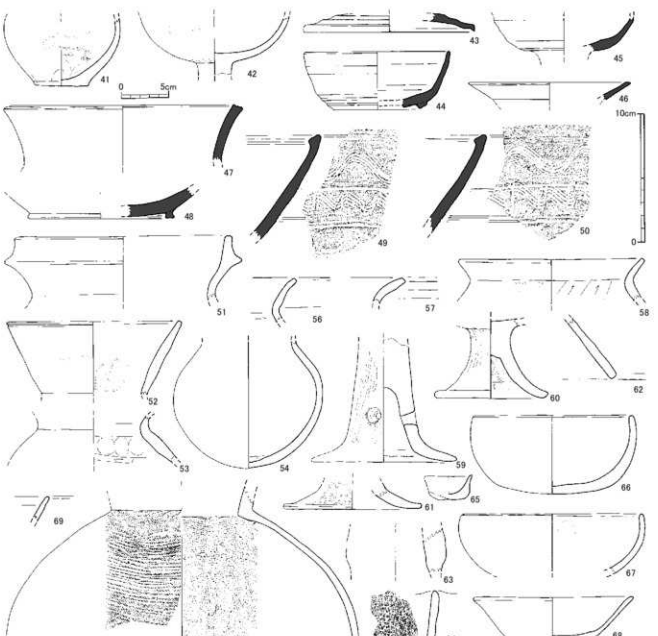
須恵器（43～50）　43は蓋。口縁端部を下に折り曲げる。44は坏身。底部と口縁部の境がなだらかに屈曲し、内側接地の短い高台を貼り付けている。45は高坏。坏部外面下半は回転ヘラケズリの痕跡がみられる。46は鉢の口縁部片。端部上面を平坦におさめる。47は甕。口縁部は外反しつつ開く。端部はナデによって中央部が凹む。48は脚付壷の底部。短い高台を貼り付ける。49・50は高坏形器台の破片。形態、沈線・波状文の入り方から、同一個体の可能性があるが、一応別に示した。口縁端部は、内傾し、内面に段を形成する。外面には、上から順に、幅の広い波状文、沈線一条、幅の狭い波状文、沈線二条を描いている。

土師器（51～66）　51～55は壷。51は二重口縁壷である。頸部はしまりがなく、口縁部はやや外反しつつ短く直線的に立ち上がる。内外面共にナデ。52は畿内系の直口壷の口縁部である。一部にハケメが残るが、全体にナデ調整で仕上げている。53・54は小型壷。いずれも内外面ともにナデ調整。55は布留式期の二重口縁壷もしくは直口壷と考えられる。頸部は外反して外に開く。外面胴部上半はハケメ、下半はタタキを施し、内面はハケメを施した後に一部を指あるいはヘラなど

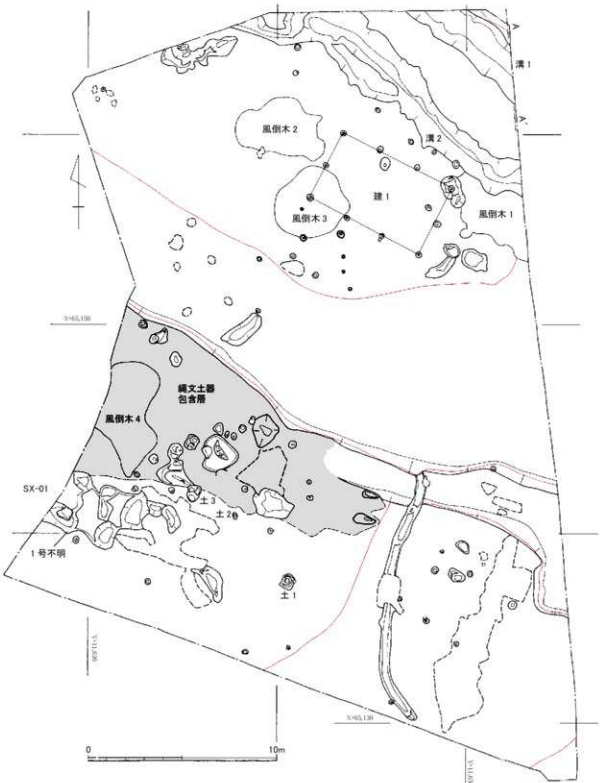


第 32 図　2 次調査Ⅰ区包含層等出土土器実測図その① (1/3)

の工具でナデを施している。56～58は甕。56は内面頸部直下にケズリを施す。57は内外面ともにナデ調整。58の頸部直下外面はハケメ、内面はケズリ。59～62は高坏。59は下半が中空の脚柱部から緩く屈曲して裾部が開く。三方向に円形の穿孔を施す。脚部外面はミガキ、内面はナデ。60の脚部は、短くハの字状に裾部が開く。外面はハケメで、裾部はナデ。脚部内面の上半は、ハケ先によるケズリの痕跡が確認でき、下半はハケメの後にナデ。61の脚部も裾部に向けてハの字状に開く。外面はミガキで、一部縦方向に暗文様にミガキを施している。内面はナデ。62は高坏脚部の破片。端部にむけて開く。63は被熱による器面変質が認められることから、羽口と考えたい。内面はナデを施す。64は製塩土器か。外面はヘラ状工具によるナデ、内面には布目圧痕が確認できる。65は手捏ねのミニチュア土器。66・67は椀。いずれも口縁端部でやや内湾する。ナデ調整を施すが、67の内面には一部ハケメが残る。68は坏身。ごく薄い。底部はヘラ切り後未調整。



第33図　2次調査Ⅰ区包含層等出土土器実測図その②（1/3）



第 34 図　時末遺跡第 2 次調査Ⅱ区遺構配置図（1/200）

4　2次調査Ⅱ区の成果

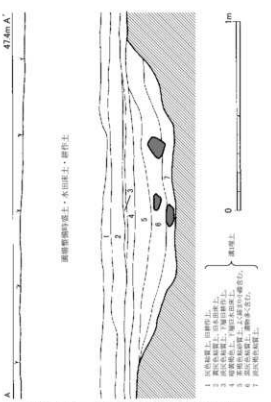
（1）概要

調査区の概要　第2次調査Ⅱ区は、第1次調査区・第2次調査Ⅰ区と市道・用水路を挟んだ西側水田面にあたる。試掘調査や圃場整備前の地形図などから、市道・用水路部分には谷状地形が入ることが分かっており、第1次調査区・第2次調査Ⅰ区とは地形のまとまりの上では別個の尾根状台地上にあたることとなる。北には用水路を挟んで西ノ原遺跡第1次調査区が隣接するが、この用水路付近にも谷地形が伸びており、調査地の乗る尾根状台地はこの用水路付近までで北端部が限られることとなる。なお、西ノ原遺跡第1次調査区とのあいだを流れる谷地形は南の塔田池に端を発しており、調査区の西側を南西から北東に向かって伸びる。したがって、第2次調査Ⅱ区は、東西を谷状地形に挟まれた細い尾根の先端部に位置することとなる（第3図）。なお、この尾根は幅を広げながら南に伸びて現在の永久の集落へとつづく。

調査区の平面形状は南側が幅広い略台形状で、調査面積は845㎡である。遺構検出面は南側に行くにつれて徐々に高まっており、また途中に旧水田区画と思われる低い段がある。標高は南部が約46m、北部で約47mをはかる。

基本土層　調査区の旧状は水田であった。この水田は、圃場整備時に1.5mほどの分厚い盛土が施されており、盛土を全て除去すると地山が現れることから、圃場整備時には旧水田耕作土や床土などを大きく削平している可能性が高い。地山は黄白色粘質土で大小の角礫をまれに含み、付近の丘陵地におけるかなり深部の基盤層にあたることから、圃場整備時には耕作土のほかに基盤層の上位も大きく削平している可能性が高い（第35図）。

検出遺構　第2次調査Ⅱ区で検出した主な遺構は掘立柱建物跡1基、土坑3基、溝3条で、そのほかピット群や縄文時代包含層などがある（第34図）。遺構のほとんどは中世のものとみられる。以下、個別の遺構ごとに説明を加えていく。



第35図　時末遺跡第2次調査Ⅱ区
基本土層・1号溝土層図（1/40）

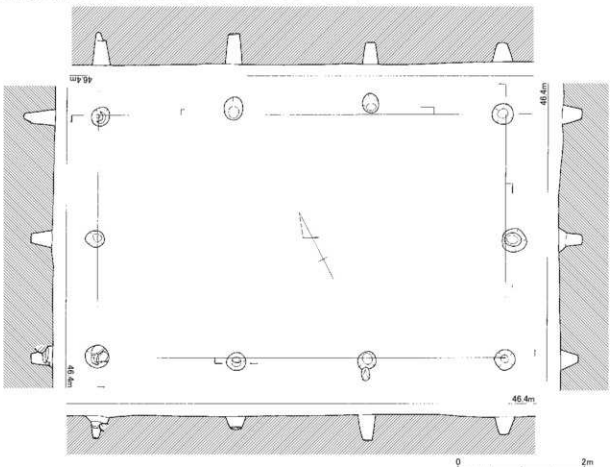
（2）掘立柱建物跡

調査区北側の一段低い部分から1棟の掘立柱建物跡を検出した。埋土の特徴や出土遺物などから、中世期に属する建物跡と考えられる。このほか調査区内からはいくつかの小ピットを検出しているが、ほかに建物跡や柵列などを復元することはできなかった。

1号掘立柱建物跡（第36図、図版14）

調査区の北東寄りにある。3×2間の側柱建物で、長軸を西北西－東南東にとる。北に1･2号溝があり、これらの溝が伸びる方向と大略長軸方位が一致する。規模は、桁行6.42～6.48m、梁

行は3.84～3.88mをはかり、柱間は桁行分がやや広く2.10～2.20m、梁行分がやや狭く1.90～2.00mをはかる。柱穴はいずれも小形の円形で深さは30～50cmほどとややばらつきがある。柱穴からは土師質土器の小片が出土したが図示に耐えうるものはない。



第36図　2次調査Ⅱ区1号掘立柱建物跡実測図(1/60)

(3) 土坑

調査区南側の一段高い部分より3基の土坑を検出した。いずれも小形の不定形を呈し、深さは浅い。出土遺物は乏しいが埋土の特徴が溝と共通することなどから中世期の所産と考えておきたい。

1号土坑（第37図、図版16）

調査区南側の中央部で検出した。平面形状は不整楕円形状を呈するが、最も深いところでも10cm程度の深さしかなく、かなり削平されていて本来の形状は失われているものとみたい。底部中央が一段掘り下げられており、その周囲に幅の狭いテラスがめぐる。他の遺構との切り合い関係はない。出土遺物はなく時期は不明。

2号土坑（第37図、図版16）

調査区の中央南寄りで検出した。南に1号土坑が、西に3号土坑があるがともにやや離れている。縄文土器包含層の上層より掘り込まれており、また北側の一部が撹乱により破壊されている。平面形状は不整形であるが、深さが20cm程度と浅く、大きく削平されていて掘り込まれた当時の形状

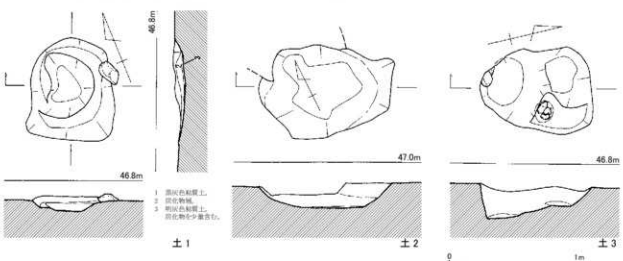
を残していないのであろう。埋土は1号土坑と共通し、出土遺物は土師器・須恵器の小片があるが図示できるものはない。

3号土坑（第37図、図版16）

調査区南側の1段高い部分にあり、調査区の南西部に位置する。東に2号土坑がやや離れて隣接し、南西には中世の石捨て遺構とみられるSX－01もあるが、ともに切り合い関係にはない。縄文土器包含層の上層より掘り込まれた遺構である。平面形状は不整長楕円形で底面には2段のテラスがあり、最も深い場所で30cmほどをはかる。埋土は1·2号土坑と類似し、出土土器は土師質土器の小片が数点あり、うち1点を図示する。

出土土器（第38図）

土師器（1）　1は土師器の坏身である。底面は平坦で底部外面をヘラ切りにより切り離したあとナデ調整を施す。体部は斜めに直線的に立ち上がる。古代の遺物である。



第37図　2次調査Ⅱ区1～3号土坑実測図（1/30）

（4）溝

調査区の北東部に2条、南東部に1条の溝状遺構を検出した。北東部の2条は平行して走るものとみられ、幅も大きい。一方南東部の1条は幅が狭く浅い。

1号溝（第34図、図版16）

調査区の北東端部で検出した。南東から北西に伸びる溝で、南に隣接する2号溝とほぼ並行している。調査区隅にかろうじて検出された状態で全容は不明であるが、検出部分では直線的に伸びていて幅は2.5m、深さは0.4mほどをはかる。埋土は3層に分かれ、レンズ状堆積で埋没している。出土土器は弥生土器・土師器・中世の土師質土器からなりビニール袋に1袋ほどがある。図示するように土師質土器の小皿や碗を含むことから中世期の遺構と判断される。

出土遺物（第38図）

土師質土器（2～4）　2は土師皿である。底部と口縁部の境で屈曲して開く。器面は磨滅しており、

調整等は不明。3・4は土師質の高台付椀。いずれも細く高い高台を貼り付ける。いずれも中世に位置付けられる。

2号溝（第34図、図版16）

調査区北東部で検出した。南東から北西に伸びる溝で、北に隣接する1号溝とほぼ並行に走る。検出長は18mほどでやや蛇行しながら伸びており、幅は広いところで3mほど、深さは0.4mほどをはかり、一部にテラスが見られる。1号溝と並行する点から、同時期に機能していた可能性が高い。出土土器は土師器・土師質土器の小片でビニール袋1袋はどあるが図示に耐えうるものはない。土師質土器を含むことから中世の遺構と考えられる。

3号溝（第34図、図版16）

調査区南部の一段高い部分で検出された。やや東寄りに位置しており南北方向に蛇行しながら伸びる。北側は段落ち部で消失しているが削平により失われたもので本来はさらにのびていたものとみたい。検出長は13.5m、平均幅0.5m、深さ0.25mほどをはかる。出土土器はなく時期は不明。

（5）その他の遺構

調査区内で検出した遺構のうち性格が不明なものとしてSX－01を、また人為的な遺構ではないが遺物を伴うものとして風倒木痕をここで報告しておく。

SX－01（第34図）

不定形の掘りこみ遺構で、複数の不定形の土坑を重複して掘り込んだような形状を持つが、埋土からは複数回の掘りこみを認識できず、埋没は同時か、短期に集中して起きたものと考えられる。出土土器には土師器・土師質土器の小片が数点あり、中世の遺構と考えられること、埋土中には大小の石が多く含まれることから、中世期に水田開削などで地盤を掘削した際に出た大小の石を廃棄するために掘り込んだ廃棄土坑の可能性が考えられよう。出土遺物に図示できるものはない。

1～4号風倒木痕（第34図）

調査区の各所で、遺構面を掘り込むように形成された風倒木痕が4箇所で確認された。これらの風倒木痕については、人為的なものではないことから他の遺構のような調査はしていないが、一部の風倒木痕からは縄文～弥生時代の土器が出土したため、遺物が出土したものについては完掘している。出土した土器については、風倒木痕ごとに報告する。

1号風倒木痕出土土器（第38図）

縄文土器（5～12）　5は外面に擬縄文と鉤手状の沈線文を施す。内面はナデ調整。6は屈曲部を有し、口縁端部までやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにナデ調整。7～9は外面に横方向の沈線文を施す。7の沈線間には板ナデもしくは擬縄文のような調整痕が確認できる。内面は板状工具によるナデ。8・9の内面は磨滅のため調整等は不明。9は浅鉢の口縁部の可能性。10は内外面ともに器面剥落のため、調整等は不明である。11は半粗製の深鉢である。口縁部は波状を呈し、内

面には沈線を有するが、明瞭ではなく意識的に施されたものかは不明である。内外面ともに磨滅のため調整等は不明。12は壷底部。レンズ底。内面は黒変している。これらの縄文土器は、後期中葉～後葉の時期幅で捉えられると考えられる。

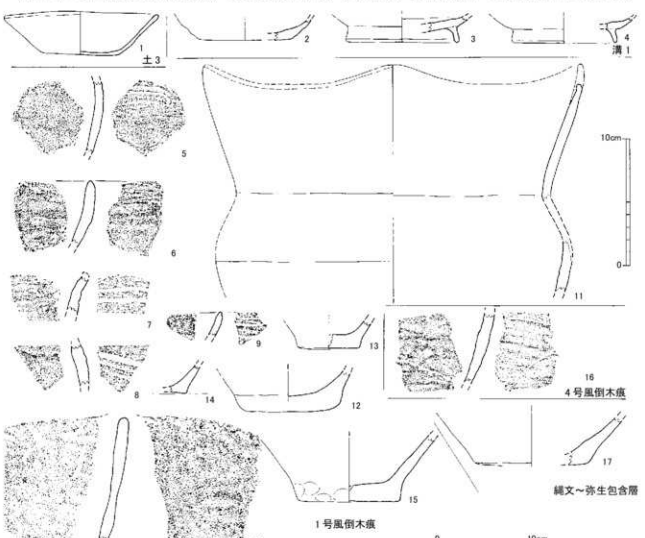
弥生土器（13～15）　13・14は壷もしくは甕の底部である。13は平底、14は底部中央が上げ底気味になる。いずれも磨滅のため調整は不明。15は壷。平底で、器面はほぼ磨滅しているが、底部付近外面には指頭圧痕が残る。

4号風倒木痕出土土器（第38図）

縄文土器（16）　鉢の胴部片か。外面は巻貝条痕を横方向に施している。内面は磨滅のため調整等不明。

（6）その他の出土土器

ここでは、明確な遺構に伴わなかった出土土器について述べる。そのような遺物として、ひとつは中世の遺構面下層に形成されていた縄文～弥生時代の遺物包含層がある。また、風倒木痕の中に包含されていた縄文時代遺物も、ここで報告する。そのほか、表土掘削中・遺構検出中に出土した



第38図　2次調査Ⅱ区出土土器実測図（13～15は1/4、他は1/3）

遺物、また金属器や石器など土器以外の出土遺物についてもまとめて報告する。

縄文～弥生時代包含層出土土器（第38図）

調査区南部の一段高い部分の中央から西側にかけて、縄文～弥生時代の遺物を包含する遺物包含層が形成されていた。中世期の土坑やピットが上層から掘り込まれていること、これらが大きく削平をうけている可能性が高いことなどから、この包含層は後世の盛土工事等によって形成されたものではないと考えられる。また、4号風倒木痕もこの包含層の上位に形成されている。

弥生土器（17）　17は平底の壺の底部。器面は磨滅しており、調整等は不明。

5　時末遺跡第1･2次調査出土のその他の遺物

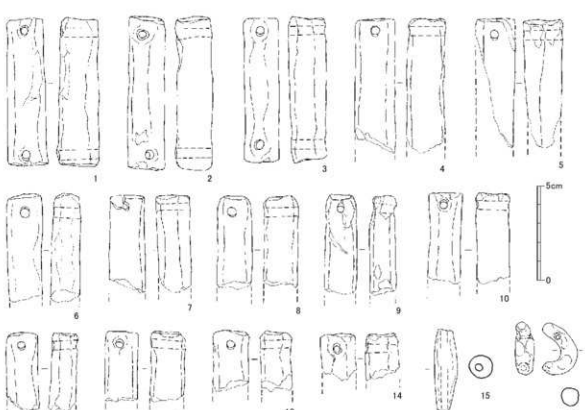
以下、時末遺跡第1･2次調査で出土した土器以外の遺物についてまとめて報告する。

（1）土製品（第39図、図版19）

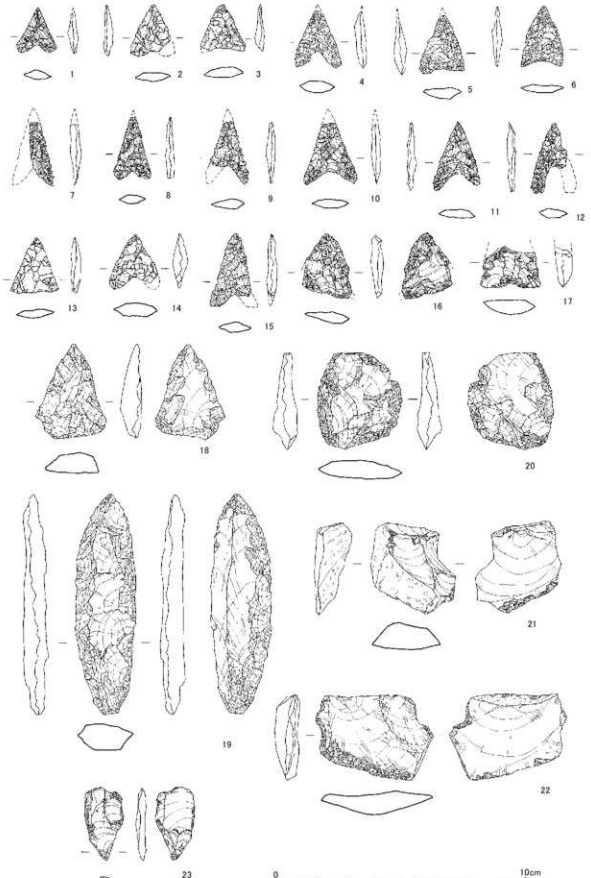
時末遺跡第1･2次調査で出土した土製品についてまとめて報告する。土製品には棒状土錘・管状土錘・土製勾玉があるが、いずれも包含層等からの出土である。

土錘（1～15）　1～14は棒状土錘。折損しているものが多いが、完形のものからみると規格性があるようである。いずれも焼成前に両端に径3㎜の孔をあける。15は管状土錘。胎土はいずれも精良。

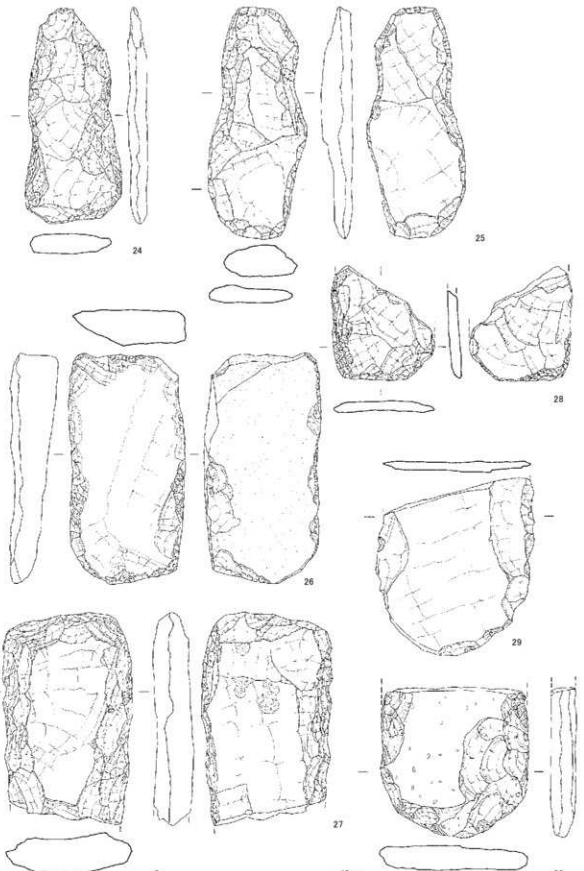
土製勾玉（16）　16は土製勾玉。表面に指頭圧痕が残るやや雑な作りである。



第39図　1･2次調査区出土土製品実測図（1/2）



第 40 図　1･2 次調査区出土石器実測図その① (2/3)



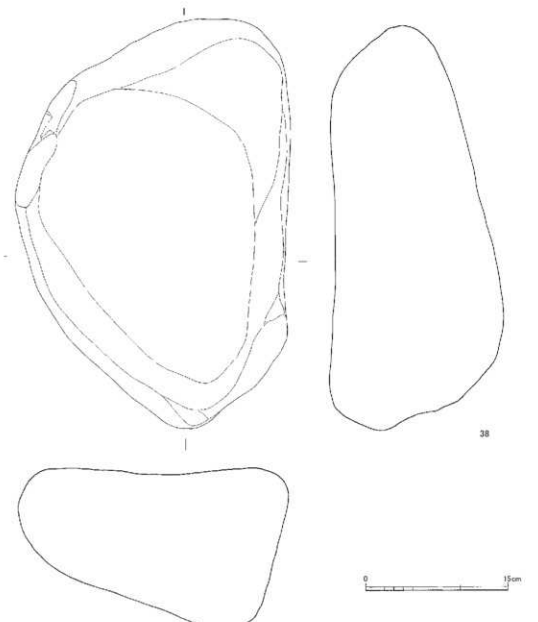
第 41 図　1･2 次調査区出土石器実測図その② (1/2)

第 42 図　1･2 次調査区出土石器実測図その③（36 は 1/4、他は 1/2）

（2）石器・石製品（第 40 ～ 43 図、図版 20）

時末遺跡第 1･2 次調査で出土した石器・石製品についてまとめて報告する。石器には石鏃・スクレイパー、石斧といった打製石器や石包丁などの磨製石器がみられる。前者は縄文時代、後者は弥生時代に属するものが多かろう。石製品としては石錘の他に滑石製の垂飾の未製品とみられる遺物が出土した。調査区の北側に位置する塔田琵琶田遺跡第 4 次調査地点では滑石製品・未製品が大量に出土しており、一連のものであろう。

打製石器（1 ～ 30）　1 ～ 18 は石鏃。基部の形状は 3･5･6 のように浅い抉りがあるもの、4･11 のようにやや深いもの、12 のような鍬形鏃、13 のように平基になるものなどのバリエーションがある。9 がいわゆる鋸歯鏃である。6 の形状は五角形に近い。16 ～ 18 は大型で基部に抉りを持たない。石材は 5･6 が安山岩製で、他はいずれも黒曜石。黒曜石には腰岳産と姫島産がある。尖頭器状の 18 は裏面に素材の剥離面を残す。材質はチャート。19 ～ 21 はスクレイパー。19 は尖頭器

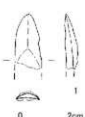


第 43 図　1･2 次調査区出土石器実測図その④（1/4）

状で、表面は右側縁から基部にかけて表裏両面から細かい剥離を行い、裏面の右側縁はわずかに加工を行うが素材となった剥片の剥離面を残したままである。長さ8.7cm、幅2.4cm、厚さ1.0cmと厚みがある。21・22は素材の下縁部に加工を加えて刃部としたもの。21大縁部の細かい剥離は刃こぼれか。19・22は安山岩。21は姫島産黒曜石。23は錐。縦長剥片の先端部に大剥離面からの押圧により尖らせ、さらに細かい加工を加えて錐としたもの。24～30は扁平打製石斧。24・25はそれぞれ長さ11.4cm・12.2cmと小型で、両側縁の一部がわずかに抉れる。26は裏面に角礫の自然面を残し、周縁部に加工を加えている。石斧とするには疑問も残る。27～30は折損品。28は24・24と同じ小型品。27は基部、29・30は刃部が円刃となる。26・30が安山岩のほかはいずれも結晶片岩。

磨製石器（31・32・34）　31・32は磨製石斧。31は刃部が欠損する。全体によく磨かれているが、裏面に残る敲打痕から、成形時に敲打を行った後に磨いているという工程がわかる。石材は流紋岩系。32は素材となった円礫の面を残している。素材を得た後に、基部にわずかに加工を施している。刃部は全面磨かれている。34は石庖丁。孔の一方がかろうじて残っている。砂岩製。

石製品等（33・35・36～38）　33は石錘。扁平な円礫の両端を打ち欠いて紐掛かりとしたもの。35は砥石。両端部を折損する。使用面は2面のみ遺存する。使用面はよく磨れて部分的に凹面をなす。また、一部に使用痕とみられる製品の先端部の磨り痕が残っている。36・38は台石。36は表裏とも使用により面が平滑になっている。38は上面及び右側縁が使用により平滑になる。37は滑石製の垂飾。先端の一部を欠損する。全体を剣菱形に整え、周縁を磨く。表面から孔径1㎜の孔を穿っている。長さ11.5cm、最大幅4.6cm、厚さ2.3cmを測る。



第44図　1・2次調査区出土鉄器実測図（2/3）

（3）金属器（第44図）

調査区から1点の鉄器が出土しているので報告する。

鉄器（1）　1はヤリガンナの先端部の破片か。背には稜をもつ。3号方形竪穴状遺構から出土した。

6　総括

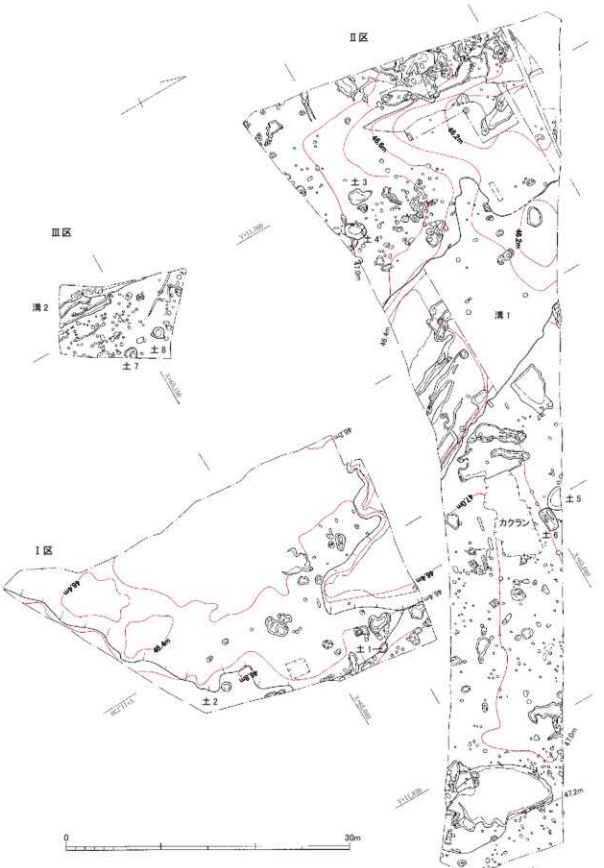
時末遺跡では、古墳時代～中世の遺構を調査し、縄文時代～中世の遺物が出土した。

縄文時代の遺構は出土せず、包含層などから遺物が出土したのみである。東に隣接する永久笠田遺跡では縄文時代後期～晩期の遺構・遺物が出土しており、この時期の遺物はここからの流れ込みであろう。また塔田琵琶田遺跡群全域に薄く縄文時代早～前期の遺物が散布しており、南端に当たる時末遺跡でもこの時期の遺物が出土するものであろう。

弥生時代の遺物は、おそらく西に隣接する西ノ原・大西遺跡群からの流れ込みとみられる。遺物の時期は前期末～中期、後期中葉～末で西ノ原・大西遺跡群の集落の時期と整合する。

古墳時代の遺構・遺物であるが、主に前期と後期の資料に分かれる。塔田琵琶田遺跡群の集落の存続時期と整合するもので、塔田琵琶田遺跡群に造営された集落の一部を構成していたものと評価できよう。

中世では数棟の掘立柱建物と溝が出土した。位置から見て、おそらく現在の永久集落から伸びる尾根上にこの時期の集落が存在するものとみられる。



第 45 図　永久笠田遺跡 2 次調査区遺構配置図（1/400）

Ⅳ　永久笠田遺跡の調査の報告

1　調査の概要

調査地点の所在　永久笠田遺跡は福岡県豊前市永久に所在する。県営農村活性化住環境整備事業（黒土西部第二地区）により行われた大規模な圃場整備に先立って、平成13年度に豊前市教育委員会が第1次調査をおこなっている。今次調査地は第1次調査の南西側隣接地にあたり、地番では豊前市永久32･34－1～4のそれぞれ一部にあたる。

調査地点の周辺環境　調査地点は、豊前市役所から求菩提山へと伸びる福岡県道32号犀川豊前線の東250mほどに位置する。遺跡は南から北へと伸びる尾根状低台地の上に立地しており、西は時末遺跡・塔田琵琶田遺跡ののる南北に細長い埋没低台地との間に幅約50mほどの谷地形があり、また約200mほど東には岩岳川が北流していて遺跡ののる低台地を区切っている。第1次調査、また東九州自動車道建設に先立つ試掘調査の成果などから、遺跡の広がりは東西ともに尾根状台地の端部ぎりぎりにまで広がることが判明している。今次調査地は台地の西端部にあたる。

2　調査の成果

（1）概要

調査区の概要　調査は豊前市教育委員会による調査の周辺部に点在していてⅢ区に分けられ、Ⅰ区が南西側、Ⅱ区が南側、Ⅲ区が西側に位置する。いずれも、西に隣接する時末遺跡ののる埋没低台地とは幅50mほどの埋没谷を挟んで東に広がる低台地上～西側落ち際にあたり、遺跡の西側を調査したことになる。調査でも、Ⅰ区の西端部とⅢ区の西端部で地形の落ち際を検出しており、そこから西は谷地形となることが判明した。遺構面はⅠ区・Ⅱ区が標高46.5～46.7m、Ⅲ区は45.5m前後で、北に向かって緩やかに傾斜している。

基本土層　基本層序は、Ⅰ区では表土下に暗茶褐色土、その下に灰色土と暗茶褐色土の埋め土があり、これを除去した黄褐色粘質土面が遺構面となる。Ⅱ区では表土下の暗茶褐色土除去後、Ⅲ区では表土下に黒灰色土の埋め土（暗褐色土がブロック状に混入）の下に、茶褐色シルト層、さらに下層の暗茶灰色土を除去して遺構面に至る。

検出遺構　検出した遺構は、Ⅰ区で土坑2基、Ⅱ区で土坑4基・溝1条、Ⅲ区で土坑2基・溝1条で、その他ピットを確認した。遺物の出土が少なく時期を特定できる遺構は限られるが、調査区内からは縄文時代の所産とみられる打製石器の他に弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器などが出土しており、縄文時代～中世の幅広い時期にわたるものであろう。遺構密度はきわめて疎らである。

（2）土坑

1号土坑（第46図、図版23）

Ⅰ区の東北東隅部の台地縁辺部で検出した。平面形は長円形で、長軸長1.0m、短軸長0.7m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色粘質土で、底面は礫層に達している。出土遺物はなく、所属時期は不明。

2号土坑（第46図、図版23）

Ⅰ区の南東隅部の台地縁辺部で検出した。平面形は円形で、上端は径1.0m、下端は径0.7m、深さ0.2mを測る。底面はフラットである。埋土は黒色粘質土である。出土遺物はなく、所属時期は不明。

3号土坑（第46図、図版24）

Ⅱ区の南西部で検出した。平面形は不整形で堀方が北側に張り出している。底面はフラットで、北壁は緩く立ち上がる。上端は長軸長2.5m、短軸長1.5m、下端は長軸長1.7m、短軸長0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は黒灰色粘質土。出土遺物はなく、所属時期は不明。

4号土坑（第46図、図版24）

Ⅱ区の南西部、3号土坑の東側で検出した。平面形は長円形に近い不整形である。床面は西側に浅いテラスが二ヶ所にある。底面の長軸方向はフラットだが、短軸方向は中央部が最も低く、そこから緩やかに壁が立ち上がる。上端は長軸長2.2m、短軸長1.7m、下端は長軸長1.5m、短軸長0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は黒灰色粘質土。出土遺物はなく、所属時期は不明。

5号土坑（第46図、図版24）

Ⅱ区の中央部、東壁際で検出し、東側は調査区外に伸びる。平面形は確認できた部分では円形である。底面はほぼフラットだが、中央部がもっとも深い。壁は緩く立ち上がる。上端径2.3m、下端径1.6m、深さ0.5mを測る。埋土は自然堆積をしているようで、下層から黒茶色～暗黄褐色の粘質土で、最上層は茶褐色粘質土に暗黄褐色粘質土のブロックを含んでいる。出土遺物はなく、所属時期は不明。

6号土坑（第46図、図版25）

Ⅱ区の中央部、東壁際で検出し、5号土坑の東側に位置する。平面形は略方形で、北東側と南東側にテラスをもつ。長さ2.4m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。埋土にしまりがないことから近・現代の撹乱である可能性がある。

出土土器（第48図）

須恵器（1）　1は坏蓋。調整は内外面ともヨコナデ。口径13.0cm。

7号土坑（第46図、図版25）

Ⅲ区の東端部で検出し、南側の一部は調査区外に伸びる。西側にテラスをもつ。平面形は不整円形で、テラス部はフラット、深い部分は東側に向かって傾斜している。上端径は1.4m、深さ0.15mを測る。出土遺物はなく、所属時期は不明。

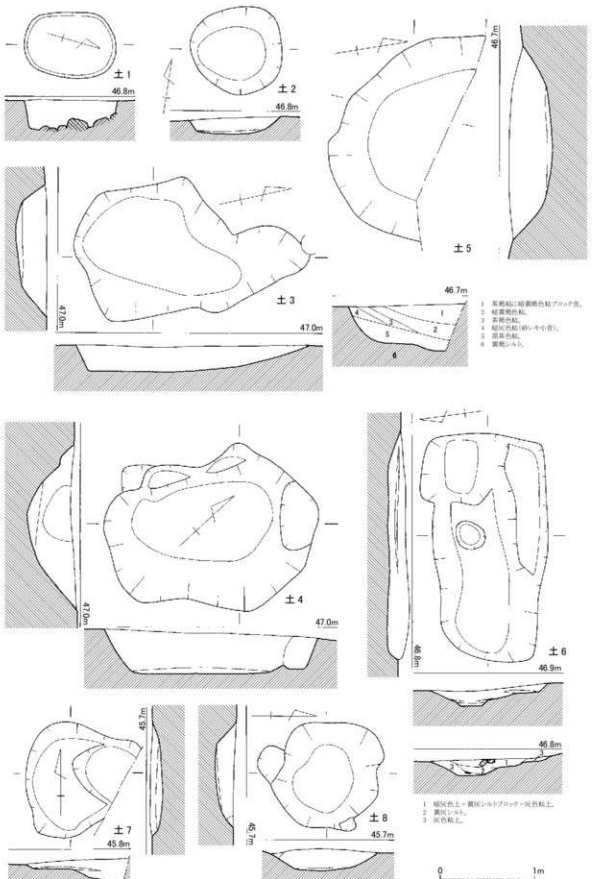
8号土坑（第46図、図版26）

Ⅲ区の東端部で検出し、7号土坑の北側に位置する。平面形は略円形で、壁はフラットな底面から緩く立ち上がる。上端径1.2m、下端径0.7m、深さ0.2mを測る。出土遺物はなく、所属時期は不明。

（3）溝

1号溝（第45図、図版22）

Ⅱ区の西側で検出した溝で、遺物が出土していないことから自然流路とみられる。南側は両岸の上端が直線的で、幅15mを測る。北側の上端は西側の溜まり状の窪みに切られているためか、張り出したり幅を減じたりしている。底面は溝の上端と併行する方向に数条の溝状となっている。埋土は小礫を含んだ砂層である。遺物が出土しないことから南半部のみ掘削を行った。出土遺物はなく、所属時期は不明。



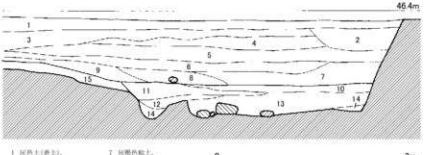
第 46 図　1 ～ 8 号土坑実測図（1/40）

2号溝（第45･47図、図版23･26）

Ⅲ区の西端で南北方向の溝の東肩を幅10mにわたって確認したのみである。溝の肩は直線的であるが、自然流路（谷）となる可能性がある。東側から西側に向かって緩やかに傾斜しながら谷に至るが、その傾斜面に認められる変換点を谷の肩とすれば深さは0.3mとなる。底面はフラットである。埋土は上層に灰褐色粘土層が数cmの厚さで堆積し、下層は暗灰色粘土層である。この溝からは比較的まとまった量の遺物が出土している。

出土土器（第48図、図版27）

弥生土器（2～10）　2～6は複合口縁壺の口縁部。端部は丸く収める。5は屈曲部が強く突出し、また、口縁端部と同様に明確な面をなしている。調整は5･7の口縁部内面に板ナデのような痕跡が残る。7の頸部外面は細かい縦方向のハケ、内面は細かい横方向のハケである。いずれも弥生時代終末期から古墳時代の前期。8は鍬先状口縁の甕の口縁部片。内側は欠けているが、大きく突出するようである。弥生時代中期後半。



第47図　2号溝土層図（1/60）

土師器（9～16）　9～13は土師器の甕。9は体部が球形になるもの。11･12は体部が長卵形になる。調整は11の外面がハケ、口縁部内面は横方向のハケ、体部内面はナデ。12は外面が縦方向の粗いハケ、内面はケズリ後、斜位のハケが遺存する。13は頸部が締まる壺形になる。口縁端部はわずかにつまみ上げる。調整は外面が粗いハケ。内面は磨滅が著しく調整不明。14は土師器の高坏。調整は脚部外面が縦位のハケ。15･16は甕か壺の胴部片。ともに周縁を打ち欠き円形に整えているようである。16には細かいハケ目が残る。

縄文土器（17･18）　17は縄文時代後期の深鉢の口縁部。屈曲部の外面は突帯状に張り出し、斜位のキザミを入れる。18も同時期の鉢。体部が球形になるもので、口縁部と体部の境に二条の沈線をまわし、その下部に貝殻腹縁の押圧によるキザミを横位に施す。

（4）その他の出土遺物

包含層等出土土器（第48図）

遺構検出中、撹乱内、あるいは表土中などから若干の土器が出土している。以下に報告していく。

須恵器（19）　19は須恵器高台坏。断面四角形の高台を貼付する。調整は内外面ともナデ。

瓦質土器（20）　20は瓦器椀の口縁部。調整は著しく摩耗していて不明。

調査区出土のその他の遺物（第49図、図版28）

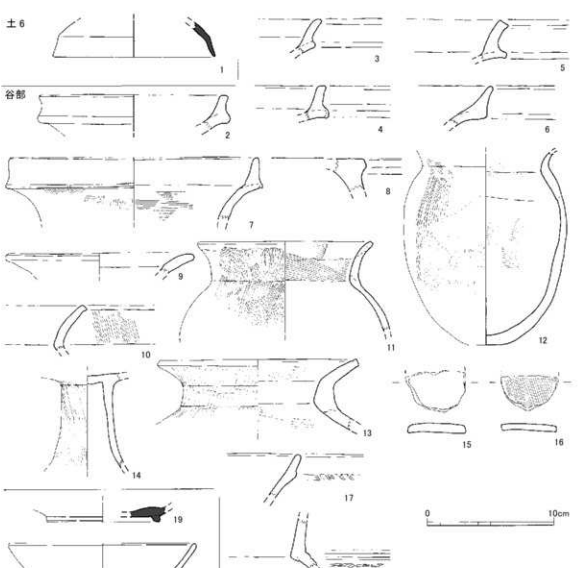
調査区内からは打製石器・磨製石器・石製品などが若干量出土している。まとめて報告する。

打製石器（1～4）　1は石鏃。基部に深めの抉りを入れる。長さ1.5cm、幅1.4cm、厚さ0.25cmを測る。安山岩製。Ⅰ区の谷部から出土した。2･3は石匙。2は横長の石匙でつまみ部は太く長い。横長剥片を素材とする。長さ3.0cm、幅3.3cm、厚さ0.7cmを測る。安産岩製。1号土坑からの出土。3は縦

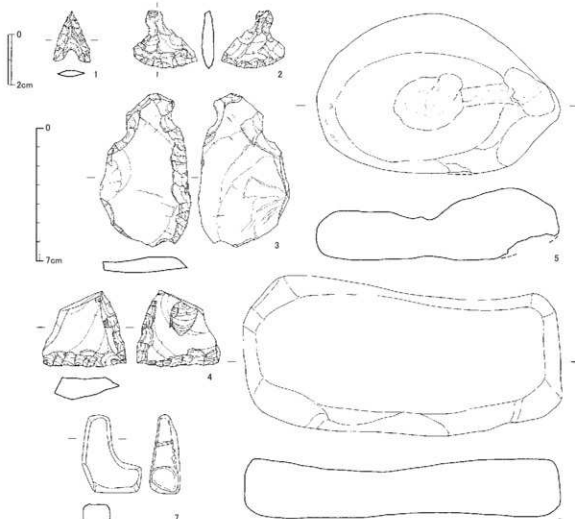
長の石匙。左側縁部から下縁部にかけて素材を生かした刃部とし、右側縁部には細かい剥離により刃潰しを行う。右側縁部には打点が残る。また主要剥離面側の下縁には使用痕の可能性がある細かい剥離が認められる。長さ8.1cm、幅4.8cm、厚さ0.7cmを測る。安山岩製。2号溝出土。4はスクレイパー。素材の剥片の二辺に細かい加工を加えて刃部をつくりだしている。上部には打点を残す。長さ3.9cm、幅4.4cm、厚さ1.2cmを測る。乳白色の黒曜石製。2号溝から出土した。

磨製石器（5･6）　5は磨石。長円形の周縁部と上面が平滑に磨れている。また、中央部に長さ3.7cm、幅2.3cmの三重の凹みがあり、敲石としても使用している。長さ12.9cm、幅8.5cm、最大厚3.8cmを測る。凝灰岩質安山岩製。6も磨石。上面の中央部より左に寄った部分がよく磨れて凹んでおり、また周縁部も磨れて平滑になる。長さ16.7cm、幅8.6cm、厚さ3.4cmを測る。ともに2号溝出土。

石製品（7）　7は石杵のような形状の石製品であるが、用途はわからない。全面を磨って仕上げ、内側の屈曲部には工具で削った痕がある。また、外側の屈曲部は平面をなしていないため、折損した可能性も捨てきれない。長さ3.9cm、幅3.1cm、厚さ1.2cmを測る。Ⅱ区1号溝西側の黒灰色土層中から出土した。



第48図　遺跡出土土器実測図（1/3）



第 49 図　遺跡出土石器・石製品実測図（1 は 2/3、2 ～ 7 は 1/2）

3　総括

発掘調査では、時期を特定できる遺構がわずかであったが、縄文時代後期、弥生時代後期後半～古墳時代初頭、古墳時代後期の遺物が出土した。このうちⅢ区では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭のピットが密集して確認され、また同区の谷部からは比較的まとまった遺物が出土した。この谷部からは縄文時代の石器類と後期の土器が出土していることから、当該期の集落が谷の東側の微高地上に展開していたものとみられる。Ⅱ区の北側及びⅢ区の東側隣接地の台地上は平成 13 年に豊前市教育委員会が発掘調査を実施し、住居跡などは確認されていないものの今回出土した遺構・遺物群と同じ様相を示している。

またⅠ区及びⅢ区の西端部で西側に落ち込む谷の肩部分を確認し、永久笠田遺跡の東側で調査を行った時末遺跡との間に蛇行する浅い谷があるという旧地形を復元することができた。

【参考文献】

坂梨祐子・棚田昭仁 2014『永久笠田遺跡』豊前市文化財調査報告書第 33 集
林潤也 2002「北久根山式土器をめぐる諸問題」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会

図　版

1　調査区周辺の地形
（上が北）

2　時末遺跡 1･2 次調査
地（北から）

図版２

1　時末遺跡 1･2 次調査地（東から）

2　時末遺跡 1･2 次調査地（西から）

1　時末遺跡 1 次調査区
（上が北）

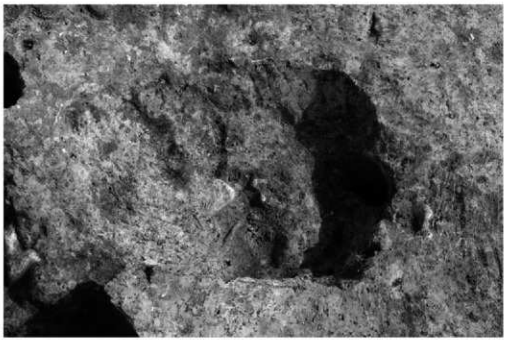
2　時末遺跡 2 次調査
Ⅰ区（上が北）

図版４

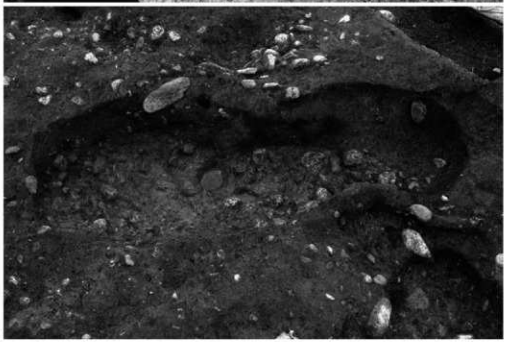
1　第１次調査基本土層
（調査区北壁）

2　第２次調査基本土層
（東側トレンチ北壁）

3　１次８・９・20 号土坑
（北西から）



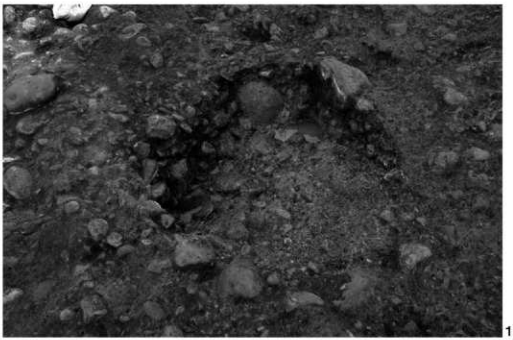
1　1次10号土坑（西から）



2　1次12号土坑（北から）

3　1次15号土坑（北から）

図版６



1　１次18号土坑(西から)

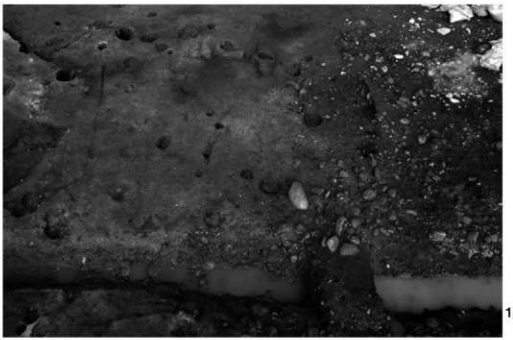
2　１次１号溝土層
（東から）

3　１次１号溝（東から）

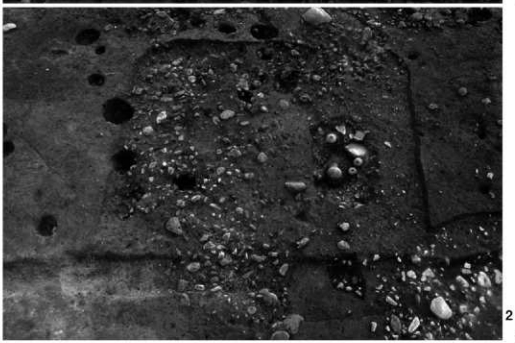
1　２次Ⅰ区１･２号竪穴住居跡（南から）

2　２次Ⅰ区３号竪穴住居跡（北から）

3　２次Ⅰ区３号竪穴住居跡炉跡土層（北から）



1　２次Ⅰ区６号竪穴住居跡（南から）



2　２次Ⅰ区２号方形竪穴状遺構（北から）

3　２次Ⅰ区２号方形竪穴状遺構内土坑遺物状況（北から）

１　２次Ⅰ区２号方形竪穴状遺構内土坑完掘状況（北から）

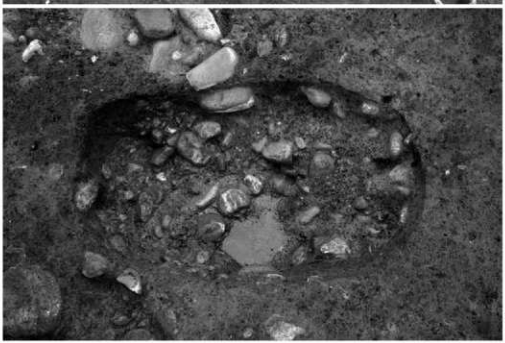
２　２次Ⅰ区１号土坑（東から）

３　２次Ⅰ区24号土坑（南西から）

図版 10

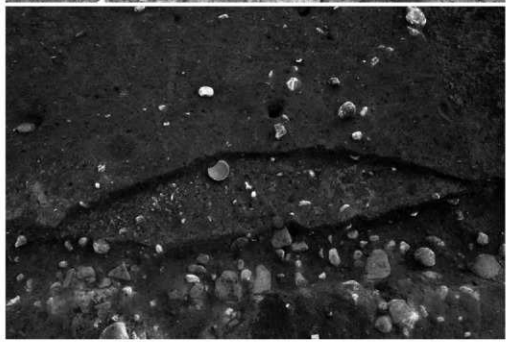
1　2次Ⅰ区 26 号土坑
（北から）

2　2次Ⅰ区 27 号土坑
（北から）



3　2次Ⅰ区 30 号土坑
（北西から）

1　2次Ⅰ区 31 号土坑
（北から）



2　2次Ⅰ区 36 号土坑
（北から）

3　2次Ⅰ区 37 号土坑
（北から）

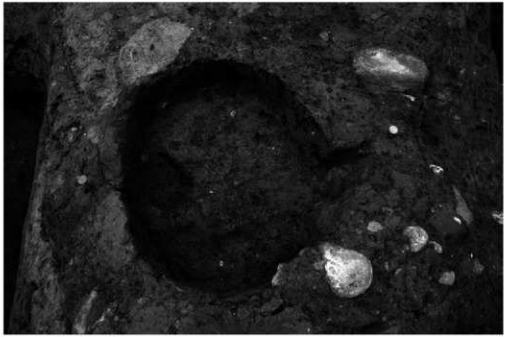
1　2次Ⅰ区 37 号土坑土層
（北から）

2　2次Ⅰ区 4 号溝土層
（東から）

3　2次Ⅰ区 5･8 号溝土層
（南から）

1　2次Ⅰ区13号溝土層
（南から）

2　2次Ⅰ区1号炉跡土層
（南から）



3　2次Ⅰ区1号炉跡
（南から）

図版 14

1　2次Ⅱ区北側全景
（西から）

2　2次Ⅱ区南側全景
（西から）

3　2次Ⅱ区1号掘立柱建物跡
（北西から）

1　２次Ⅱ区１号土坑
（西から）

2　２次Ⅱ区２号土坑
（東から）

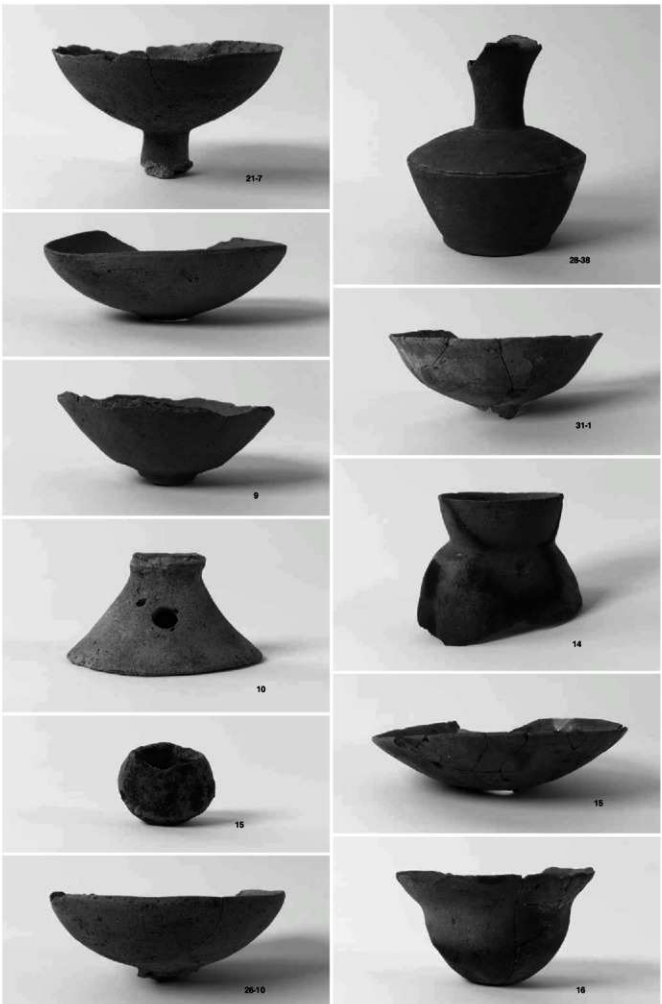
3　２次Ⅱ区３号土坑
（西から）

1　2次Ⅱ区1号溝土層
（北西から）

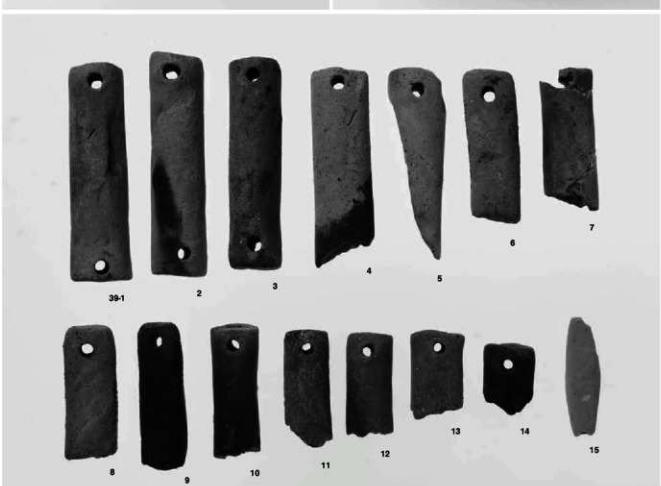
2　2次Ⅱ区1･2号溝
（南から）

3　2次Ⅱ区3号溝
（南から）

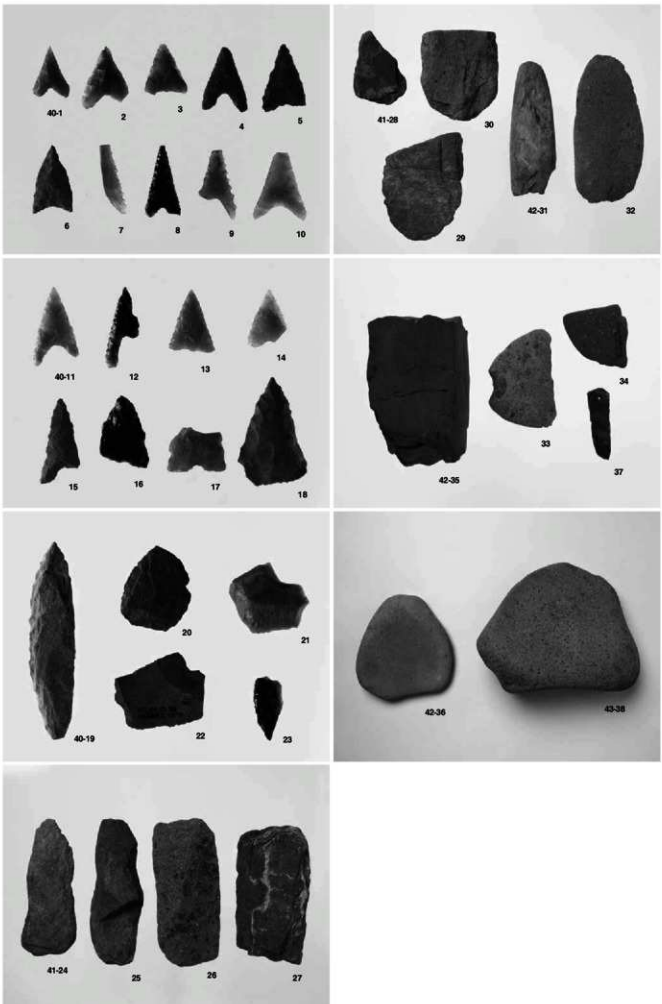
1 次調査区包含層等出土土器、2 次Ⅰ区 2･3 号竪穴住居跡 ･2 号方形竪穴状遺構出土土器



2·3 号方形竪穴状遺構、36 号土坑、5 号溝、1 号炉跡、ピット出土土器



2 次調査 I 区包含層等出土土器、遺跡出土土製品


40-1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
41-28
30
42-31
32
29
40-11
12
13
14
15
16
17
18
42-35
33
34
37
40-19
20
21
22
23
42-36
43-38
41-24
25
26
27

遺跡出土石器・石製品

1　永久笠田遺跡全景
（北東から）

2　永久笠田遺跡Ⅱ区全景
（左上が北）

1　永久笠田遺跡Ⅰ区全景
（北東から）

2　永久笠田遺跡Ⅱ区東半部
（北西から）

3　永久笠田遺跡Ⅱ区西半部
（東から）

1　永久笠田遺跡Ⅲ区全景（東から）

2　1号土坑（東から）

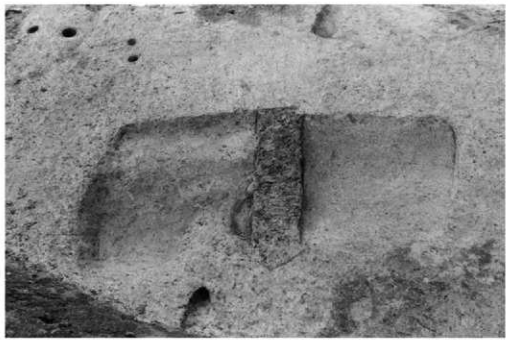
3　2号土坑（南東から）

図版 24

1　3 号土坑（西から）

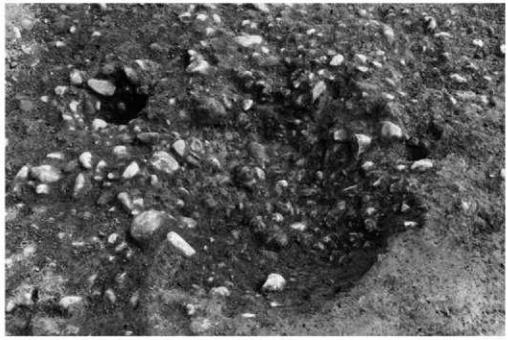
2　4 号土坑（西から）

3　5 号土坑（南から）



1　6 号土坑（北から）

2　7 号土坑（西から）



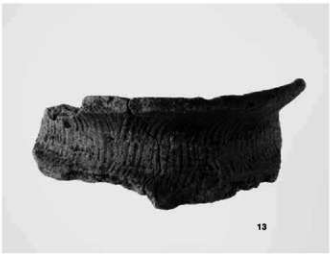
3　8 号土坑（西から）

図版 26

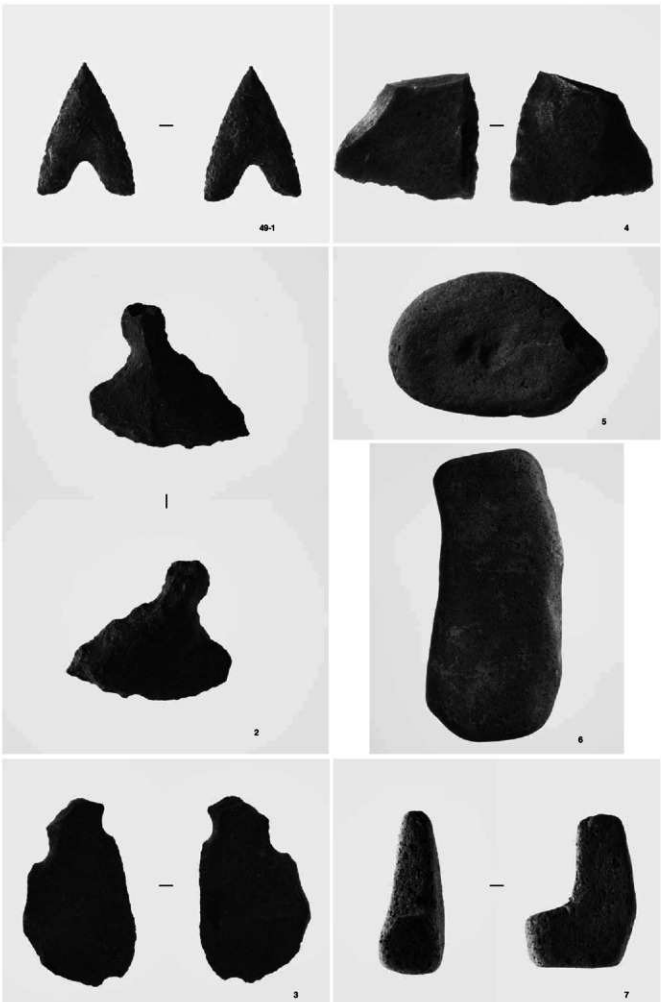
1　2 号溝（北西から）

2　Ⅲ区のピット群（北から）

3　調査風景



永久笠田遺跡第 2 次調査出土土器



永久笠田遺跡第 2 次調査出土石器

報告書抄録

ふりがな	ときすえいせきだい1・2じ、ながひさかさだいせきだい2じ
書名	時末遺跡第1·2次、永久笠田遺跡第2次
副書名	福岡県豊前市大字永久所在の遺跡
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	24
編著者名	小澤佳憲（編）、吉村靖徳、岩橋由季
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢5208－3　（Tel：0942-75-9575，Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2016年（平成28年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ときすえ 時末遺跡1次	ぶぜんしおおあざながひさ 豊前市大字永久121·122	40214	—	33° 35' 14"	131° 7' 33"	20111201 / 20120306	915㎡	高速道路建設
ときすえ 時末遺跡2次	ぶぜんしおおあざながひさ 豊前市大字永久60-1·121·122·570-1	40214	—	33° 35' 14"	131° 7' 33"	20120427 / 20121206	2,845㎡	高速道路建設
ながひさかさだ 永久笠田遺跡2次	ぶぜんしおおあざながひさ 豊前市大字永久32-34－1～4	40214	150267	33° 35' 11"	131° 7' 33"	20121031 / 20130228	2,300㎡	高速道路建設

所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
時末遺跡1次	集落	縄文時代 古墳時代 中世	土坑・溝 （時期不明）	縄文土器 石器 土師器 陶磁器	
時末遺跡2次	集落	縄文時代 古墳時代 中世	土坑・溝 （時期不明） 竪穴住居跡 掘立柱建物跡	縄文土器 石器 土師器 陶磁器	
永久笠田遺跡第2次	集落	縄文時代～中世	土坑 溝	縄文土器 石器 弥生土器 土師器・須恵器 瓦質土器	

調査の概要

時末遺跡第1·2次

塔田猛琶田遺跡の古墳時代集落の南端部を調査した。古墳時代前期・後期の竪穴住居跡計7棟、中世の掘立柱建物跡3棟のほか、縄文時代～中世と考えられる多数の土坑・溝・ピットなどが出土した。

永久笠田遺跡第2次

土坑7基・溝2条のほか多数のピットを検出した。遺物としては縄文時代～中世にかけての土器・石器が少量出土した。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
ＪＨ	2117104
登録年度	登録番号
27	002

時末遺跡 1･2 次
永久笠田遺跡 2 次

―福岡県豊前市永久所在遺跡の調査―

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 24

平成 28 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館

〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15